

MEMOIRS
OF THE
TOHOKU INSTITUTE OF TECHNOLOGY

Ser. II : Humanities and Social Sciences

No. 34

March 2014

CONTENTS

Method Development for Safety Education Based on Students' Self-Understanding	K. OGAWA	1
The Report of Training for Peer Supporter : Attempt Using the Structured Group Encounter	H. KAMINISHI and K. MORITA	11
Report of Women's Career Formation in Southern Area in Fukushima Prefecture	Y. USUBA and J. WATANABE	25
A Case Study of Teacher Education Program based on High School and University Collaboration : A One-day Teaching Practice at a Public High School for Stu- dents at Tohoku Institute of Technology	K. SATO and N. NAKAJIMA	39
A Case Study of Teacher Education Program at Tohoku Institute of Technology using RISHU-KARUTE : A Midterm Report of Guidance and KYOSHOKU-JISSEN- ENSHU	N. NAKAJIMA, K. OGAWA, F. KATAYAMA, K. SATO and S. SUZUKI	47
A Translation of 'Introduction' in <i>D.H. Lawrence, The Plays</i> (Cambridge University Press, 1999) (4)	K. TAKAHASHI and M. GOTO	59
An Autobiography (2)	T. YOKOYAMA	75
The Demystification of Emigration : Domestic Agricultural Crisis, Tragedy, and Hardy's Anti-Imperialism	J. SUZUKI	85

TOHOKU INSTITUTE OF TECHNOLOGY
Sendai, Japan

ISSN 0285-3825

東北工業大学紀要

II 人文社会科学編

第 34 号

2014 年 3 月

目 次

生徒の自己理解に基づく安全教育方法の開発	小川 和久	1
ピア・サポーター宿泊研修における取組 — 構成的グループエンカウンターを用いた試み —	上西 創・森田 健一	11
地方における女性のキャリア形成の事例報告 — 福島県浜通り南部地域を事例として —	薄葉 祐子・渡部 順一	25
東北工業大学における学校との連携による教職課程の事例 — 県立高等学校での「一日実習」の取り組み —	佐藤 三之・中島 夏子	39
東北工業大学における履修カルテとその活用事例 — 教職指導と教職実践演習の取り組みの中間報告 —	中島 夏子・小川 和久・片山 文雄 佐藤 三之・鈴木 伸一	47
序文 劇作家 D.H. ロレンス (翻訳) (4) D.H. ロレンス, 『戯曲集』 編者: ハンスーウィルヘルム・シュワルツェ&ジョ ン・ワーゼン (出版社: CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS 出版年: 1999 年)	高橋 克明・後藤 眞琴	59
自叙伝 (2) (翻訳)	横山 竹己	75
移住神話の終焉 — 国内農業危機, 悲劇, ハーディの反帝国主義 —	鈴木 淳	85

東北工業大学
仙台

東北工業大学紀要

(II 人文社会科学編)

第三十四号

二〇一四年三月

生徒の自己理解に基づく安全教育方法の開発

小 川 和 久*

Method Development for Safety Education Based on Students' Self-Understanding

Kazuhisa OGAWA

Abstract

A bicycle safety education program was developed for high school students. This program focuses on self-understanding of the students' behavior on the road. To facilitate self-understanding, we employed a "mirroring method" that required students to understand self-images reflected in other road users' behavior, using visual materials, a bicycle simulator, and coaching techniques. We utilized a "twenty statements method" to evaluate quantitative and qualitative changes in self-understanding. Thirty-one students participated in the program. The number of statements that these students described about their self-images of riding a bicycle significantly increased after the program. In addition, the students used more key words regarding safety such as "looking right and left," "slow down," and "pedestrian safety." The following issues will be discussed in the future: analysis of the relationship between self-understanding and behavior modification, improvement in the evaluation method, and dissemination of the educational approach based on self-understanding among high schools.

1. 背景と目的

1.1 はじめに

本研究の目的は、高校生の自転車利用の安全について新たな教育方法を開発するとともに、その教育効果を測定することである。前者の教育方法に関しては、自己理解型の教育的アプローチを提案し、後者の教育効果の測定に関しては、自己の行動の姿に関する知識を量的・質的に測定する手法を提案する。

高校生の自転車事故の多さは、児童生徒の中でも際立っており、学年別にみた交通事故死傷者数の統計データ（警察庁平成24年中の事故データ：文部科学省DVD教育教材「安全に通学しよう」¹⁾に収録）によると、とりわけ中学から高校へ進学する年代で、通学中の交通事故死傷者数が5倍以上になるなど大幅な増加傾向が示されている。しかも、その大半が自転車乗車時の事故となっている。通学時に自転車利用の生徒

が増えること、学校までの移動距離が長くなることなどがその要因の一つと考えられるが、とくに高校1年生の自転車事故が多く、進学時に新しく変わった通学環境への適応が不十分であることが示唆される。

こうした実状を踏まえ、学校現場や警察等の地域の関係機関は、様々な教育の機会を通して、高校生を対象とした自転車教育の推進に取り組んでいる。しかし、交通安全教育に対する高校生の姿勢は一般に熱心なものではなく、効果をもたらす教育を実現するには方法論的にいくつかの課題を解決しなければならない。とくに伝統的な安全教育の手法である、知識と技能を指導者が伝達するという教育方法では効果に限界があり、態度変容や行動変容を導いて自転車事故を減少させるという目に見える効果は見出しにくい。

新たな教育方法が模索されている中で、近年、注目されつつあるのが、自己理解に基づく教育的アプローチである。一般ドライバーを対象とした感情コントロール教育²⁾や、コーチング技法を用いた高齢ドライバー教育³⁾などで、自己理解や自己評価がもたらす効果が少しずつ報告されつつある。交通行動をより安全

2013年10月22日受理

* 共通教育センター教授

なものにするためには、習得された個々の技能に対して、客観的な自己評価をもつことが重要であり⁴⁾、それをもとに個々人が自らの課題を認識し、行動修正のための目標を設定していくことが求められる。ただし、客観的な自己評価をもつということを、従来型の上から下へ教え込むという指導スタイルで導くことは難しいと指摘されている。とくに、青年期にある高校生に対して、指導者が上から教え込むスタイルで自己評価を求めた場合、心理的反発を招いてしまい、教育効果が見込めなくなることが往々にして起きる。客観的に自分を知るためには、気づき、振り返りといった内省的なプロセスが不可欠であり、安全であるために「自分は何ができて何ができていないのか」、「自分は何を理解し何を理解していないのか」といった、いわゆる自己理解の思考プロセスが必要となる。自己理解型の教育方法とは、このように学習する生徒に主体をおいた教育的アプローチを用いることにその特徴がある。

平成24年度から28年度までの5年間に、安全教育の充実化と学校安全体制の整備をより一層推進させることを定めた文部科学省による指針「学校安全の推進に関する計画」⁵⁾の中にも、高校生の自転車教育の問題が触れられている。「児童生徒等に対する自転車教育について、とくに、中学生・高校生が加害者となる自転車事故が課題となっており、今後は、例えば自らの自転車の乗り方が安全なのかを理解できるような、自己理解、自己評価型の教育を進める必要がある」と明記されており、教育行政機関が推し進める安全教育の指針においても、自己理解、自己評価が重要なキーワードとなっている。

確かに、周囲を確認することもなく交差点に勢いよく進入する、そのような若年者の自転車走行の姿をよく見かける。危なっかしい乗り方をやってのける背景には、自分たちの行動が客観的に危険であるという認識が大いに欠けているという問題がある。若年者の自転車の乗り方の問題点は、他者の視点から見た自己の行動の姿がイメージできないことにあり、自己の行動に対して持ち合わせている客観的な知識が圧倒的に不足していることにあるという考え方⁶⁾は、自己理解型教育の具体的なプログラムを開発するにあたっての基本コンセプトとなり得る。そこで、本稿では、自己理解に基づく教育方法の原理と、それを具体化した自転車教育のプログラムを実践事例とともに紹介する。加えて、自己理解が向上したかどうかを把握するための新たな測定方法を提案し、その適切性を検討したい。

1.2 自己理解に基づく教育方法とは

自己理解を促すための有効な教育方法として、自己観察法と他者観察法が用いられることが多い。前者の自己観察法とは、自己の行動の姿を第三者の視点から観察し、自己の行動の問題点に気づき自己修正を行うという教育方法である。後者の他者観察法とは、ミラーリング法 (mirroring method) と呼ばれ、他者の姿を鏡として、自己の行動を振り返り自己修正するというものである。いわゆる「人の振り見て我が振り直せ」という諺に対応する学習スタイルを、教育方法として具体化したものとなる。フィンランドの若年兵士に対する運転者教育⁷⁾として考案されたのが始まりであり、現在、運転者教育の先駆的な事例に、この手法がしばしば応用されている。

自己観察法は、自己の行動が直接観察対象となるため、どちらかと言うと個別対応の教育であり、集団を対象とした場合、効率性という点で課題が多い。学校現場での普及を考慮するならば、ある程度の規模をもった集団を対象とした交通安全教育でないと、授業計画をどう立案するかという運用上の問題が生じてしまう。そこで、今回、開発する教育プログラムは、集団を対象とした場合でも運用可能な他者観察法をベースに、教育内容を構成することとした。具体的には、他者の自転車走行の姿を観察することで、自分の自転車走行の姿を振り返り、自己修正の意識を高めていくという内容となる。

他者観察法には、いくつかの指導ポイントがある。第一に、他者の行動を観察する際に、見る視点を定めるということである。映像を用いた他者観察法の教育教材⁸⁾⁹⁾では、提示する交通場面に対して、「どのような危険があり、どうすれば安全になるか」という観点で議論を行い、危険や安全の基準を明確にすることを求めている。

理想的な安全走行の基準を明確にした上で観察すると、他者の行動がいかに不安全な方向にぶれてしまっているかが見えてくる。言い換えると、理想の安全運転の軸からぶれているのに、無意識の内にそれを受け容れてしまっている自分たちの姿に気づくことになる。安全運転の2つの軸¹⁰⁾、「理想の軸 (こうあるべきだという理想的な安全運転の軸)」と「許容の軸 (多少崩れてはいるが、たぶん大丈夫であろうと自分が許容している安全運転の軸)」とのずれに気づいていくことが他者観察法の第一のねらいとなる。

第二の指導ポイントは、自己との関わりが意識されるように展開していくことである。他者観察法で提示

される他者の行動の姿は、結局は他者の問題であり、自分との関与が必ず意識されるというものでもない。他者の姿を鏡として自分の姿を見ているかどうかは、受講者の受け止め方次第という側面がある。そこで、自己との関与を意識するための働きかけが必要となってくる。

後述するコーチング技法の中に、スケーリングクエスションという手法がある。自分はどうなのかと振り返る際、自己の行動が安全であるかどうかに関して点数を付けるという手法である。たとえば、他者の行動の姿を観察した後、自己の自転車の乗り方について点数をつけるとする。もし10点満点中7点だと評価するならば、自己の走り方について減点した分、何らかの不安な側面を意識しているということになる。10点満点にするにはどのような点を改善すればよいかと考えることで、本人が意識している問題点がより明確になり、行動修正の目標が具体的なものになっていく。減点分、どこかに向上させる余地があると解釈し、向上させる余地として何があるかを考える、このような働きかけを第二の指導ポイントとして指摘しておく。

1.3 教育教材機器

他者の行動の姿を観察するための教育教材としては、映像教材がもっとも汎用性があり使いやすい。道路上で観察される自転車走行の姿をそのまま映像にしたものでも、前述の2つの指導ポイントを踏まえることで十分に教材になり得る。

映像教材の他に、他者の行動の姿を観察するための教材機器として、本研究では自転車シミュレータの新たな活用方法を模索している。自転車シミュレータとは、室内で自転車走行を模擬体験できる装置である。機器の形状自体は自転車とほぼ同じであり、自転車を走らせるときと同じ操作（ハンドル、ブレーキ、ペダルの操作）が求められる。しかし、車両そのものが前に動くことはない。前面のモニターに、前景の様子がCG（コンピュータグラフィック）で映し出され、ハンドル、ブレーキ、ペダルの操作に応じて、前景の状況も変化していく。ペダルを踏めば前景の映像が動いて前へ進み、ブレーキをかければ映像の動きは止まり、ハンドルを動かせば進路方向を変えられる。

自転車シミュレータは、現実の道路上で実践的技能を学習するオンロード訓練と、模擬道路でバランスの取り方等の基本的技能を学習するオフロード訓練との中間に位置づけられる教材機器である。実際の道路上

を走らせての訓練には危険を伴うが、模擬道路での訓練では現実の交通状況が再現できないため、危険予測と危険回避の実践力が身につかない。自転車シミュレータの利点は、危険場面を室内で再現し、危険予測と危険回避という知識と行動の学習を同一条件で繰り返し体験できる点にある。オフロード訓練で不足する実践学習を補い、オンロード訓練への準備状態を形成するための教育機器として、自転車シミュレータを活用する意義があるものと考えられている¹¹⁾。

このような活用目的に照らし合わせて、実際に、児童生徒を対象とした教育で自転車シミュレータを用いる場合、危険回避の体験学習を重視する教育事例が多い。CGで示される危険場面をインストラクターが解説しながら、適切な危険回避を児童生徒が体験するというものである。しかし、限られた時間内に、児童生徒全員を体験させることは難しく、代表者が数名体験するだけで、実質上、デモンストレーションで終わる実践例が多い。体験学習の時間を短縮する代わりに、グループ討議のための教材提示と、代表者による模範行動の提示という活用方法で、安全確認に対する児童の意識が高まるという報告¹²⁾もあるが、いずれにせよ、活用方法に関しては何らかの工夫が求められている。

本研究では他者観察法を中軸に据えて、高校生向けの教育プログラムを開発することに主眼をおいていることもあり、他者の姿を提示する教材機器として自転車シミュレータを活用する方法を考えていきたい。代表者に自転車シミュレータを体験してもらい、その姿を他の生徒が観察する中で、自分であればどのような走り方をするかという振り返りの意識が自然と生まれてくるような内容としたい。他者の姿を鏡にして自分の行動を振り返るという一貫したテーマのもと、前述の映像教材と組み合わせて、教育プログラムを考案するものとする。

1.4 コーチング技法の応用

自己理解を導くためには、教材機器の他に、受講者との対話の技法が重要となる。課題の提示、受講者からの意見の引き出し、評価やフィードバックなど、インストラクターは受講者との間で何度も会話のやりとりを行う。この際、上から下へ教え込むような言い回しで指示すると、学習者中心の教育とはならず、自己理解が得られなくなってしまう。学習の主体が生徒自身であるような教育を実現するにあたっては、コーチング技法を適用することが望ましい。

コーチングの中核をなす原理として、すべての学び

の責任は学習者が負うこと、また学習者は教育の受け身の対象ではないという考え方がある¹³⁾。アクティブに学習することで、学習者自身が学びの材料を様々な獲得していく。このような考え方は、自己理解型の教育の理念と合致する。上から下へ教え込むという関係ではなく、対等の立場を維持しながら、学習者の気づきを促していくことが基本となる。GROW (Goal: 目標, Reality: 現実性, Option: 選択肢, Will: 意志) という略語で象徴されるように、コーチングは、学習者自身が自らの力で成長することを支援するという立場をとる。現実の自己の問題を理解し、どうすれば自己を向上させることができるか、その選択肢を考え、具体的な目標を設定し、それを実行する意志をもつこと、これがコーチングの目指す教育となる。

コーチングを実践するにあっては、オープンクエスチョンが多用される。「どのように思うか」「なぜそう思うのか」というように、答えを限定しない開かれた質問を行うことで、自ずと主体的な思考が展開される。答えを見出そうとあれこれ考えることで、学習の主体が生徒自身にあることが意識される。オープンクエスチョンをはじめ、行動目標の設定など、開発する教育プログラムには、このコーチングの原理を随所に適用するようにしている。

1.5 教育効果の測定

本研究のもう一つの目的は、自己理解の変化を測定するための評価ツールを開発することである。「自己理解が深まった」「自己理解が向上した」ことを示す実証的データを得るには、果たしてどのような測定方法が考えられるであろうか。

自己理解とは、自己についての体系的な知識を意味する包括的な概念である。意識している自分、すなわち主体的自我 (I) を測定することは方法論上困難であるため、一般的には客体的自己 (me) に関する知識 (自己概念とも言う) を測定する場合が多い。たとえば、Montemayor & Eisen¹⁴⁾ は、自己概念の形成過程を明らかにするため、「私は誰? (Who am I?)」という質問に対して、「私は……」で始まる文章を20通り作成するという課題を用いている。この手法は一般に「20 答法 (Twenty Statements Test)」と呼ばれている。この問いかけを10歳から18歳までの子どもに行い、得られた記述内容を分類すると、背丈などの身体的な特徴、所有物、所属地域などのカテゴリに関する記述は年少の子どもに多く、職業や個性の意識、対人的スタイルや心理的特徴といったカテゴリに関する

記述は、年長の子どものほど多くなるという調査結果が示されている¹⁴⁾。

本研究では、自転車走行に関わる自分の姿についての知識が不足していることが、不安全行動の一要因になっているという仮説に基づき教育プログラムを考案している。したがって、教育のねらいは、自己の自転車走行の姿についての知識が増える、あるいは知識の内容が質的に変化することにおかれる。自己の自転車の乗り方に関する知識が量的・質的に変化することを、自己理解の変化として捉え、その測定に20 答法を応用することとした。自分の自転車の乗り方について、「私は……」という文章を20通り完成させるという文章生成課題を、教育の前後で行う。生徒が作成した文章の量と内容を分析することで、自分の行動の姿に対する自己理解の変化を測定することとした。

2. 方 法

2.1 参加者

参加者は宮城県内の高校生31名である (男子23名、女子8名)。年齢は15~18歳であり、平均は16.8歳 ($SD = .87$) であった。宮城県の警察および教育関係機関が主催する「みやぎ高校生サイクルサミット (2013年8月開催)」の機会を利用して、開発した教育プログラムを試行した。

みやぎ高校生サイクルサミットとは、高校生の自転車事故が多発する昨今の傾向を懸念し、宮城県内の全高等学校に参加を呼び掛けている研修会であり、交通事故の実態把握、交通安全のための講習、交通事故の再現などの一連のプログラムから構成されている。

2.2 調査項目

教育効果を測定するため、教育プログラムの実施前後で20 答法による調査を2回行っている。今回、自転車教育の効果測定であることから、次の2つの条件を付加した。第一に、教示の際に、自転車乗車時の自己イメージについて回答するように指示している。具体的には「ご自分の自転車の走り方について、『私は……』で始まる文章の続きを、できるだけ多く思いつくまま書いてください」と教示している。回答用紙には、最大20個の文章が記述できるように記入欄を設定した。なお、自転車を利用しない生徒がいることを想定し、その場合は「ご自分の道路の歩き方についてお答えください」と教示を追加している。

測定にあたっての第二の条件は、一定時間内の回答

数を比較する必要があることから、回答時間を3分間に統一したことである。一定時間内に記述される自己イメージの数量をカウントすることで、教育前後での量的変化を分析することができるようにした。

2.3 教育プログラム

本研究で開発した教育プログラムは、大きく7つのステップから構成されている（表1）。自己理解を促すための重要ステップとして、まずステップ3で、安全な自転車走行に関する理想の姿を明確にするためのグループ討議を行う。その後、ステップ4にて他者観

表1 教育プログラムの概要

ステップ	項 目	内 容
1	講習の趣旨説明と学習テーマの提示	・講習の趣旨を説明し、生徒との間で学習テーマを共有する。テーマが『自転車の安全な走り方を考える』であることを示し、どうすれば事故を起こさないで、安全に自転車を走らせることができるか、またそのために一人ひとりができることは何かを考えていきたいと説明する。 ・学習の主体は生徒であることを述べ、積極的な参加を要請する。
2	代表者による自転車シミュレータ体験 《1回目》	・代表者を一人選出し、自転車シミュレータを体験する。自転車シミュレータのモニター映像（CG映像による前景）は会場前面にあるスクリーンにも投映されるので、他の生徒も前景の状況変化を観察することができる。他の生徒には代表者の自転車シミュレータの走行の様子を観察しながら、自分ならどのように走るかを考えるように指示する。 ・走行コースは、市街地の道路や歩道を通して、スーパーマーケットに行くコースであり、途中、信号交差点の横断、歩行者の飛び出し、横方向からの車両の進入など、いくつか危険場面に遭遇する。
3	安全走行の基準の明確化	・自転車事故の大半が交差点で発生していることを述べ、信号交差点を横断する際の安全走行のあり方を考える必要性を説明する。 ・信号交差点の場면을スライドで提示し、グループ課題を2つ提示する。一つは、提示された場面でどのような危険が考えられるか、もう一つは、どうすれば安全に横断できるかをグループで議論する。 ・グループ討議で提案された意見は、2つの課題それぞれに対して、1グループ4つずつ選定し、厚紙用紙に記入する。用紙1枚につき、1つの意見を大きく書き、ホワイトボードに掲示する。そのことで、グループ討議の結果を生徒全員に共有することにする。 ・インストラクターは、掲示された意見に対して、類似の意見をまとめるなどして分類を行う。重要点をまとめながら解説を加えるとともに、不明な点があれば、適宜、生徒に質問し、詳しい説明を求める。たとえば、「安全確認」という意見があれば、「何を確認するのか」「具体的にどのように確認するのか」と尋ね、意見内容をより明確にしていく。 ・このような生徒とのやりとりを通して、最後に、安全走行の基準を簡潔にまとめる。
4	他者観察（ミラーリング）	・他者観察のためのDVD映像を提示する。映像は、同年代の高校生が信号交差点を自転車で横断するときの様子である。DVD映像を観察した後、インストラクターは、他者の行動を見て気づいたことはないかと生徒に意見を求める。 ・必要に応じて、意見の掘り下げを行う。たとえば、確認しない人がいたという意見があれば、「なぜ確認しないのだろうか」と尋ね、一段掘り下げた議論を行う。
5	自己評価	・自分の走り方はどうかと尋ね、カードを手渡し、自分の走り方の安全度を100点満点で評価するように指示する。
6	行動目標の設定	・自己評価の点数をよりよくするためにどのような点を改善すればよいかと尋ね、各自の行動目標を考えてもらう。行動目標は、自己評価点を記入したカードに記入する。具体的な目標または現実的に実行可能な目標にするなど、目標を設定する際の留意点を述べる。
7	代表者による自転車シミュレータ体験 《2回目》	・再度、代表者が自転車シミュレータを体験する。1回目の体験者と同じ生徒とする。 ・1回目と同様、他の生徒には代表者の自転車シミュレータの様子を観察しながら、自分ならどのように走るかを考えるよう指示する。

察法を体験する。具体的には、他の高校生の自転車走行の姿を撮影した映像を観察する。用いた映像教材は、文部科学省 DVD 教育教材「安全な通学を考える」⁹⁾である。理想と現実との対比を通して、自分の姿はどうかと振り返るステップとなる。

もう一つ、他者観察の機会がステップ2と7に設定されている。代表者が自転車シミュレータを操作するが、その際、他の参加者には「自分であればどのように走行するか」と教示し、自分の走り方を意識しながら観察するように指導している。

教育プログラムを実際に進行させていくにあたっては、コーチング技法が随所に適用されるように配慮した。たとえば、生徒に対して質問する際は、可能な限りオープンクエスチョンを用いるようにした。また、学習の主体が生徒自身にあること、生徒の意見を可視化することなど、コーチング技法の利点が活かされるように教育内容を具体化している。とくにグループ討議の際には、安全走行の基準を明確にするのに、「どのような危険があるか」「どのように走れば安全か」という課題を提示している。グループで提案された意見はカードに記入してホワイトボードに掲示することにより、意見の可視化と共有が図られるようにした。また、ステップ6では、個別に行動目標を設定するという場面があり、具体的に実行可能な目標を立てるというコーチングの重要な原理が応用されている。

教育プログラム自体の所要時間は、約50分間である。学校現場での普及を想定しているため、この時間に収まるように内容を構成した。ただし、今回は20答法の調査やアイスブレイクが加わったため、講習全体に要した時間は約60分間となった。

2.4 教育の実施と調査手続き

著者がインストラクター役として教育プログラムの進行を担ったが、アンケート用紙の配付と回収、グループ討議の意見集約など、サポート役のスタッフ3名も加わり、計4名の体制で教育を実施している。

グループ討議を中心に課題を進めるため、参加者は6つのグループに分かれて着席した(1グループは4

～6名から成る)。会場の前部には、教材提示のためのノートPC、プロジェクター、スクリーンを設置した。右前部に自転車シミュレータ(Honda Bicycle Simulator)を設置し、モニターのCG映像は、プロジェクターを介してスクリーンに投映される。左前部にはホワイトボードを設置し、グループ討議の際の意見を掲示するようにした。

なお、調査にあたっては、事前に宮城県教育委員会および参加校の引率教員に対して、調査趣旨を文書にて説明し、また生徒に対しては、教育実施前に調査趣旨を口頭で説明し、調査協力を得た上で調査を実施している。

3. 結 果

3.1 量的変化

20答法による文章生成課題に対して、生徒が記述した文章を、数量および内容の観点から分析することで、自転車走行に関する自己理解の量的・質的变化を検討することとする。

表2は、生徒が作成した文章数の平均値を、教育実施前後で比較したものである。一人当たりの文章作成数は、教育前が3.32であるのに対して、教育後は4.77となり、平均1.45の増加となっている。この増加数は統計的に有意な差として認められた($t(30)=5.83$, $p<.001$)。参加者31名中、25名が2回目の20答法で文章を増やしていた。増減数は、2減から5増の範囲にあった。これらの結果から、教育参加後、自己の行動の姿に関する意識内容が増加したことが示唆される。

20答法の調査項目とは別に、参加した生徒には、各自の自転車の利用状況を尋ねる質問を行っており、その集計結果は次の通りであった。①自転車を通学で利用している(14名)、②自転車を通学では利用していないが、普段の生活で利用する機会がある(12名)、③自転車には乗らない(5名)。

自転車に乗らない場合は、20答法において、道路を歩く時の自分の姿について回答を求めており、前掲

表2 20答法による文章作成数の増減 ($n=31$)

教育前		教育後		t 値
平均値	SD	平均値	SD	
3.32	1.85	4.77	1.38	5.83***

*** $p<.001$

の表2の結果には、歩行者の立場としての自己イメージの文章が含まれている。そこで、自転車を利用しない5名のデータを除いた場合の文章作成数の増減を集計することにした。表3に示す通り、一人当たりの文章作成数は教育前が平均3.58であるのに対して、教育後は5.00であった。平均して1.42の増加数があり、

この差異は統計的に有意であった ($t(25)=5.02$, $p<.001$)。増減の頻度分布を調べると、生徒26名中、21名において文章作成数が増えており、増減数は2減から5増の範囲にあった。自転車利用時の自己の行動の姿に限定したとしても、教育後は記述される文章数が増加しており、自己の行動がより多く意識される

表3 20 答法による文章作成数の増減 ($n=26$)
(自転車を利用しない者を除く)

教育前		教育後		t 値
平均値	SD	平均値	SD	
3.58	1.84	5.00	1.20	5.02***

*** $p<.001$

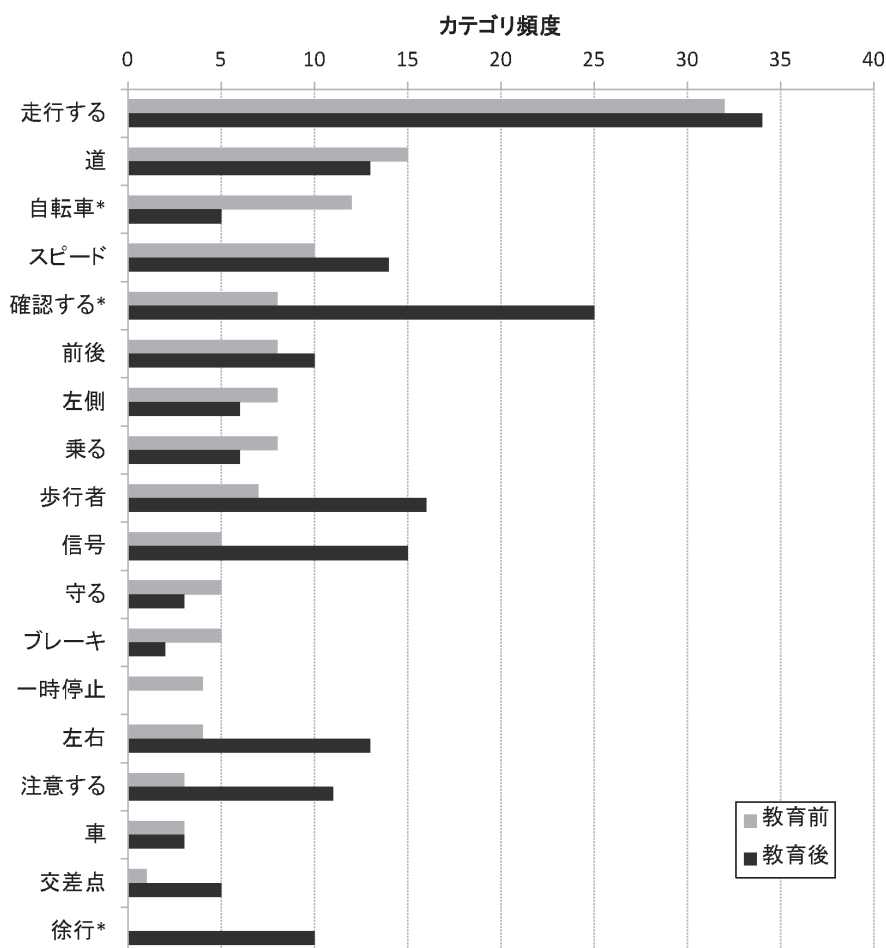


図1 20 答法による記述内容のカテゴリ頻度とその変化 (* $p<.05$)

ようになったものと解釈できる。

3.2 質的变化

次に、記述データに対する質的分析の結果を報告する。自転車を利用しない生徒を除いた全記述データ(レコード数223)に対して、解析ソフト IBM SPSS Text Analytics for Surveys 4.0.1 を用いて、テキスト分析を行った。分析の手順は次の通りである。教育前の記述データ(レコード数93)と教育後の記述データ(レコード数130)を結合したデータを用いて、名詞と動詞を中心にキーワードを抽出し、カテゴリを作成した。基本的に、解析ソフトのカテゴリ自動生成機能でこの分析を行ったが、意味をなさないカテゴリや、頻度の小さいカテゴリは削除し、類似のカテゴリやキーワードは統合する(たとえば、「走る」「走行する」「運転する」は同じカテゴリ「走行する」にまとめる)などの手作業の分類も加え、18種類のカテゴリを定義した。

教育前の記述データと教育後の記述データに対して、この18種類のカテゴリに含まれるレコード数をカウントしたのが、図1である。1つの記述データの中に、各カテゴリに属するキーワードが記述されていたならば、そのカテゴリの頻度に1を加えるやり方で度数をカウントする。たとえば、「歩行者の姿を確認しながら走る」という記述は、カテゴリ「歩行者」「確認する」「走行する」にそれぞれ1つずつ頻度がカウントされる。カウントされるのはレコード数であるため、もし、同じカテゴリに属するキーワードが2つ以上記述されていたとして、頻度は1としてカウントされる。

図1より、生徒が回答した自転車の乗り方に関する記述は、自転車の走り方を問うものであるため、自ずと「走行する」「自転車」「道」という言葉を使う頻度が高くなっていることが分かる。とくに教育前は、これら3つのカテゴリの頻度が高く、たとえば「車道の左側を走っている」(カテゴリ「道」「左側」「走行する」)、「夜、自転車で走るときはライトをつけて走っている」(カテゴリ「自転車」「走行する」)、「並列走行せず、一列で走っている」(カテゴリ「走行する」)といった記述が目立った。全体的に、走り方の基本的ルールやマナーに関わる事項が、教育前の記述内容に比較的多く含まれている。

しかし、教育後になると、キーワードに変化が見られ、カテゴリ「走行する」「道」以外に、「確認する」「歩行者」「信号」「左右」「注意する」「徐行」といった言葉が多く使われるようになった。たとえば、「人の往

来を確認して走ろうと思います」(カテゴリ「人」「確認する」「走行する」)、「信号での左右確認をしっかり出来ていないときがあります」(カテゴリ「信号」「左右」「確認する」)、「歩行者とのすれ違い時に徐行する」(カテゴリ「歩行者」「徐行」)などである。これらのカテゴリは、グループ討議で議論した内容と対応する。信号交差点を横断する際の危険(右左折車両との接触、歩行者との接触など)をどのように防ぎ、安全に横断するにはどうすべきかを議論のテーマとした。こうした学習時に体験した内容が意識として残り、それが自己の行動を振り返るときの記述に反映されたものと考えられる。

教育の前後で、カテゴリ頻度に統計的な有意差が認められたのは、「自転車」「確認する」「徐行」であり、カイ二乗検定の結果、5%水準の有意差であることが示された(それぞれ、 $\chi^2(1)=6.32, p<.05$; $\chi^2(1)=4.86, p<.05$; $\chi^2(1)=5.80, p<.05$ (Yatesの補正))。一般的な自転車走行の記述が減った一方で、安全確保のための記述が増えたことを示している。

4. 考 察

自己理解に基づく自転車教育の新たなプログラムを開発し、その効果を測定することが本研究の目的であった。映像教材によるミラーリング、自転車シミュレータによる他者観察など、自己の行動を振り返る機会が教育プログラムを通していくつか提供された。20答法により得られた記述データを分析すると、教育後は記述数が増え、その内容も変化していた。自分の自転車走行の姿に関して、気づくこと、意識されることが増したということは、自己の行動に関する知識が量的に増えたことを示唆する。また、内容的な変化としては、一般的な自転車走行の記述から、カテゴリ「確認する」を中心に、積極的に安全を確保しようとする記述が増えていることが示された。量的・質的变化を示すこれらの結果は、受講者の自己理解に働きかける効力が、教育プログラムに含まれていたことを示唆している。

コーチングの基本原則を応用しながら、グループ討議、映像教材による他者観察、自転車シミュレータによる他者観察と続く一連の学習者中心の教育が、複数の角度から振り返る視点を提供したのではないかと考えられる。最後に、代表者が自転車シミュレータを再度体験したが、歩道を走行する、歩行者とすれ違う、信号交差点を横断するなど、CG映像で示される様々

な危険場面を観察する内に、一連の学習で習得された視点が繰り返され、自分の走り方はどうなのかという印象が心に強く焼き付く感があった。複数の教育教材を組み合わせて、教育的アプローチを工夫することで自己理解型の教育を実現させるアイデアが様々に創出できるということが、今回の開発研究を通して示されたのではないだろうか。

5. 今後の展望

今回、開発したような教育プログラムを学校現場で実施し普及させていくためには、指導者の養成が不可欠である。コーチングの原理を理解してその技法を習得すること、他者観察法の教材についてその使用方法を習得することなど、指導する側の課題は多い。とくに、安全走行の基準を明確にする際のグループ討議は、展開方法が非常に難しいものであった。生徒の反応に即応した展開が求められるため、予め用意したシナリオ通りに進むとは限らない。生徒から提案された意見をまとめながら解説を加え、次の課題へと進行させていくためには、ある程度熟練を要すると考えた方がよい。こうした点も含め、普及のためには指導者養成の研修会が必要になるものと思われる。

自己理解の変化を測定する方法として、20 答法を応用した今回の測定方法は、結果を分析する限りにおいて、比較的適切な方法であったものと解釈できる。しかしながら、本当に、自己理解が深まり、自己評価がより客観的なものに変化したのかどうかを、記述内容の分析から確実に判断するのは難しかった。たとえば、「道路での車への注意を怠っているときがある」という記述は、自己の行動を振り返った内容だと判断できるが、「歩行者に気をつけて走る」という記述は、現在の自分の姿なのか、これからの行動目標なのか、それとも一般的理想像を述べているだけなのか、その判断が難しい。こうした問題も含め、測定方法の改善や分析方法の改良が必要であり、今後の研究課題としたい。

また、自己理解の量的・質的变化が、実際の行動変容に結びつくかどうか不明な点が多い。自己理解と行動との関連性についても、今後取り組むべき新たな

研究課題であると考えている。

文 献

- 1) 文部科学省 (2013). 安全に通学しよう～自分で身を守る、みんなで守る～
- 2) 小川和久・太田博雄・向井希宏・鈴木隆司 (2010). ドライバーの感情特性と運転行動への影響 国際交通安全学会平成 21 年度研究調査報告書
- 3) 蓮花一己・太田博雄・向井希宏・小川和久 (2010). コーチング技法を用いた高齢ドライバーへの教育プログラムの効果 交通心理学研究, 26, 1-13.
- 4) Hatakka, M., Keskinen, E., Gregersen, N.P., Glad, A., & Hernetkoski K. (2002). From control of the vehicle to personal self-control: broadening the perspectives to driver education. *Transportation Research Part F*, 5, 201-215.
- 5) 文部科学省 (2012). 学校安全の推進に関する計画
- 6) 小川和久 (2013). 青年期における安全教育の課題—自己理解のための教育的アプローチと教材開発— 東北工業大学紀要 II: 人文社会科学編, 33, 1-9.
- 7) Koivisto, I. & Mikkonen, V. (1997). Mirroring method: A traffic safety campaign without authoritative “right answers.” *Central Organization for Traffic Safety in Finland*.
- 8) 高齢者交通安全教育推進委員会 (監修) (2008). いきいき運転講座 社団法人日本自動車工業会
- 9) 文部科学省 (2012). 安全な通学を考える～加害者にもならない～
- 10) 小川和久 (2012). 五つ星ドライバーの育て方: 感情コントロール教育～葛藤する心と行動変容②～ 人と車, 8, 16-19.
- 11) 中西盟 (2008). 自転車事故を防止するために～学校における自転車交通安全教育充実に向けて～ 予防時報, 235, 14-19.
- 12) 小川和久 (2010). 自転車シミュレータを用いた児童向け交通安全教育プログラムの開発 交通工学, 45, 7-12.
- 13) HERMES (2010). EU Hermes project final report.
- 14) Montemayor, R. & Eisen, M. (1977). The development of self-conceptions from childhood to adolescence. *Developmental Psychology*, 13, 314-319.

ピア・サポーター宿泊研修における取組 —— 構成的グループエンカウンターを用いた試み ——

上西 創*・森田 健一**

The Report of Training for Peer Supporter : Attempt Using the Structured Group Encounter

Hajime KAMINISHI and Kenichi MORITA

Abstract

This paper is about practice reports at training in the Tohoku Institute of Technology peer supporter training system. Marks the seventh year from the establishment of peer supporters is aimed at mutual support within the group. To implement the mutual assistance required can become individual members are good listeners. Carrying out training in psychology or communication and a listening training for that. Increasing member involvement in effect so far piled up training, respecting the basic listening and your opponent is. From the current fiscal year, to deepen self understanding of individual and interpersonal understanding incorporates structured group encounter at staying training. Then the students showed big changes. This training brought its changes in the paper, content and course reported with a viewpoint of clinical psychology.

1. はじめに

本学がピア・サポーター養成制度に取り組み始めて7年が経過した。当初、カウンセリングに来談した学生へサポートを提供することを目的としてピア・サポーター養成を行っていたが、研修や定例活動を通じたサポーター同士の相互扶助など、養成課程そのものに大きな効果があると感じ、現在ではそれらを促進するプログラムを中心に実施している。

ピア・サポーターの養成課程では、サポーターが「良き聴き手」として相手の話を聴くことに注力し、相手を受け入れるための基礎知識や技術の習得のため、定期的な研修を行っている。研修の内容としては「傾聴訓練」「アサーショントレーニング」「葛藤解決」「青年期の心のメカニズム」など、知識的な研修だけではなく体験的な学びを得られるように工夫している。

本稿では、研修の一部として行っている宿泊研修において、平成24年度から取り組み始めた構成的グルー

プエンカウンター（以下SGE）を用いた研修について、そのプロセスと学生の変化について（特に変化の大きかった二人の学生に着目しつつ）報告し、臨床心理学的な考察を加える。

2. ピア・サポートとは

2.1 ピアとは何か

発達段階における仲間作りには、児童期後半の特徴で同一の遊びを共有するものだけを受け容れる「ギャング」、思春期前期の特徴で性別や世代・趣味など同質のものを受け容れる「チャム」、思春期後期の特徴で異質なものを受け容れる「ピア」があり、それぞれの段階を通して自分と他者の違いを理解し、自分らしさ（アイデンティティ）を確立していくプロセスがある。

ピア（peer）とは「仲間」のことで、特に「対等な仲間」という意味が込められている。この段階では、個性の違いが仲間の意義となり、自立した個人同士が対等な立場として互いを尊重しあいながら関わり合うことができる状態となる。この段階に至るためには、

2013年10月21日受理

* ウェルネスセンターカウンセラー（臨床心理士）

** ウェルネスセンター講師（臨床心理士）

同質性の集団（チャムグループ）の中で十分に他者を受け入れ、自分が受け入れられるという経験をし、しかし、決して他者と同質ではない自分や自分とは違う他者に気付き、違和感を覚えた時に、異質性への受け入れ（ピア）の準備が整うのである。つまり、ピアな関係を築いていくためには、チャムグループでの十分な体験が必要になるといえる。大学生活におけるサークル活動や共通の遊び（携帯ゲームやカードゲーム等）を通じた人間関係の構築は、チャムグループの一つの形態であり、ピアな関係性を築くための前段階として重要な要素でもある。ウェルネスセンターの活動である『トボステンポ』が、チャムグループやピアグループ形成の一助となっている。トボステンポの取組については、森田（2012）が事例を報告しているので、そちらを参照されたい。

2.2 ピア・サポート

このピアな関係性に基づいたサポートがピア・サポートである。ただし、具体的なサポートを行う際には、援助する側がピアな関係性について理解し、実践できることが必要になる。

早坂（2010）によれば、ピア・サポートとは「仲間による支援・援助活動」であり、「ピア・サポーターとして訓練を受けた者が自覚を持って仲間を支援・援助する」ことであるとしている。

3. 宿泊研修の取組

3.1 研修制度

ピア・サポーターは養成課程において傾聴訓練やアサーショントレーニングなど、『良き聴き手』となるためにコミュニケーションや心理学に関する研修を受ける。現在、行われている研修の一覧を表 1 に示す。

これらの研修は、八木山、長町キャンパスにおける各週 1 回のピア・サポーター定例会である昼休みの 45 分間を利用して行われている。研修に対するモチベーションの維持と達成感の獲得を目的としたカードランクシステムを導入しており、一定の研修を受けることでランクに応じたメンバーカードとユニフォーム（オリジナル T シャツ。ランクによってデザインが異なる）を授与している。また、上位ランク取得者は下位ランクへの指導ができる体制を敷いており、指導することがゴールドカード取得の条件になっている等、学びにおいても相互扶助を実践している。

表 1. 研修一覧

ブロンズカード	1	ピア・サポーターの役割と相談の受け方
	2	言語コミュニケーション
	3	非言語コミュニケーション
	4	傾聴訓練（話しの聴き方）
	5	アサーション・トレーニング～自尊心のコミュニケーション～
	6	カウンセリング理論（悩みや青年期の心の理解）
	7	グループワーク体験（課題達成型 GW）
	8	グループワーク体験（心理教育型 GW）
	9	グループワーク体験（関係形成型 GW）
	10	ストレスと対処法
シルバードカード	11	こころの救急部隊（危機管理・PTSD など）
	12	自分を知る講座
	13	自分を知る講座（心理教育）
	14	自分を知る講座（TEG などの心理テスト）
	15	リフレーミング
	16	落ち込みの心のメカニズム・失敗から立ち直るステップ
ゴールドカード	17	リーダー学（プレゼンテーション）
	18	コーチング
	19	争いごと解決法のコミュニケーション
	20	ファシリテーター体験
	21	ファシリテーター体験

3.2 宿泊研修

サポーターからは、「もっとじっくり勉強する機会がほしい」という要望も寄せられており、その声にこたえる形で平成 20 年度より、一泊二日の宿泊研修を行うようになった。これまでの研修内容について、以下の表 2 に示す。

これまでは、定例会で行っている研修制度の延長という形で宿泊研修を位置づけてきた。しかし、多くのメンバーがすでにゴールドカード相当の研修を受け終わり、それ以上同様の研修を受け続けるよりは、そこで得た知識や技術を実践する場が必要なように思われてきた。そこで、平成 24 年度は、自己に対する理解を深めながら、自己受容・他者受容を促進するためのプログラムとして、SGE を取り入れることとした。

表2. 過去の宿泊研修内容

	研修内容
20 年 度	グループワーク*
	アサーショントレーニング
	カウンセリングの基礎と実際
	大学祭中間報告・タッピングタッチ
21 年 度	グループワーク*
	家族関係とこころの理解
	ピア・スタディ発表会**
	災害が与えるこころへの影響
22 年 度	関係形成のグループワーク
	青年期のこころのメカニズム
	ピア・スタディ発表会
	大学祭中間報告
23 年 度	関係形成のグループワーク
	夢分析入門
	ピア・スタディ発表会
	傾聴訓練

*20, 21年度のグループワークは、体系づけられたものではなくいくつかのエクササイズを組み合わせて実施した。

**学生が心理学に関連するテーマを自ら設定し、調べたことをプレゼンする。通常、2～4人グループで行う。

4. 構成的グループエンカウンターを用いる意味

4.1 構成的グループエンカウンター

提唱者である國分康孝（2001）は、SGEを「ふれあいと自己発見を促進することを目的に、メンバーの属性や心理状態にあわせたプログラムを実施することで、それらのプロセスを並行して行うこと」であるとしている。そのための手法として① リチュアル ② ペンネーム ③ 全体シェアリング ④ 役割遂行を用いる。

① リチュアルは、共通の行動様式のことであり、ワークショップの開始時などにメンバー同士がそれぞれ全員と握手をするなどの方法がとられる。狙いとしては、集団の凝集性を高めるとともに、メンバーの集団への所属感を強めるところにある。

② ペンネームは、自分が自由になれそうな名前、

素の自分が出しやすそうな名前をつけ、メンバーがこれまでのしがらみやとらわれから解放されて、在りたいように在る、誰のためでもなく自分のために生きることを強く認識するためのプログラムである。

③ 全体シェアリングは、メンバー相互の感情や思考や行動の仕方を共有する体験である。活動を通して気付いたこと、感じたことを見つめる時間でもあり、それをメンバーに向けて表現することで、ありのままの自分を受け入れてもらう体験にもなる。各エクササイズが楽しいふれあいの機会としてだけでなく、自己発見の場となるための重要なプログラムである。

④ 役割遂行は、役割を介したメンバー同士の人間関係作りを狙った取り組みである。SGEでは、感情交流によるふれあいを目的としているが、メンバーの中には感情交流の苦手な人がいる。こういった人でも、役割という枠組みがあれば、自然に交流が促進される。

つまり、SGEの骨子とは、ペンネームで普段の自分から解放され、リチュアルで他者との交流の土台を作り、役割やエクササイズを通して他者とふれあい、シェアリングで自己発見と自己開示を促進することにある。

5. 平成24年度の宿泊研修の実際

5.1 宿泊研修の概要

日 時：平成24年9月7日～8日

会 場：秋保温泉『緑水亭』

参加者：上西・森田・学生9名

SGEでは、参加者が段階的に自己開示や他者受容をできるようにしていくためのプログラムを組むところから始まる。開始直後から侵襲性の高いプログラムを行っても、準備が出来ていない参加者が取り組める部分は少なく、よって得られる気付きも少ない。徐々に自分をさらけ出しても大丈夫な雰囲気や関係性を作り出していく必要がある。今回の宿泊研修では、國分康孝（2004）の『構成的グループエンカウンター事典』に掲載されている2泊3日用の研修プログラムを、1泊2日用にアレンジ（既知のメンバーであるために自己紹介にあてるワークと、関係を深めるために行われるワークの数を減らした）したプログラムを準備した。

進行役であるファシリテーター（以下Fa）は、各エクササイズを通じて、メンバーが安全に体験をできるよう配慮し、シェアリングで十分な自己表現が出来ていなそうなメンバーには、質問したり言語化を手

伝ったりと適宜援助する。シェアリングの場面で「楽しかった」「面白かった」などのポジティブな感想が並ぶ場合、他のメンバーの雰囲気に合わせてしまい、自身の感情や気付きを表現せずに終えていることがある。Fa は、ここはネガティブな感情を表現してもいい場であり、また、楽しかったにしても何がどう楽しかったかは人によって違うはずなので、「自分が何を楽しいと感じやすいのか」「どんなことに抵抗を感じるのか」、などの自身の傾向についても気付いて表現するよう援助する必要がある。

ここからは、エクササイズの内容と過程を、特に変化の大きかった A と B の 2 人のメンバーの動きを中心に報告する。

*以下、＜ ＞は Fa の発言を、「 」はメンバーの発言を示す。

*発言の内容については、個人が特定されないように、扱う意図がゆがめられない範囲で修正している。

5.2 SGE への導入

5.2.1 オリエンテーション

宿泊研修への取り組み方について説明を行い、導入とした。Fa＜今回の宿泊研修は、皆さんが自分自身と向き合うためのプログラムを用意しました。エクササイズを通して、自分の考え方や行動の癖、特徴に気付く作業をしてみてください。自分自身とじっくり向き合うために、この研修中は外部との連絡を禁止します。携帯電話の電源は切り、部屋でも TV などは見ないようにしてください。また、エクササイズを通して知れたことは、研修の外には持ち出さないこと。メモを取らず、感じたことを大切にしてみてください。何かを得るためには、いつもよりも一歩踏み込んでチャレンジしてみることも必要です。いつもはやらないことを思い切ってやってみようとする中で、その時に自分がどんなことを考え、感じるのかを見つけてください。結果として出来なくてもかまいません。チャレンジしようとしたけれど、出来ないのはどんな考えや気持ちが邪魔をしたのかに気付くことが大切です。一生懸命チャレンジしようとしている人を茶化すのではなく、応援するつもりで関わりあいましょう＞

5.2.2 役割任命

内容

事前に割り振ってあった役割を改めて任命する。今回準備した役割は、環境係（会場のセッティングなどを積極的に行う）・食事係（食事の際にいただきます

からごちそうさままでのお世話をする）・懇親会係（懇親会の一切を取り仕切る）。

過程

一人ひとり任命していくが、A だけが返事をしなかった。

5.2.3 レクチャー

自分自身と向き合う際に参考にしてもらうよう、イラショナル・ビリーフ*（不合理な信念）について解説した。

*イラショナル・ビリーフ

論理療法の中で用いられる、偏った考え方や不合理な信念のこと。「全ての人から愛されるべき」や「絶対に失敗してはならない」など、叶えることが難しいものが多い。これらは、達成すること自体が難しいため、人の行動へ制限を加えたり、自己肯定感へ強いマイナスの影響を与えたりする。

5.2.4 ペンネーム

内容

A5 サイズのケント紙にひもを通し、自分で決めたペンネームを記載する。ペンネームは、活動中は必ずつける。

過程

A はカードを真っ黒に塗りつぶし、透け字でようやく見える程度にペンネームを書く。他のメンバーもペンネームを付けることに苦労している様子。

B「ペンネームじゃないとだめですか？ 本名では？」Fa＜活動中は、いつもとは違う自分を出しやすいようにペンネームにしてください。また、出来るだけ呼び捨てで呼びあうようにしてみましょう。どうしても呼び捨て出来ない人は、どうして出来ないかを考えることにも意味があります＞

5.2.5 ウォーミングアップ

内容

目線を合わせず、話をしないで会場内をウロウロ歩く。しばらく歩いたら、次は出会った人と目線を合わせ、「今日はよろしくお願いします」と挨拶を交わす。

過程

初めは話をしないでの歩行だったため、神妙な雰囲気になる。A は一歩も動かず、その場に佇む。挨拶の場面では、なかなか目を合わせられないメンバーが

たり、照れ笑いが起きたりする。Fa<頑張って目を合わせてみてね。合わせづらいと思っても、一歩踏み込んで挑戦してみて。やはりAは一歩も動かないが、はにかみながらも握手には応じていた。

5.2.6 SGE への導入に関する考察

SGE では、『真剣に自分や他人と向き合う場』の雰囲気作りが重要になる。皆が真剣に取り組んでいて、Fa がその枠組を守ってくれるという安心感があって、初めて自分と向き合う準備が整う。その雰囲気作りのためには、導入が大きな意味を持つ。Fa は、普段は冗談を言うこともあるが、この時は冗談を交えず、丁寧な言葉でメンバーへ語りかけることで“いつもとは違う”というメッセージを伝えていた。

A は、この時点では研修への参加態度が硬く、自分から動こうとしない。研修へどう向き合うかの態度を決めかねているように見えた。

B は、何度かピア・サポーターの宿泊研修に参加しており、他のメンバーを引っ張るように積極的に活動する姿が見られた。この時点では、自分と向き合うよりも周囲への気配りに力を入れているように見えた。

5.3 自己開示の準備

5.3.1 自己開示のワーク

内容

自己紹介などを通して、少しずつ自己開示をする準備を整えていく。

まず、二人一組となり、互いにペンネームの由来と将来の夢をインタビューしあう。その後、視線のみの会話を行う。

二人でのエクササイズ終了後に、4人～6人で一組となり、先ほど組んだペアの相手について、インタビューした内容を基に他のメンバーへ他己紹介する。一通り紹介し終わったら、ひとりずつ“成功体験と惨めな体験”について話をする。

過程

インタビューでは、どのペアも楽しそうに話していたが、将来の夢についてはなかなか出てこないメンバーもいた。Fa<言える範囲で構わないから、出来るだけ言おうとしてみたい。どうしても言えない時に、どうして言えないかについて考えてみると、自分の中にある葛藤に気付けることもあるよ>

視線のみの会話では、自然と笑いがこみ上げるペアが多くいた。Aのペアでは、相手が笑うことが多く、Aもつられて笑みを浮かべる場面も見られた。

成功体験と惨めな体験では、Faが手本として話をしてからグループごとに開始した。惨めな話をしているが、顔は笑っているメンバーもあり、適宜<惨めな話だけど、笑いながら話しているのに気付いている？>など、気付きを促す介入を行う。全体的に惨めな話はしやすいが、成功体験が話づらい様子。Bは一通りメンバーの話を聴いたあと、最後に話をしていた。

5.3.2 シェアリング①

シェアリングは、全員で大きな円になり、それまでのエクササイズで感じたこと、気付いたことを共有する場である。ここでも、自分から積極的に感じたことを話してみるように挑戦するよう促し、Faから指名するようなことはしないが、出てきた意見がより本人の気付きになるような質問は適宜行う。

本稿では、特にAとBの2名に焦点を当てているため、両名の意見とFaとのやりとりのみを抜粋する。

Fa<今までのワークで気付いたこと、感じたことを話したい人から話して下さい。何も感じないなら、考えながらやっていたかどうか、できなかった時、なぜそうだったのかを振り返ってみて下さい。自分のイラショナル・ビリーフに気付いた人は、それを話してもらってもいいです>

B「改めて気付いたことは、人と話すのは、好きだと思うけど、嫌いでもある。弱みを握られるんじゃないかな、情報を掴まれるんじゃないかなと、被害妄想的な部分が強すぎて、話すのが嫌いというのがあるんだな、と気付いた。話すとき、ガードが硬くなっている。腕を組むし、足も組む。前のめりになって話を聞けない。相手に対して防御してしまう。拒否しているわけじゃないけれど。もしもの時に備えてそうやってしまっている。」

Aは、最初のシェアリングでは何も語らなかった。

5.3.3 二者択一

内容

自分と他者の違いに焦点を当てたワーク。2グループに分かれて実施。ワークシートに用意された6つの質問について、二つの選択肢から回答を選び、その理由について考える。記入後、グループ毎に一人ずつ選んだものとその理由を発表し、全員が発表したら感想を述べあう。ワークシートの質問は以下のとおり。

なるなら……………社長／副社長

住むなら……………都会／田舎

出かけるなら……………海／山

はじめてのデートは……遊園地／水族館
 親孝行といえば……旅行に招待する／孫の顔を見せる
 欲しいのは……資格／お金

過程

比較的答えが明確に出るワークのためか、メンバーも話しやすそうで、積極的に意見交換する様子が見えた。Aは、グループ毎の感想の際に、「(話し合わなくても) いいんじゃない?」など消極的な姿勢を示すものの、メンバーが水を向けると「親なんか早く死ねばいいのって思っているの」で攻撃的な内容ながらも意見を述べる。

5.3.4 シェアリング②

B「都会のほうが疲れるかなと思った。都会に飲まれそうだ」

B「資格選んだ人いる? みんなお金のかな」

Aはここでもまだ何も語らない。

5.3.5 自己開示の準備に関する考察

自分の名前には、親が込めた意味があるように、自分のペンネームには自分が込めた意味がある。それをきちんと聴いてもらうことは、自分そのものを受け入れてもらうことでもある。

見つけ合うことは、照れや恥ずかしさがあり、難しいと感じる人も多い行為であるが、普段はしないことを一歩踏み込んで挑戦してみることが求められるSGEの雰囲気の中では挑戦しやすい。比較的答えが明確に出しやすいエクササイズを行うことで、徐々に自己開示への準備を整えていく。

最初のシェアリングでは、どのように自分の考えを話すかに戸惑い、何も言えないことも多いが、Bは積極的に気付きを言葉にしており、研修に一所懸命取り組みようとしている姿勢が見られた。この時点でのBは、自身の好き・嫌いという思考的な部分と、姿勢などの行動的な部分に言及しているが、感情の動きについては言及していない。また、自分のことよりも他のメンバーの選択や様子が気になっている様子も見られた。

Aは、シェアリング①では言葉を発しなかったものの、②の前に行ったグループ内でのシェアリングでは攻撃的ながら思いを言葉にしており、徐々に自己開示への準備を整えているように見えた。

5.4 葛藤とブレイクスルー

5.4.1 共同絵画

内容

1枚の模造紙を4~5名で囲み、言葉を発さずに共同で絵を描く。絵画にはクレヨンを用いる。

過程

二つのグループに分かれて実施。1グループでは、Aが模造紙の1/4ほどを使い、黒のクレヨンで大きな鳥のような絵を描いていく。他のメンバーはAのエネルギーに圧倒されて、なかなか描くことが出来ずにいるが、徐々にクレヨンを手に取り思いおもいに描きはじめる。Aの隣に座ったBは遠慮がちに自分の前にあるスペースに線を引きはじめるが、Bの描いた線をまたいだ線をAが引いた瞬間から手が止まり、その後は様子を見ることに終始していた。そこでFaがBをグループの輪の外へ呼び出し、声をかける。Fa「なかなか描けないのかな?」>B「苦しいです」<苦しい?>B「はい、とにかく今はここにいたくないです」<何がそんなに苦しいんだろう?>B「いや、わからないです」<無理には描かなくていいよ。シェアリングの時に今の気持ちをみんなに話すことはできるかな?>B「いや、今は考えられないです」<それくらい苦しいんだね。苦しかったってことだけでも、みんなにシェア出来たら、その気持ちをみんなで考えられると思うんだけど、どうかな?>B「……やってみます」<うん。じゃあ、しんどいかもしれないけど、自分が何に苦しんでいるのかを考えてみてくれるかな?>B「わかりました」その後、Bはグループから少し距離を取りながら、終了までメンバーの活動を見守る。

時間が来たところでそれぞれのグループが描いた絵の鑑賞会をおこない、その場で感想を述べ合う。その後、活動中に感じたことのシェアリングを行った。

5.4.2 シェアリング③

A 絵としての評価をしばらく述べる

Fa「描きながら感じたことはどんなこと?」

A「座っているときは、この辺くらいなんじゃないかなあ、と感情の赴くままに描いた。それだけです。他の人の赤いラインは超えちゃいけないかなとおもったけど、同じ赤だしいいかなと思って入ってしまった。共同だしかぶってもいいかなと思った。」

<それについては、ラインを越えられたあとにBは描くのをやめていたよね? どんな気持ちでしたか教えてくれる?>

B「辛かったです。とにかく辛かった……。最初は、何描けばいいのかわからなかったから見てただけだったけど、思い切って描いたものの上を越えて入られて、すごく攻撃されたような気分になりました。それで一気に描く気がなくなって、この場に居たくなかった感じです。」

＜AはそのBの様子には気づいていた？＞

A「分かっていました。でも、誰も描きださないし、こういうのは誰かがエイヤあって思い切って描きだすと他の人も描きやすいかなと思って、思いっきり描きました。ライン超えたのは気づいていたけど、絵のまとまりとしてどうしても付け加えたい部分だったから、悪いかなと思いながらも描いてしまった。そしたら、FaがBのフォローをしていたから、まあいいかな、と。」

B「確かに、誰も描きださなくて困っているところにAが思いっきり描いてくれたからみんなが動き出したのはあったと思う。それは自分にはできないし。この辺の領域は自分のスペースっていう思い込みがあったのかもしれない。だから入ってこられた時に攻撃されたように感じたのかも。」

5.4.3 葛藤とブレイクスルーに関する考察

Aは、共同絵画でのシェアリング以降、研修への参加態度が、時折笑顔を見せたり、自分から話しかけに行ったりなど積極的な方向へ変化した。これは、エクササイズを通して2つの点がAに作用したと考えられる。1点目は、Bが自分の傷つきについてきちんと言葉にしてAに伝えたことで、自身の行動が他者に与えた影響について明確に知ることができ、Aの想像の中で必要以上に傷つけたイメージが膨らまずに済んだため。2点目は、影響を与えた相手（傷つけてしまったB）がきちんと他者（Fa）に守られることで、自分の行動が重大な結果（例えば死ぬなど）に結びつかずに済み、安心感を得られたためと考えられる。Aの抱く不安は、自分の持つ攻撃性が他者を傷つけてしまい、取り返しの付かないことになるんじゃないかというイメージが膨らみすぎてしまう部分が大きいため、自分がすべての責任を負わずとも、相手は生き延びてくれるということが分かったのは有意義な体験だったのだろう。

Bは、傷ついた自分が放置されず、ケアしてくれる存在（Fa）がいたことが言語化への大きな助けになったと考えられる。また、自分の傷つきを言語化したことで、Aがどのような思いで自分の領域にまで絵を広げてきたのかを知ることができ、その行為が純粋な攻

撃ではなかったことを知り、自身の思い込みにも気付くことで痛みが軽減したのと考えられる。

A、Bともに、相手の思考や感情を自分の中で必要以上に悪い方向へ膨らませる傾向があったが、シェアリングを通して相手の思いを確認することで、広がり過ぎた想像を収束できたことが、それぞれのブレイクスルーにつながったと言える。

5.5 役割遂行の意味

5.5.1 夕食

食事係を中心においしい夕食を頂いた。食事係が食事中もメンバーへ水を配ったり、ご飯のお代わりのために仲居さんと呼びに行ったりとこまめに動いていた。

5.5.2 役割遂行の意味に関する考察

普段あまり気の利く方でないメンバーも、食事係という役割を与えられることで、自分にできることを探しながら一生懸命に活動していた。その見返りとして、メンバーから「ありがとう」と言われることは、自己肯定感の向上につながるとともに、自身の新しい側面の発見を促すことにもなる。SGEにおける役割遂行が目指す効果が如実に現れていたと言える。

5.6 自己開示とカタルシス

5.6.1 未完の行為の完成

内容

これまでの人生で「あの時、本当はこうしたかった」と思う出来事を挙げ、メンバーの助力を得てその場面を再現し、その時には出来なかった行為を完成させる。

まず、自分がやりたい場面について、その時の状況を語り、言い直したい言葉ややり直したい行動を説明する。メンバーの誰に何の役をしてほしいかを指定し、セリフや行動などを打ち合わせた後に、その場面を再現する。終わったら、感想を語り合う。

過程

Aは、ファーストフード店での注文時に間違った商品が出てきた際に、特に注意せずにそのまま違う商品を受け取ってしまった経験があるので、間違いを指摘し、正しい商品を受け取り直したい、と希望。Bは、親友が亡くなる前の日に喧嘩したままだったことへの後悔を語り、きちんと自分の気持ちを伝えた上で許してほしい、と希望した。親友役としてBが指名したのはFa。親友役のFaには、自分が言った暴言をきちんと注意してもらい、Bが謝ったら許して抱きしめて

ほしい、との指示があった。

Aは、グループ内のメンバーに店員役をしてもらい、希望通りに商品の受け取り直しが出来ると、少し照れたような笑顔を見せた。

Bは、指示通りの流れでFaが許し、Bを抱きしめると涙を流しながらFaに抱きつき、しばらく泣いていた。

5.6.2 シェアリング④

A「やってみてつかかりがとれたというか、スッキリした。」

B「ずっとモヤモヤしていたことだったから、今日やれてスッキリしました。泣いたのは恥ずかしかったけど……頑張ってやってみて良かった。自分は感情のコントロールがあまりうまくないし、我慢してしまう方なので、怒りとか抑えこんで、たまに爆発してしまう。でも、昔のことだけど、今回これだけ泣けたってことは、ずっと溜まっていたんだなと気付いた。その時その時できちんと出せるようになればいいと思った。」
A「自分は後悔しないようにやってきたつもりだったけど、何かのきっかけで思い出した。自分の過去がいかに美しく修飾され、記憶が曖昧だということ、「俺って感情あるんだな」と気付いた。感情はあんまり感じないんですよ。」

5.6.3 自己開示とカタルシスに関する考察

これまで自身の感情の扱い方について分からず、触れることもできないでいたAが、共同絵画での経験をきっかけに自身の感情に気付き、未完の行為を通して言語化することが出来た重要な場面であった。この点については、総合考察で詳述する。

Bは、シェアリングの時にはスッキリした表情をしていた。共同絵画での反応からも見えるように、Bは感情の表現が苦手であり、溜め込む傾向がある。しかし、溜め込んだ感情がどこかに消え去るわけではなく、時間を置いても自分の中に存在していることに気付き、溜め込むという方法があまり適切な方法ではないことに気付くことが出来た。また、これまで抑圧されてきた親友との出来事を言語化し、実際に演じることで本来の意味でのカタルシス効果*があり、さらに涙を流したことで代償行為としてのカタルシスも同時に体験されたと考えられる。

*カタルシス

ギリシア語で「浄化」の意味。過去に起こった恐怖や罪悪感を伴った外傷体験は、意識に浮かべると不快や不安が起るため抑圧されやすい。そういった抑圧された感情や

葛藤などを自由に表現させることにより心の緊張をとく方法。今日では、遊戯療法や芸術療法などにおいて、カタルシス的な緊張発散による治療効果が認められている。

(出典：心理学辞典)

5.7 自己主張を学ぶ

5.7.1 リチュアル

内容

一日の始まりに、心と体を研修に馴染ませるためのウォーミングアップを行う。人間送電線（手をつないで輪になり、起点となる人が右隣の人の手をぎゅっと握る。握られた人は、自分の右隣の人の手を握り、伝播させていく）・声のハーモニー（前の人が発した声と同じ声を出してハーモニーを奏でる。次に前の人とは違う声を出してハーモニーを奏でる）・ポーズの足し算（前の人がしたポーズを覚えて再現し、自分も何かポーズを足す。次の人は、前の人たちが出したポーズを順番に再現してさらに足していく）。

過程

AにもBにも笑顔が見え、みな一様にリラックスした雰囲気を取り組む姿が見られた。

5.7.2 私のお願いを聞いて

内容

二人一組になり、一方が「本を貸してほしい」など、相手にしてほしいことを願う。お願いされた側は、理由をつけながらその願いを1分間断り続け、Faの合図をきっかけに30秒で折り合いをつけて、最終的には願いを聞き入れる。

過程

Aは、お願いする側の時には、時折笑顔を覗かせながらいろいろと理由を考えつつ熱心に説得していた。また、断る側の時には、少しやりづらそうにしており、1分後の合図とほぼ同時に相手の願いを聞き入れた。

Bは、お願いする側では、なかなか言葉が出てこない様子が見られた。断る側でも、なかなか断る言葉が出てこない様子。

5.7.3 No! I am I!

内容

二人一組で、新聞紙を丸めた球を相手のネームプレートに投げつけながら「No! I am I!」と叫ぶ。一人につき1分間投げ続け、役割を交代する。

過程

ネームプレートが小さいせいか、上手く当たらないことで笑いが起きるペアが多数見られた。表現が英語であることに照れがある様子で、はっきりと言葉にできないメンバーがほとんどだった。Aは、言葉も小さく、球を投げる腕にも力はないが、何度か投げていた。Bは、多少ふざけながらも、はっきりと声を出しながら取り組んでいた。

5.7.4 シェアリング⑥

A「断る方が大変だった。自分の中に、頼まれたことはやるべき、自分を頼ってきてくれた人には応えたいなという考えがあったような気がする。ちょっとした頼みごとだったから、67秒過ぎてようやく応えられる時に満足感があった」

B「お願いするのでも断るのでも、どちらもやりづかった。こんなお願いするなら自分でやったほうがいいんじゃないかなと思った。断るのも、お願いされ続けているとどんどん自分のライン（断り続けること）が崩れていった。最後に聞き入れる時も、100%いいというよりも、しょうがなくってというのが入っていると思う」

5.7.5 自己主張の学びに関する考察

リチュアルは、一日の始まりに実施することで心と体を目覚めさせ、研修に改めてコミットする効果がある。全員が笑いながらユーモラスな動作や共通の行動をすることで、恥ずかしさや照れのハードルを下げることになり、以後の研修に能動的に取り組むことが出来ていた。

二日目の始まりは、自己主張のトレーニングである。「私のお願いを聞いて」では、お願いをし続けることも、断り続けることも、大きな葛藤が生じる。自分がどの部分に葛藤を感じやすいのかを理解し、その結果とりやすい行動への気付きと、いつもとは違う行動をした時の心の変化を体験することが出来る。普段からすぐに願いを受け入れる人にとっては断り続ける体験は新鮮であるし、断られたらすぐに諦める人にとっては、お願いし続けて受け入れてもらう体験は新しい自分への気付きになる。「NO! I am I!」では、拒否の意思表示を言葉と動作ではっきりと行い、それをきちんと受け止めてもらう練習をする。こういった練習の積み重ねが、断ってもいい、断られてもいい、という学びに繋がる。

Aは、「自分は断ることが苦手で、相手の期待には応えたい」と述べている。断れない気持ちは「(断ることで)相手に嫌われたくない、(断われるほど)自

分に自信がない、自分には(人の願いを断るほどの)価値がない」という気持ちの反映であると考えられる。自己主張訓練のひとつ、アサーショントレーニングを提唱する平木(2007)は、前述のような自己主張のタイプを「非主張型」と呼び、劣等感が強く、依存的、服従的な一方で、恩着せがましい、弁解がましいなどの特徴があるとしている。これまでのAの攻撃的にも見える言動は、他者への影響を測りきれない不安と低い自己肯定感からくる「別にどうなってもいい」という投げやりな思考の現れと捉えることが出来る。A自身の自己理解をより促進するためには、Faがくどうして断る方が大変なのだろう?>という質問を投げかけてみると良かったのかもしれない。

Bも同様に断るのが難しかったと語っている。また、「お願いするよりも自分でやったほうが早い」という思考は、基本的な他者への信頼感が低いことを示している。このことから、Bの感情表現の苦しさは、「表現したとしても、相手には受け入れてくれる器はないだろう」という、他者への頼れなさに起因するものと推察することができる。

5.8 他者への適度な依存と受容体験**5.8.1 トラストウォール****内容**

一人を全員が輪になって囲み、真ん中に立った人は一本の棒になったつもりで目を閉じて周りへ倒れこむ。周りは倒れないように支えながら、ゆったりと動かしていき、ゆらゆらと漂う感覚を味わう。真ん中に立つ人は体験したい人から自主的に行う。また、一連のエクササイズは、すべて無言で実施する。

過程

無言での取り組みのため、互いに牽制しあい、なかなか最初の志願者が決まらない。そんな中、Bが思い切ったように手を挙げて、輪の中心に立つ。ちょっと照れくさそうな笑みを浮かべながらも、時折眉をしかめる表情を見せる。終わったあとは、ホッとしたような表情だった。最終的に、時間内にこのエクササイズを体験したのは3人だった。

5.8.2 トリップ・トゥ・ヘブン**内容**

一人が床に横たわり、胸の前で手を組む。他のメンバーは周りを囲み、全員でゆっくりと頭の上くらいまで身体を持ち上げる。体験したい人から自主的に行う。一連のエクササイズは、すべて無言で実施する。

過程

トラストウォール同様に、最初の志願者が出るまでに時間がかかる。

5.8.3 シェアリング⑦

B「囲まれるのは緊張感があった。その中で目を閉じて相手に身を任せるのは気持ちよかった。でも、途中でみんなの息遣いが荒くなっているのを聞いて、何か変態的な行為のように感じた（茶化するような感じで）」
 <変態というのは？>

B「別に興奮したというのではなくて、息遣いだったり、無言でやったりというのが、ちょっと怖い感じがした。」

<無言でエクササイズをすることについて感じたことがある人は？>

B「無言でいい感じがしなかったのは、動きがないこと。昨日のワークの無言の時は、特に何も感じなかった。自分も周りも動きがあった。今日はエネルギーが循環していなかった。その中で、入ってくるのが息遣い。しかも囲まれているので、みんなのエネルギーが自分に集中している感じがした。」

5.8.4 他者への適度な依存と受容体験に関する考察

“トラストウォール”と“トリップ・トゥ・ヘブン”は、いずれも相手に身を任せて受け止めてもらう、相手の存在をしっかりと受け止める、という体験である。しかし、完全に力を抜いてしまうと、どちらのエクササイズも周りが体を支えづらくなり、かえって不安定になってしまうため、ある程度体に力を込めて自分のカタチを作った上で身を任せる、という工夫が必要になる。河合隼雄（2001）は「依存のない自立は孤立」であり、「自立は適度な依存に裏打ちされる」と述べている。

Aは、この二つのワークを支える側のメンバーとして参加していた。特に“トリップ・トゥ・ヘブン”では、ひと一人を持ち上げるのは大変だが、肩を入れて持ち上げるなど工夫しながら一所懸命取り組んでいた。

Bは、“トラストウォール”に大げさに手を挙げてから輪の中心に立つ、というプロセスを経た。これまでの考察でも述べてきたように、他者を信頼して身を任せる＝適度に依存することは、基本的な他者への信頼感が低いBにとっては難しい作業である。手を挙げてから入るというプロセスは、研修を通して一歩踏み出してみようという勇気と、それでもまだ怖いという抵抗による葛藤の表れであろう。シェアの中でも、

「身を任せて気持ち良かった」という感情の反面、変態という言葉で茶化してはいるが、Faの問いかけに「息遣いが怖かった」と他者との距離が縮まることへの恐怖も語っている。このアンビバレント（二律背反）な感情が、Bの根本にある信頼することへの不安と関連していると考えられる。

5.9 それぞれの別れ**5.9.1 別れの花束****内容**

二日間をともに過ごした仲間へメッセージを贈りあう。A3のケント紙を背負い、自分以外のすべてのメンバーにメッセージを書き込む。書き込まれたメッセージは、全員が書き終わったところで一斉に確認する。

過程

全員がにこやかに黙々と取り組んでいた。他の人へメッセージを書いている人の背中へ別の人がメッセージを書き、その人の背中にまた別の人が書く、という列車のような集団が出来るなど、終始和やかな雰囲気だった。

Bは、自分からAのところへメッセージを記入しに行き、Aもお返しでBへメッセージを記入していた。

5.9.2 ペンネーム・役割解除**内容**

なりたい自分、素を出しやすそうな自分になるためにつけたペンネームと、新しい自分を発見するために負った役割を解除し、現実の自分に戻る。一人ずつペンネームに込めた意味と、研修でどれだけその願いを達成できたかを発表し、ネームプレートを外す。

過程

A「『黒』というのは、ペンネームとかじゃなくて、自分の内側にある何か塊みたいなもの。なにか黒いものがあるような気がする。こいつの動きを感じ取ることが出来たんじゃないかな。そうすると、大きな感情の波を感じるものがあったなあ。良かったなあ。」

B「『未来』。いつも縛られているのは過去由来のものが多くて、先の未来についての実感が無い。それについて考えてみたくて、進んでみたいという思いがあった。自分にとってきついワークがあったけど、やったあとと振り返ると、ためになるものがいくつかあった。未来の実感はまだないけど、一歩にはなったかなという充実感があります。」

5.9.3 それぞれの別れに関する考察

SGE の最後に行われる“別れの花束”と“ペンネーム・役割解除”は、非日常を共有した仲間との別れであると同時に、いつもとは違う自分との別れでもある。

A は、一歩も動かなかった導入時のエクササイズとは違い、自分から他のメンバーへメッセージを記入に行く姿も見られるなど、具体的な行動の変化が起きていた。「自分の中にある何か得体の知れないもの」の存在を知り、それが自分の感情であるとの気付きは、感情に触れることが苦手と自認する A にとって、自分というものを認識する大きな手掛かりになったのだろう。また、黒は暗闇の色であると同時に、すべての色を重ね合わせた時に出来る色でもある。A が黒を選んだ背景には、A の中にある様々なモノがごちゃごちゃに重なり合って混乱している様子も見取れる。最後に、その思いを言語化できたことも、A にとっては大きな変化だったと言えよう。

B の積極的なエクササイズへの取り組み姿勢は、未来の実感が欲しい、先に進んでみたいという思いの表れであった。共同絵画で葛藤を抱えた A に対して、自分からメッセージを記入しに行ったことは、過去にとらわれず先を見据えて自分から一歩踏み出すことが出来た瞬間でもあった。これは、これまで感情を溜め込みがちだった B が、シェアリングの中できちんとその場の葛藤を表現し、相手の意見も聞くことで、葛藤を溜め込まずに解消したことにより、今までとは違う自分として B 自身の中に形作られたためと考えられる。

6. 総 合 考 察

6.1 プログラムの目的

今回、新しい試みとして、ピア・サポーターの宿泊研修に、これまでの単科型のプログラムとは異なる、1泊2日を通して取組む SGE のプログラムを導入した。技術や知識としての心理学や傾聴法などのコミュニケーションについて学んできたピア・サポーターへ、さらに一歩踏み込んで、個人的な成長や気付きを促すことを狙いとしていた。

SGE では、エクササイズを通して自身の思考・感情・行動における偏りに気付き、それを修正したり受容したりしていくことを目的としている。そのためには、これまで自分が理解してきた自分とは違う側面に気付く必要がある。それには、条件設定（場面設定）された中での、他者との関わりの中で起きるふれあいや葛

藤の体験が重要な意味を持つてくる。条件設定とは、ルールのあるエクササイズやペンネーム、役割などが当たる。この条件という「枠組み」に守られてこそ、人は自由に自分の本音を表現し、相手の本音を受け入れることが出来る。

今回の宿泊研修における A と B の変化も、この「枠組み」による守りの中で起きた葛藤を、その「枠組み」の中で解消した、というプロセスが効果的に働いたと考えられる。

6.2 A の変化

A は、導入のエクササイズでは一歩も動かないなど、研修そのものやメンバーとの関わりに対する抵抗を行動面からも示していた。自己開示の準備では、「（話し合わなくても）別にいいんじゃない？」と抵抗を示しつつも、親への攻撃性を表現するなど、取組みやすいエクササイズを通じた自己開示への心の準備を少しずつ整えているように見えた。

今回、最も A を変化させたのは、次に行った“共同絵画”であったといえる。絵を描く事への抵抗が少ない（普段から絵を描くことが多い）A にとって、このエクササイズは取組みやすい部類のものだったと思われる。ところが、積極的に取組んだはずの行動が、B を傷つけるという体験をする。普段の B であれば、その葛藤を抱え込むため、A も自分が与えた影響の深さを測りきれず、自分の中の「黒いもの」が想像の中で膨らんでいき、他者を深く傷つけた自分を責めるといった心の動きが起これると思われる。しかし、SGE の枠組みの中で、Fa が守りの機能を発揮し、B をフォローしたことと、同様に SGE の枠組みの中で B が自分の感情をきちんと表現したことによって、A は自分の与えた影響を測りきれ、その影響によって相手が想像のような最悪の事態に陥らないことを確認することができた。これらの心の動きを通じて、自分の中にある「黒いもの」が想像の中で膨らまずに済んだことで、初めて「黒いもの」を見つめることができるようになったと考えられる。ようやく自己開示の準備が整ったところに起きた突然の大きな葛藤体験は、A にとってもショックな出来事だったに違いない。その葛藤を守られた枠組みの中で、その場で解消できたことが、A に「ここでは表現しても大丈夫かもしれない」という安心感を与えられたと考えられる。

これ以降の A は、自分の中の「黒いもの」を感じながらエクササイズに取り組めるようになり、“未完の行為の完成”では、その「黒いもの」が自身の感情

であり、扱うのが苦手であると言語化することが出来た。当然のことではあるが、研修の一番初めに“未完の行為の完成”があっても、Aはこのような体験はできなかったであろう。SGEが単体のエクササイズとしても構成させていると同時に、一連のプログラムとしても構成されていることが、これらの変化をもたらしたと言える。

6.3 Bの変化

Bは、Aとは対照的に、普段のピア・サポーター活動の中での役割をそのまま引き継いだように、導入から積極的に質問やエクササイズに参加する様子が見られた。その為か、SGEの目的でもある自分と向き合うことでの自己発見というよりも、周りへの気配りが優先され、なかなか研修自体には入り込めないでいる様子も見取れた。シェアリングの中でも、序盤は思考や行動についての言及はあるものの、感情の言語化は少なく、メンバーの選択や様子が気になっているようだった。

Bにとっても、“共同絵画”での体験は、自分の感情と向き合う最初の機会となった。Aの行動によって、自分の領域だと思っていた部分へ侵略されたことは、自分自身の心の中へ土足で踏み込まれたのと同じような衝撃があり、混乱して動けなくなってしまったと思われる。突然、感情を揺さぶられて混乱しているところへFaの介入があり、その混乱を言語化することで少し落ち着いたこと、いったん落ち着いたその混乱を静かに味わう時間があつたこと、シェアリングの場で、その感情を言語化し、Aに伝えられたこと、Aの思いをはっきりと確認できたことの段階を経て、Bは感情に焦点を当てて言語化することが出来た。このプロセスにより、Bがこれまでに採ってきた対処行動としての溜め込むという手段が、自分にとってあまり適切な行動ではなかった、ということへの気づきに繋がったと考えられる。

Bは、“共同絵画”以降のエクササイズでは、周囲への気配りよりも、自身の感情に焦点を当てて取り組むことが出来るようになっていた。その結果が、“未完の行為の完成”における、ずっと心に溜まっていた親友とのエピソードの再演と感情の直接的な表現（涙を流す）が起こり、カタルシスに繋がったと考えられる。

ここまでの体験を経て、基本的な他者への信頼感が低いBが、他者へ身を任せる“トラストウォール”に挑戦したことは、B自身の「一歩前に進みたい」とい

う気持ちの表れだったのだろう。また、シェアリングにおいても、「気持ちよかった」という明るい感情だけでなく、「怖い」という感情をも言語化できたことは、大きな変化であると言える。導入での思考や行動についての言及にとどまっていたBから見ると、感情に向き合うことが出来るようになったことは、辛い側面もあると同時に、確かな一歩としての手応えになったのだろう。そのことは、“別れの花束”で自分からAのところへメッセージを記入しに行ったことからも見取ることが出来た。

6.4 宿泊研修にSGEを取り入れてみて

SGEを取り入れた研修は、ピア・サポーターの宿泊研修としては、初めての取組であったが、A、B両名の変化からも見て取れるように、当初の目的である一歩踏み込んだ個人的な成長や気づきを促すことが出来た。これらの成長や気づきを促すことが出来た要因として、次の三点が考えられる。

一点目は、構成されたエクササイズと二名のFaの存在という二重に守られた枠組みの中で、メンバーが普段とは違う自分として研修に取り組むことを、徐々に受け容れることが出来ていた、という点である。國分（2001）が「人間は、枠組みがあつた方が自由になれる場合が多い」と指摘するように、明確なルールという枠組みと、そこから外れても守ってくれるFaの存在という枠組みがあつたからこそ、解放された存在として、自由に体験そのものに集中することが出来たと考えられる。また、Faが二名いたことも有効に働いており、メインFaが気付いていない点をサポートFaがそっと耳打ちしたり、休憩中などに状況を確認し合うなど、Faそのものを守る枠組みもしっかりしていたとも言える。

二点目は、葛藤にしっかりと向き合うことを求めた点である。“共同絵画”での出来事も該当するが、エクササイズ中やシェアリングの際のメンバーの発言に対し、＜みじめな話だけど笑いながら話しているのに気付いている？＞＜変態というのは？＞＜AはBの様子に気がついてた？＞など、メンバーが葛藤に気付けるようにFaが言語化することを心がけていた。生きていくことは葛藤の連続である。自分が抱きやすい葛藤と採りやすい対処行動に気づき、より適切な行動へと修正することが出来るようになることが、まさに成長そのものであると言える。

三点目は、メンバーとともに取組む中で起きる受容体験である。“トラストウォール”や“トリップ・トゥ・

ヘブン”のように、直接的にメンバーに支えてもらう体験も受容体験といえるが、守られた枠組みの中で行った自己開示を聴いてもらえること、起きた葛藤についてメンバーが見捨てずにきちんと見守ってくれることも大きな受容体験につながる。基本的な傾聴術などを習得しているピア・サポーターであれば、この効果はより大きな影響を及ぼしていたと考えられる。

最後に、Faの技量について述べたい。SGEにおいてFaに求められることは、メンバーの様子を観察しながら、一人ひとりが自己理解を深める援助をすることである。そのためには、メンバーがその場で抱えた葛藤にFa自身が怯まず向き合う必要がある。今回の研修を通してFa自身が気付いたことは、Fa自身が持つ、「葛藤を扱うことへの葛藤」である。シェアリングの際にもう一步踏み込んで質問していれば、その時のメンバーの感情をきちんと言語化してあげていれば、と思う場面がいくつもあった。そういう意味においては、Faにとっても気付きがあることは、SGEを

取り入れた効果の一つであると言えるのかもしれない。

引用・参考文献

- 森田健一ら：タイムダラーを導入した直接的コミュニケーション能力醸成の取り組み 日本工学教育協会 工学教育 60 巻 1 号 pp.106-111 2012
早坂浩志：学生に向けた活動 2—授業以外の取組 日本学生相談学会 50 周年記念誌編集委員会 学生相談ハンドブック 2010 pp.185-201
國分康孝ら：構成的グループエンカウンター事典 図書文化 2004
國分康孝ら：構成的グループエンカウンターの原理と進め方 誠信書房 2001 pp.6-11
中島義明ら：心理学辞典 有斐閣 1999
平木典子：自分の気持ちをきちんと伝える技術 PHP 研究所 2007
河合隼雄：こころの子育て 朝日文庫 2001

地方における女性のキャリア形成の事例報告

—— 福島県浜通り南部地域を事例として ——

薄葉 祐子*・渡部 順一**

Report of Women's Career Formation in Southern Area in Fukushima Prefecture

Yuko USUBA and Junichi WATANABE

Abstract

The purpose of this paper is to show : 1. the current conditions of women's career formation of local areas, and 2. the career development of women in southern area of Fukushima Prefecture was before the Great East Japan Earthquake.

We could confirm high proportion of women having resigned from their previous job upon their marriage and also having moved in from other areas to this district.

As their reasons to work, many of them have hoped the improvement of capacity than financial leeway, which reflects the fact that approximately 70% of them devote their time to some kind of self-development.

Moreover, approximately 90% of them have hoped "career building" and "balancing of work and family". However, from examining the findings, there is often a trade-off relationship between "career building" and "balancing of work and family". The trade-off makes their career development difficult.

1. は じ め に

本稿では、地方でも育児後の女性が望むキャリア形成は可能なのか、また女性の「育児に専念後、パートタイマーとして再入職」というキャリアパスに女性はどの程度満足しているのか、ということの問題意識として取り上げる。家事・育児のための柔軟な勤務条件の代償に、妥協しながらパートタイマーで再就職した女性のキャリア形成にどれほどの配慮がなされているのか。

橋本・宮川（2008）の研究によれば、大都市圏女性は地方圏女性と比較して、働きたくても働けない環境にあるという。武石（2009）も女性の就業参加に地域間格差が生じており、女性の有業率の低い大都市及びその周辺地域では就業を希望しながら就業できずにいる女性が多いと述べている。

「仕事も家庭も」という思いから就業したとしても、それが満足地点ではないはずであることは大都市でも地方でも変わりはない。もっと意欲的に働きたい、自分の能力を発揮したいという思いを抱いている女性は少なくないはずである。しかし地方では、子どもを保育所に預けてフルタイムで働くこと、夫の扶養家族で生活できるのにもかかわらず働いているということなどで、キャリア形成を目指す女性は周囲からは異質に見られがちである。このような環境である地方において女性のキャリア形成の現状を探りたいという思いから、調査対象者を地方圏の女性とし、調査地域を福島県浜通り地方南部に設定した。

この浜通り地方南部は過疎地域でもなく、県庁所在地でもなく、大都市でもなく、新幹線沿線でもないという、ある意味でどこにでもあるような典型的な地域であるとも言える。

本稿の調査事例報告の目的は、1に地方において就業経験のある女性が、自身のキャリア形成にどの程度満足しているのかを分析すること、2に東日本大震災前の福島県浜通り地方の女性のキャリア形成の状況を

2013年10月21日受理

* 東北工業大学客員研究員 / 東北大学大学院経済学研究科博士課程後期

** 経営コミュニケーション学科教授

分析することにある。現在、福島県浜通り地方では、震災およびそれに伴う東京電力福島原子力発電所事故からの復興が最重要課題となっており、労働環境の復興にも力が注がれている。今回の調査報告は震災前の女性のキャリア形成の状況を把握し検証するものであり、震災前の状況を公表することに意義がある。

この地域は現在避難地域となっている地区もあり、また被災した方、現在他の地区に避難している方がいるので、同じ調査が難しいことから、検証しておくことにも意義がある。

なお本稿は筆者の一人薄葉の2010年度修士論文「女性の職業生活に関する調査」のアンケート調査分析についての全データを用いた報告である。

修士論文ではアンケート調査データの一部を使用して、キャリア形成の方向性による類型化を行い、キャリア形成の促進要因と阻害要因を洗い出した。その上で、女性がキャリア形成するための第一段階である就業機会獲得における、外部環境（社会、政策、企業など）と内部環境（家庭状況、スキル、前職までのキャリアなど）との適合と、第二段階の実際のキャリア形成段階における本人外要因（初職、キャリアの支援者、女性活用策など）と本人要因（自立意欲、成長意欲など）との適合という、2つの二重適合の程度がキャリア満足度を左右することを検討した。

従って、アンケート調査データの全結果そのものについての公表は本稿が初めてである。本稿はサンプル数は少ないながら、アンケート調査データのクロス集計を行い、詳細をインタビューから補完する形で報告を行う。

2. 調査方法

2.1 調査目的

調査は地方という環境において「女性が主体的に就業機会を獲得し、キャリアを形成していく」ための要因と、キャリア形成の可能性について検証するために行った。

2.2 調査地域

調査地域は、福島県浜通り地方南部に位置する「いわき市」とその周辺地域の「広野町」「富岡町」である。（図1）

いわき市は福島県の南東端に位置する、人口約352,000人の市で、東北一の製造品出荷額を占める工業を基幹産業として、水産業、農林業、商業、観光



図1 調査地域

サービス業などの多様な産業が展開されている。広野町は南をいわき市に接する、人口約5,500人の町で、農業と土木を中心とする町である。富岡町は浜通り地方の中央部に位置し、人口約16,000人の町で、基幹産業は農業である（福島県総務部市町村総室（2010））。

2.3 調査対象者

調査対象者は、就業しているか、現在は非就労だが過去に就業経験を持つ25～60歳までの女性で、①広野小学校5年生・6年生の子どもをもつ母親、②専門学校・大学へ再入学、③ネットワークビジネス、④趣味サークル、⑤知人、⑥前述①～⑤からの紹介者、などのグループに所属する人達で、それぞれ、年齢層、子育ての環境、就業を取り巻く環境が重なっているという共通要素を持つ。

育児後に積極的にキャリア形成しようとする人はそれほど多くない。そのような人はある職種に偏っているのが地域の特徴であると考え、調査対象とした。

2.4 調査対象者の概況

調査人数は、いわき市24名、広野町10名、富岡町3名の合計37名である。

出身地が浜通り南部地域であるのは25名、それ以外の12名は結婚に伴い他地域から移動した者である。

年齢構成は20代3名、30代8名、40代16名、50代10名で、平均年齢は43.5歳である。

就業形態の内訳は、パート・アルバイトが最も多く11名、次いで自営業10名、正規雇用9名、学生4名、無職3名となっている。

最終学歴は高校卒業19名、短大卒業6名、専門学校・高専卒業3名、大学卒業以上9名である。（表1）

2.5 調査期間とデータ収集方法

調査期間は2010年3月から2010年12月である。データの収集方法は、調査対象者に対するアンケート

表1 調査対象者の概況

	居住地区	最終学歴	移住	年齢	現職就業詳細	キャリアパス
1	富岡町	高校		26	事務員（原子力関連会社）	事務員（原子力関連会社）7年 ※初職就職中
2	いわき	大学		28	T大学4年・アルバイト	大学進学断念→就職（4年で3回転職）→ 通信制大学入学→通信制大学卒業→社会福 祉士資格取得のためのT大学3年に編入
3	いわき	高専		29	（創業）	建設コンサルタント会社→情報サービス→ 現職（経営者、創業2年）
4	いわき	短大		30	T大学3年・アルバイト	事務（自動車販売会社）7年→結婚退職→ 介護職（原子力関連会社）3年→結婚退 職し広野町へ移動→プリント基板製造→現 職（事務（建設現場））2年に編入
5	いわき	大学		33	物流事務（インテリア販売店）	営業（インテリア販売店）入社→目物流 事務へ異動）11年 ※初職就職中
6	広野町	高校	あり	37	事務（建設現場）	事務（入社後ガリリンスタント勤務に異動） 1年→事務（原子力関連会社）3年→結婚退 職し広野町へ移動→プリント基板製造→現 職（事務（建設現場））
7	いわき	短大		37	市議会議員	老人福祉施設事務5年→ラジオのフリー パーソナリティ兼多種多様なアルバイト→ 現職（市議会議員1期目）
8	広野町	短大		38	食品製造	販売員（宝石店）3年6カ月→結婚退職→ 食品製造会社→開店→食品製造会社
9	広野町	大学		38	塾経営	塾講師2年6カ月→家庭教師→現職（塾経営）
10	広野町	短大		39	郵便局窓口業務	事務（サービス業）1年4カ月→結婚退職 →現職（郵便局窓口業務）
11	いわき	高校		39	T大学2年・アルバイト	事務（入社後本人希望でSE職へ異動）1年 10カ月→現場事務→ガスアスレオ製造会社 →社会福祉士資格取得のためのT大学に社会 人入学
12	いわき	大学	あり	40	看護師	営業（NTT）6年10カ月→1人目育児取得 しいわき市移動→看護学校へ再入学→現職 （看護師）
13	いわき	大学	あり	40	事務（大学産学連携窓口）	研究職（電機メーカー）→研究職（大学研 究所）3年→講師→事務（産学連携窓口）
14	いわき	高校		40	（求職中）	事務（建設会社）3年→老人ホーム事務（出 産後も継続）15年→順気のため退職
15	広野町	高校		41	眼科受付事務	キーバンチャーター（食品卸会社）3年→設計 事務所事務→リトリート→病院内メッセン ジャー→→現職（眼科受付事務）
16	広野町	高校		41	調剤薬局事務	実験助手（建設会社）5年→結婚退職→現 職（調剤薬局事務）
17	いわき	高校		41	不動産会社事務職	学習塾講師1年→市の第3セクター1年→ アークア力1年→専業主婦→現職（不動産 会社事務）
18	広野町	高校		43	調理	営業事務（建設業）12年→結婚退職→自営 →現職（調理）
19	いわき	高校	あり	43		事務（実業団に入るために入社）4年→医 療事務4年→専業主婦

	居住地区	最終学歴	移住	年齢	現職就業詳細	キャリアパス
20	いわき	高校		44	ネットワークビジネス	販売員（カメラ店）7年6カ月→専業主婦 13年→保育士4年→現職（ネットワークビ ジネス）
21	いわき	高校		44	テニスコラブ勤務	銀行員2年→医療事務1年5カ月→事務3 カ月→現職（テニスコラブ勤務）販売
22	広野町	専門学校		46	ファーストフード店副長	PCオペレーター（送り渡し）2年→パート （ファミリーレストラン）→結婚退職→介護 ヘルパー→ファーストフード店員→現職 （ファーストフード店副長）
23	広野町	高校	あり	46	祭祭場事務	品質管理（製造会社）10年→結婚退職し広 野町移動→自営実現せず→現職（祭祭場事 務）
24	いわき	大学	あり	46	専門学校	中学校教諭（国語）11年→アルバイトな がら給付付教室へ通う→シヨップ共同ユー ザー兼給付付講師→専業主婦→学生（言語 聴覚士資格取得目標）
25	いわき	専門学校	あり	46		会計事務2年→専門学校再入学→事務→結 婚退職しいわき移動→専業主婦
26	いわき	高校		48	婦人服シヨップ店長	会計事務所2年→計算センター1年→貸し 衣装店5年→婦人服シヨップ販売員→現職 （婦人服シヨップ、昇進して店長）
27	いわき	高校		49	動物病院事務	レストラン勤務2年→事務1年6カ月→ス ポーツ売場販売員5年→現職（動物病院受 付事務11年）
28	いわき	高校		51	ピアノ講師	ピアノ講師30年→
29	いわき	高校		51	ネットワークビジネス（代理店）	経理5年→結婚退職→市役所（非正規）1 年→専業主婦→現職（ネットワークビジ ネス代理店）
30	いわき	高校	あり	53	ネットワークビジネス（代理店）	銀行（窓口・事務）→結婚退職しいわき市 移動→会社受付→現職（ネットワークビジ ネス代理店）
31	富岡町	大学	あり	53	放送大学・取締役	パターンナー→結婚退職し富岡町移動→機 製のパターナー→放送大学11年目+夫の会社の 取締役
32	いわき	大学院	あり	53	大学准教授	小学校教諭（3年）→小学校教諭3年→大 学院修士課程→大学院病棟心理士→大学教員 医学部助教授→大学教員准教授（公理学）
33	いわき	高校	あり	55	ネットワークビジネス（代理店）	一般事務2年→結婚退職→家業手伝い→自 己雇用
34	広野町	短大		55	ネットワークビジネス（代理店）	公務員（保健士）→保育士（29年）→現職 （ネットワークビジネス代理店）
35	いわき	短大		55	ガーデニングシヨップ勤務	事務（経理）2年3カ月→電話交換手6年 →栄業士3年→専業主婦→現職（ガーデニ ングシヨップ）
36	富岡町	高校		55	保険外交員	事務（保険会社）4年6カ月→作場の受付・ 電話交換→衣料品店→現職（保険外交員17 年）
37	いわき	大学		56	ネットワークビジネス（代理店）	塾経営（習字）→塾経営→家業手伝い→ 現職（ネットワークビジネス代理店）

と、筆者自身によるインタビューである。

データは対象者の了解を得て録音したインタビューとインタビューメモ、アンケート回答である。

3. 結果分析

本章ではアンケート調査のクロス分析結果について述べる。

はじめは初職に関する設問で、初職は希望どおりの職種に就くことができたか、初職は適職だと感じたか、振り返ってみて初職に満足しているかなどを見ていく。

次に、さまざまな理由で転職や退職を余儀なくされる場合があるが、女性には避けて通れない結婚、妊娠、出産、育児、介護を主たる理由で退職した経験があるかどうかをインタビューでの発言内容をもとに分析する。

次いで、それまでの職業生活でどのようなことがあったか、「キャリアアップの助言・援助者」はいたか、「目標となる人（理想像）」はいたか、キャリアアップをしたいと思ったことがあるか、再就職または転職のために準備したことがあるかなどを見ていく。

また、家庭と仕事の両立の板挟みになっている場合においても、なぜ働くのか。経済的ゆとりのためか、自己実現や能力開発をしたいからかなど、働くことの意味や目的について分析する。

最後に、職業生活の結果としてどの程度満足しているかのギャップを見るために、「就業形態」の理想と現状をはじめとして、「前職までの経験や資格の活用度」「キャリアアップ」「家庭と仕事の両立」「やりがい・自己実現」などの理想と現実、そして将来はどのような職業生活を送っていると思うかという「職業生活の展望」などについての分析を行う。

3.1 初職に関する設問

ここでは初職、つまり学校を卒業してから最初に就いた仕事に関して尋ねた。初職について取り上げた理由は、先行研究から新卒後の最初の3年間の勤務状況がそれ以降にも影響を及ぼす（佐藤（2010））ことが明らかになっているためである。

以下に初職は希望どおりだったか、その仕事が好きで自分に向いていると感じられたか（適職感が持てたか）、振り返ってその仕事に就いたことに満足しているかの結果を述べる。

(1) (設問) 初職は希望どおりの職種に就くことができたか。

初職について希望どおりの職種に就くことができたのは21人（56.8%）、希望どおりでなかったのは10人（27.0%）、特に希望なく就職したのは6人（16.2%）である。（図2）

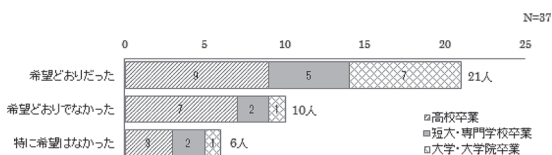


図2 初職は希望どおりの職種に就くことができたか

最終学歴とのクロス集計では、高校卒業19人のうち希望どおりだったのは9人（47.4%）で、希望どおりでなかったのは7人（36.8%）である。短大・専門学校卒業9人のうち希望どおりだったのは5人（55.6%）で、希望どおりでなかったのは2人（22.2%）である。大学卒業以上9人のうち希望どおりだったのは7人（77.8%）で、希望どおりでなかったのは1人（11.1%）である。

このことから、高学歴になるほど希望どおりの職種に就けたという傾向が見られた¹。

(2) (設問) 初職は適職だと感じましたか。

初職が自分に合っているとする適職感を感じられたのは28人（75.7%）、適職感を感じられなかったのは9人（24.3%）である。（図3）

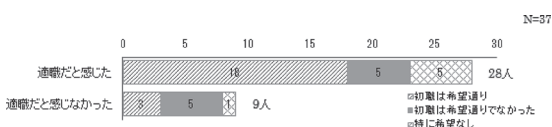


図3 初職は適職だと感じたか

初職が希望どおりだったか否かとのクロス集計では、初職が希望どおりだった21人のうち3人（14.3%）が適職感を得られなかったのに対し、初職が希望どおりでなかった人の10人のうち5人（50.0%）が適職感を得られていない。

このことから、適職感には初職に希望どおりの職種

¹ 1985年男女雇用機会均等法が成立した頃は、女性の進学は短大が一般的で、4年制大学への進学は12%ほどであった（平成23年版男女共同参画白書）。

に就けたかどうかが強くと影響していることが認められた。

(3) (インタビュー) 初職について：やりがいを感じていたか、どんな方向で成長意欲を抱いていたか、どんな気持ちで仕事していたか。

初職において前向きに仕事に取り組み、充足感を感じられ、習得した職務能力が現在も役に立っているとして初職に満足しているのは26人(70.3%)、初職に満足していないのは11名(29.7%)である。以下に初職が希望どおりだったか否かとのクロス集計を行う。(図4)

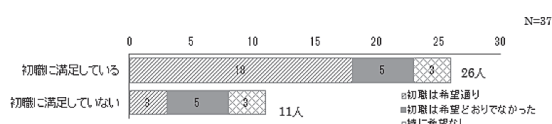


図4 初職に満足しているか

初職が希望どおりであった人の21人のうち3人(14.3%)が満足感を覚えていないのに対し、初職が希望どおりでなかった10人のうち5人(50.0%)が満足感を持っていない。

このことから、初職の満足感にも初職が希望どおりであった否かが影響していることが認められる。

3.2 (設問) 結婚、妊娠、出産、育児、介護を主たる理由で退職した経験はありますか。

結婚、妊娠、出産、育児、介護を主たる理由で退職経験がある人は20人(54.1%)である。就業継続、若しくは上記以外の理由で転職、退職したことがある人は16人(43.2%)、無回答は1人である。以下に退職・継続理由とのクロス集計を行う。(図5)

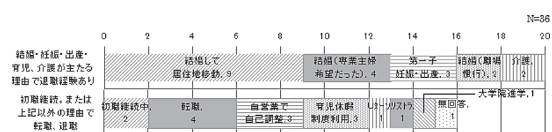


図5 退職の有無とその理由

上記の理由で退職したことがある20人(54.1%)のうち、結婚に合わせて退職したのは15人(40.5%)である。結婚と同時に福島県浜通り南部地域に移動を余儀なくされたのは9人(24.3%)で、およそ4人に1人が他地域からの流入である。

育児休業制度など就業支援を受けて就業継続できた人はわずか3人(8.1%)で、自営業により自己調整しながら就業継続したのも同様に3人(8.1%)である。

これにより「妊娠、出産、育児」よりも「結婚」というタイミングがキャリア形成中断の原因となることが明らかになった。

3.3 (設問) 働く目的は何ですか。または何でしたか。(複数選択可)

この設問では働く目的を調べることで、経済的な理由、またはやりがいや能力の向上などの理由のいずれにより重心が置かれているのかを確認した。(図6)

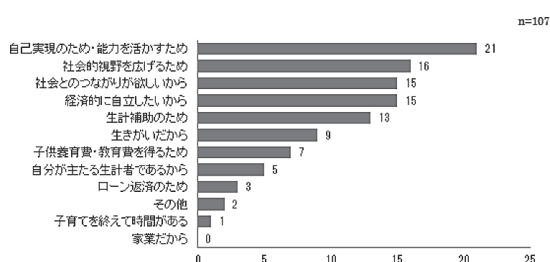


図6 働く目的は何ですか

主たる目的として「自己実現のため・能力を活かすため」が21人(56.8%)で一番に挙げられている。次いで「社会的視野を広げるため」16人(43.2%)、「社会とのつながりが欲しいから」15人(40.5%)、「経済的に自立したいから」15人(同)が挙げられている。「生計補助のため」は13人(35.1%)、「子供の養育費・教育費を得るため」は7人(18.9%)など、経済的なゆとりについての回答は5番目以降に挙げられている。

このことから単に再就職をして収入を得ることだけが目的ではなく、地域社会よりも広い範囲の社会と関わりあいながら能力向上を望んでいることが伺える。

3.4 (設問) 現在または過去に、職業生活において「成長意欲を促してくれる人」や「キャリアアップの助言者・援助者」はいましたか

ここではキャリアの支援者、例えば昇進や将来的に有益な資格取得や職務能力習得のアドバイスをしたり、そのようなルートへ導いてくれる人、親身になって相談に応じてくれる人が周囲にいたかどうかを尋ねている。なおアンケート内では「キャリアアップ」と

は、「昇進、より高度な資格取得や職務能力を身につけること」と定義している。

キャリアの支援者について、25人(67.6%)がいたと回答している。(図7)

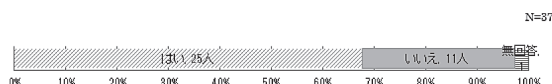


図7 キャリアアップの支援者はいたか

インタビューから具体的にどのような人物であったか補完すると、男性上司を挙げた人が12人で、女性上司を挙げたのは1人のみである。その他、先輩を挙げた人は9人、パートナーを挙げたのは2人である。

3.5 (設問) 現在または過去に、職業生活において目標となる人(理想像)はいましたか

自分の未来像として「あの人のようになりたい」などモチベーションアップにつながる人が身近にいることは、キャリア形成を意識することになるため重要である。

仕事上の目標になる人について、25人(67.6%)がいたと回答している。(図8)

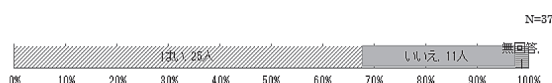


図8 仕事上の目標となる人はいたか

インタビューから具体的にどのような人物であったか補完すると、女性の先輩を挙げた人が14人、同僚を挙げた人は3人、父親、母親、親戚(女性)などを挙げた人は3人、上司を挙げた人は2人(男性上司、女性上司)である。

3.6 (設問) 現在または過去に、キャリアアップをしたいと思ったことがありますか。

ここでは「キャリアアップ」とは、「昇進、より高度な資格取得や職務能力を身につけること」と説明した上で回答を求めている。(図9)

現在または過去にキャリアアップしたいと思ったかについて32人(86.5%)が思ったと回答しており、大半の人が少なくとも一度はキャリア形成において高い目標を持ったことがあることが分かる。

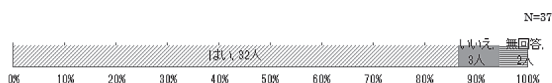


図9 現在または過去にキャリアアップをしたいと思ったことがあるか

3.7 (設問) 再就職または転職のために準備したことはありましたか。(複数選択可)

ここでは働く上で、何か準備や自己啓発を行ったことがあるかを尋ねた。(図10)

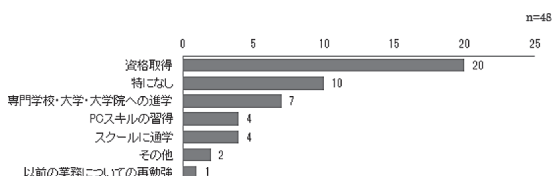


図10 再就職または転職のために準備したこと

資格取得が最も多く20人(54.1%)で、スクールに通学(4人(10.8%))も資格取得のためであることを含めると、24人(64.9%)が取り組んだことがある。資格は医療事務やヘルパーをはじめ、金融関連や社内資格など多岐に渡っている。

専門能力獲得のために専門学校・大学・大学院等へ進学しているのは7人(18.9%)である。特に何もしたことがない人は10人(27.0%)である。

3.8 (設問) 【就業形態】の理想と現状についてご記入ください。

ここでは就業形態の理想と現実のギャップを尋ねている。以下に理想と現状のクロス集計を行う。(図11)

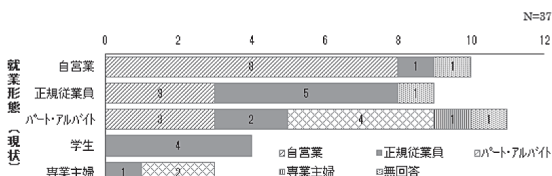


図11 就業形態の理想と現状

現状で自営業の10人のうち8人(80.0%)は、理想通り自営業を実現している。自営業の人は理想と現実がおおむねマッチしている傾向にある。

現状で正規従業員の9人のうち5人（55.6%）は正規従業員での就業を実現し、他3人（33.3%）は自営業を希望している。

現状でパート・アルバイトの11人のうち4人（36.4%）がパート・アルバイトでの就業を実現して、他は理想として自営業3人（27.3%）、正規従業員2人（18.2%）、専業主婦1人（9.0%）にばらついている。

現状で専業主婦の3人は就業を望んでいる。現在学生の4人は専門資格獲得後に正規従業員を希望している。

数値的にみると、現状で学生とパート・アルバイトの人にギャップが大きいことが認められる。

3.9 （設問）【前職までの経験や資格の活用度】の理想と現状の満足度についてお答えください。

ここでは前職までの経験や資格がどの程度活かされているか、それまでのキャリア活用の満足度について尋ねている。以下に理想と現状のクロス集計を行う。（図12）

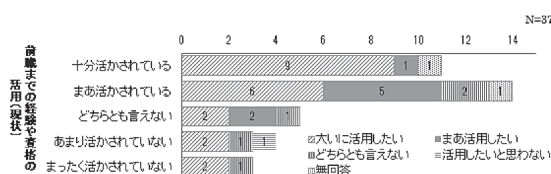


図12 前職までの経験や資格の活用の理想と現状

全体的な傾向としては、29人（78.4%）がそれまでのキャリアを活かしたいと希望し、25人（67.6%）がおおむね活かせていると感じている。

現状で「十分活かされている」「まあ活かされている」の25人（67.6%）のうち21人（56.8%）が理想に近いキャリア活用ができていると満足している。

現状で「どちらとも言えない」「あまり活かされていない」「まったく活かされていない」の12人（32.4%）のうち8人（21.6%）はキャリアの活用が理想通りではないと答えている。

以上のことから前職までの経験や資格の活用度について、5人に1人がギャップを抱えていることが認められる。

3.10 （設問）【キャリアアップ】の理想と現状の満足度についてお答えください。

キャリアアップの満足度について、以下に理想と現状のクロス集計を行う。（図13）

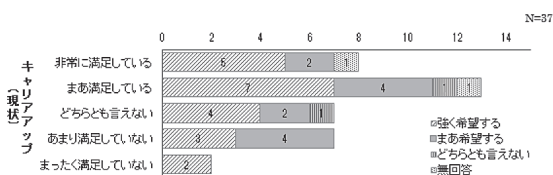


図13 キャリアアップの理想と現状

全体的には33人（89.2%）がキャリアアップをしたいと希望し、21人（56.8%）がキャリアアップの現状におおむね満足している。

現状で「非常に満足している」「まあ満足している」の21人（56.8%）のうち18人（48.6%）が理想に近いキャリアアップができていると満足している。

現状で「どちらとも言えない」「あまり満足していない」「まったく満足していない」16人（43.2%）のうち15人（40.5%）はキャリアアップが理想通りではないと回答している。特にキャリアアップを強く希望するにも関わらず9人（24.3%）が満足できていないことから、キャリアアップの状況について、約4人に1人が大きなギャップを抱えていることが認められる。

3.11 （設問）【家庭と仕事の両立】の理想と現状の満足度についてお答えください。

ここでは家庭と仕事のバランスについての満足度を尋ねている。以下に理想と現状のクロス集計を行う。（図14）

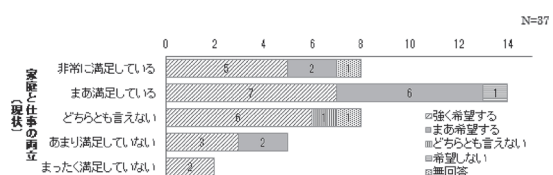


図14 家庭と仕事の両立の理想と現状

全体的な傾向として、33人（89.2%）が家庭と仕事の両立を希望し、半数以上の21人（56.8%）がおおむね両立の度合いに満足している。

現状で「非常に満足している」「まあ満足している」の22人(59.5%)のうち20人(54.0%)が理想に近い家庭と仕事の両立ができていると満足している。

現状で「どちらとも言えない」「あまり満足していない」「まったく満足していない」15人(40.5%)のうち13人(35.1%)は家庭と仕事の両立ができていると思っている。

しかし「両立」のバランスについては個人差があり、13人がギャップを抱えている。

3.12 (設問)【やりがい・自己実現】の理想と現状の満足度についてお答えください。

ここでは、やりがいや自らの自己実現にどの程度満足できているかを尋ねている。以下に理想と現状のクロス集計を行う。(図15)

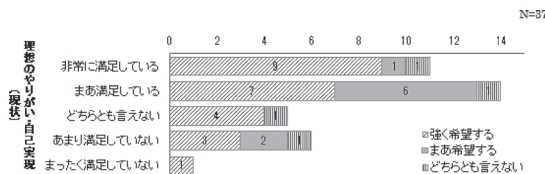


図15 やりがい・自己実現の理想と現状

全体的な傾向として、33人(89.2%)がやりがいを持つことや自己実現を希望し、23人(62.2%)が理想に近いとして満足している。

現状で「非常に満足している」「まあ満足している」の25人(67.6%)のうち23人(62.2%)が理想に近いやりがいや自己実現であると満足している。

現状で「どちらとも言えない」「あまり満足していない」「まったく満足していない」の12人(32.4%)のうち10人(27.0%)はやりがいを持つことや自己実現したいという思いが理想とかけ離れており、ギャップを抱えていることが認められる。

3.13 (設問) 将来はどのような職業生活を送っていると思いますか。

ここでは、先の設問3-8～設問3-12まで見てきた「就業形態」「前職までの経験や資格の活用度」「キャリアアップ」「家庭と仕事の両立」「やりがい・自己実現」の理想と現実を自己評価した上で、将来の職業生活の予想を尋ねている。以下に現在の就業形態とのクロス集計を行う。(図16)

将来の職業生活と現状の職業生活を比較して、「理

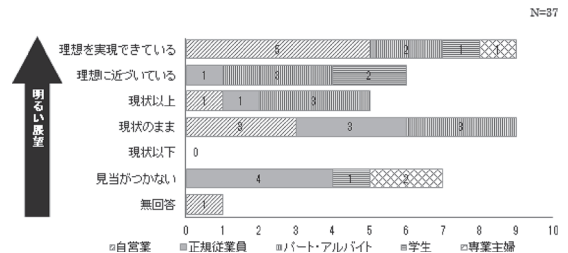


図16 キャリア展望

想を実現できている」9人(24.3%),「理想に近づいている」6人(16.2%),「現状以上」5人(13.5%),「現状のまま」9人(24.3%),「現状以下」0人(0.0%),「見当がつかない」7人(18.9%)という回答が得られた。

全体的に見て20人(54.1%)が将来の職業生活が現状より上向いていると回答しており、約半数は「明るい」展望を描いている。

就業形態別に見ると、自営業10人(100%)のうち6人(60.0%)が将来は上向くとの回答で、3人(30.0%)が現状のままと回答している。正規従業員9人(100%)のうち2人(22.2%)が上向くとの回答で、7人(77.8%)が現状のままだ見当がつかないと回答している。パート・アルバイト11人(100%)のうち8人(72.7%)が将来は上向くとの回答で3人(27.3%)現状のままと回答している。学生4人(100%)のうち3人(75.0%)が上向くとの回答で1人(25.0%)は見当がつかないと回答している。専業主婦3人(100%)のうち1人(33.3%)が上向くとの回答で他2人(66.7%)は見当がつかないと回答している。

このように自営業とパート・アルバイトは将来の職業生活は「明るい」展望を描いているのに対し、正規従業員は約半数が将来の職業生活は見通しが立たないと感じている傾向が見られ、就業形態によってキャリア展望が異なることが認められた。

4. ま と め

ここでは調査結果をもとに「初職について」「転職・退職の理由」「職業生活で起こったこと」「働くことの目的」「職業生活における理想と現実のギャップ」の5つの視点からまとめを述べる。

4.1 初職について

(1) 最初の就職について

初職は希望どりの職種に就くことができたかどうか

かを学歴別に分析を行ったところ、学歴が高いほど希望どおりの職種に就けたことが明らかになった。

高校卒業の場合、個人ではなく学校主導の就職²となる傾向にある。「初職は進路の先生に勧められたのでそこに就職しただけだった」「希望の会社に就職した訳ではなく、学内選考に落ちて（入社試験を受けられなかった）」「大学進学を希望していたが父親の反対で大学へは行けず、学校からの紹介で工業系実験助手の仕事に就いた」などの話も出た。

希望する職種に就けたかどうかの判断は、少なくとも自己選択の機会を持てたかどうか左右している。

（2）初職における適職感

初職は適職だと感じたかどうかについては、初職が希望どおりであったかどうかで分類した上で分析を行った。初職が希望どおりだった人の85.7%は適職感が得られていることから、適職感には初職で希望どおりの職種に就けたか否かが反映されることが明らかになった。一方で初職が希望どおりでなかったうちの半数は適職感を得たわけだが、その経緯は次のとおりであった。

「（教員になれなかったが塾講師となり）教育という仕事に関わることでやりがいを感じていた」、「自分の知らない世界を知ることができ、奥深さや自分の世界が広がるのを感じ、やりがいを感じていた」、「やりがいもあったから耐えられた。分からないことも楽しめた」、「天職と思えるほど楽しかった」、「辛くて辞めたところから努力して努力して、そしたらやりがいのある仕事になった」と語っている。キーワードとして「やりがい」が挙げられており、適職感を得るにはやりがいを持って仕事に取り組めるかどうか強く影響していることが分かる。

（3）初職の満足度

初職の満足度についても初職で希望どおりの仕事に就けたかどうかで分類した上で分析を行った。全体的には70.3%の人が初職に満足感を持っており、おおむね満足している傾向にある。初職が希望どおりだった人の85.7%は満足感が得られていることから、初職が希望どおりであったかや初職の適職感が、満足度にそのまま反映された結果となっている。

一方で初職に満足感がなく且つ初職は希望どおりでなかった5人の初職の印象は「ほんとにやりたい仕事ではなかった。つなぎの仕事と考えていた。生きるための仕事という感じで、やりがいとかは二の次でなんとか生活のために働いていた」、「親戚からの紹介で嫌だったが就職した。人間関係が難しくとりあえず1年は頑張らなくてはという気持ちで仕事をしていた」、「短大卒業後、自宅に戻りたくなかったのと宝石や時計への憧れで宝石店へ就職した。仕事を覚えるのは楽しかったが成長意欲はなかった」、「希望どおりの会社へ入社したわけでもなく、簿記の資格も活かせずとにかく辞めたかったが石の上にも3年という思いで続けた」、「無我夢中で仕事をしていたというのが実情で適職かどうかは感じなかった。成長意欲は全くなかった。仕事自体もずっと4年半同じところにいて毎月同じ仕事の繰り返しだった」と語っている。

4.2 転職・退職の理由

インタビューでの発言内容をもとに分析した結果、54.1%と約半数が結婚、妊娠、出産、育児、介護を主たる理由で退職した経験を持つ。

自宅で塾講師をしており育児中も就業継続をした人は「こどもを持つ前は、仕事の時間を減らしても仕事を継続したいと思っていた。時に授乳しながら指導していた時期もあった。どんなに忙しくても家庭が中心、こどもが中心で仕事は成り立つ」と語っている。

専業主婦が夢だった人で、それを実現させたにも関わらず、再就職をしている人もいる。「夫の両親から自分たちが子どもの世話をするから働くように言われた。辞めたくても辞められなかった」「義母に一つの家に女性二人はいらないということで仕事をしてほしいと言われ、仕事をするようになった。自分の子供だから自分で育てたかったが、それを通せなかった」「両親と同居の気遣いで精神的につらい思いをしたから、子供が10歳ぐらいになったところ「家にいたくない」という思いから再就職した」など、夫の両親との同居の弊害も見られた。

² 日本では、新規学卒者には一般の求人とは区別された新規学卒求人が設けられている。特に高卒の場合、企業は過去の採用経験に基づき、配布先を限定して求人票を配布する。（求人票の配布には職業安定所も関与している）学校側は配布された求人の割り振りに際し、1回につき生徒1人に1社しか割り当てしない「1人1社制」の原則（学校推薦）がある（日本労働研究雑誌 No. 561/April 2007「高校が就職斡旋すること—高校がハローワーク？」石田浩）。このように高卒就職においては、学校や行政による就職指導・斡旋などが関与した就職率は7割強で推移してきた（堀有喜衣（2012）「『日本型』高校就職指導を再考する」日本労働研究雑誌 No. 619/Special Issue 2012）。この傾向は2009年から弱まりつつあることが示されている（同）。

結婚と同時に退職した人は、「結婚前は、結婚と仕事を両立することは考えられなかった。(中略)仕事は集中して責任もってやりたかったので、二足のわらじは絶対はけないと思っていた」「結婚前は長く働きたいとは思っていなかった。当時³は女性は何年も働いていると、まだ結婚しないのかと言われる時代だったせいもある」などと語っている。

いずれにせよ、結婚というタイミングだけに注目すると40.5%の人が退職をしており、結婚がキャリア形成中断に大きく影響していることが認められた。

4.3 職業生活で起こったこと

(1) 「キャリアアップの助言・援助者」

職業生活における「キャリアアップの助言・援助者」については、67.6%がいと回答している。女性上司を挙げた人は「厳しく教えてくれる。入社してから常に一緒にいる。いい方向に導いてもらったと思う」と語っている。この女性上司は同時に彼女の仕事上の目標にもなっており「一番尊敬できる部分は仕事に対する熱意と向上心。向上心の部分は真似したい」と語り、キャリア形成に励んでいる。先輩を挙げた人の1人は「(心理士としての)業績をまとめること、大学院へ進んで博士号と取った方がよいこと、研究の進め方など教えていただき、目の当たりに見てきた。頑張りなさいという励ましがすごく励みになった」と語っている。

(2) 「目標となる人(理想像)」

職業生活で「目標となる人(理想像)」についても67.6%がいと回答している。やはり身近な存在である「女性の先輩」が目標になることが多い。女性の先輩を挙げた人は「自分がこんな人生だったらいいなという見本的な人に出会った」「黙々と働く人でかっこよかった」「仕事に取り組む姿勢が尊敬できる」など、印象は様々である。父親を挙げた人は「ただただ本当に一生懸命仕事している背中。それがすごいと思う」と仕事に取り組む姿に影響を受けている。母親を挙げた人は「両親のキャリアアップ志向が高かった。自分のキャリアアップ志向が高いのは「血のようなもの」。進学する大学や将来は教員を目指すことなど、親に(人生の)ルールを敷かれたが満足している」と影響の強さを語っている。

(3) キャリアアップ志向

キャリアアップをしたいと思ったことがあるかにつ

いては、86.5%が思ったことがあると回答している。「女で初めての従業員からの管理職になりたいと思っていた」「資格を取って専門職をしたい」「業務知識については日々勉強している。今後は他の業務も行えるようにしたい」「キャリアアップしないとだめだと思った。誰でもぼっと入ってできる仕事ではなくて資格を活かした専門的な仕事がしたい」「ファーストフード店の店舗長をめざし、パートから昇格した」「キャリアアップについては常に少しずつ上は望んでいたのかと思う」「昇進したい場合に資格がないと試験を受けられないのと自分にもプラスになるので資格を取得してきた」などが挙げられている。

(4) 自己啓発

再就職または転職のために準備したことについては、資格取得とスクールに通学を合わせると64.9%が何らかの資格取得に取り組んでいる。専門学校には看護師資格、ビジネス系資格、言語聴覚士資格などの資格取得を目的として入学している。大学への入学者は大学卒業資格を得て社会福祉士の資格取得を目的に入学している。

このような自己投資には経済的負担が大きいという話も出た。「高校卒業後4年働いて学費を貯めて、それから通信制大学へ行った」という人もいる一方、シングルマザーで子育てをしながら特待生として学費優遇を受けつつ奨学金を受けながら夜のアルバイトをして大学生活を送っている人や、アルバイトを掛け持ちしながら大学へ通う人もいる。

また経済面だけではなく実際に学校へ通学している間は「夫がだんだんトーンダウンしていったのでつらかった。辞めろとはまでは言わないけど、もうすごくいつもイライラしていた」「夫に文句を言われたことはないが親戚からはそれだけお金を使って何になるんだと言われていた」など精神的な負担についても話が聞かれた。

4.4 働くことの目的

就労の理由としては「自己実現のため・能力を活かすため」が56.8%で一番に挙げられ、次いで「社会的視野を広げるため」43.2%となっており、経済的なゆとりよりも能力開発を望む傾向が認められる。

「仕事は自己実現できる場で、人の役に立てるのであれば一石二鳥だ」「仕事は自分のやりがいとか輝ける場所だと思うことがある」「(言語聴覚士を目指すことは)お金ではなく専門性と社会貢献を重視している。あとは収入の安定性」「今まで転職のときには専門性

³ 1980年代後半

を活かしたいと思ってきた。収入が少なくても業務（心理士）だけは貫けるようにしてきた」「もっと（研究職としての）知識や経験を活かせれば」などが挙げられている。

4.5 職業生活における理想と現実のギャップ

（1）「就業形態」の理想と現実

「就業形態」の理想と現実については、正規従業員とパート・アルバイトにおいてギャップが大きいことが認められた。

現状がパート・アルバイトの人は理想として正規従業員を希望する割合が多いのではと推測していたが、そのような傾向は見られない。「成長意欲はあるが正社員になりたいという野心はない。勤務時間が長くなるし、責任が重くなるから」「正社員になるとノルマが課せられるから」と積極的にパート・アルバイトという形態を選択している人も見られる。

（2）「前職までの経験や資格の活用度」の理想と現実

「前職までの経験や資格の活用度」の理想と現実については、29人（78.4%）がそれまでのキャリアを活かしたいと希望し、21人（56.8%）がおおむね活かしていると感じている。

武石（2006）で再就職ではもともと希望する就業分野に就けない状況にあることが指摘されており、前職までのキャリアが活かさないことに、不満を抱いている人が多いのではないかと推測していたが、本調査では前職までのキャリアの活用度にはおおむね満足している結果となっている。

（3）「キャリアアップ」の理想と現実

「キャリアアップ」の理想と現実については89.2%がキャリアアップをしたいと希望し、そのうちの56.8%はキャリアアップが理想に近いとおおむね満足している。一方で40.5%はキャリアアップが理想通りではないと回答している。他の項目と比較すると、このキャリアアップについてギャップを抱えている人が際立って多いことが認められた。

キャリアアップが理想に近いと満足している人は「これまでの経験を活かせる次の職を見つけてから辞めるためには資格を取ったり自分の業績を高めたりしなければ次の望みは叶えられないので、またそれに向かってきた感じ」「どうせ同じように働くならもっと上に」「自分の能力はまだ60%しか出せてないと思っている。これからも向上する能力が必要だと思うし、努力すべきと思っている」と話す。

一方で理想とのギャップを感じている人は「一度辞めると本当に希望する職種に就くのは難しい」「義父の紹介で辞められず、適職とは感じずに15年働いた」と話している。

（4）「家庭と仕事の両立」の理想と現実

「家庭と仕事の両立」の理想と現実については89.2%が家庭と仕事の両立と希望し、56.7%がおおむね両立の度合いに満足し、35.1%が家庭と仕事の両立ができていないと思っている。

約9割が両立を希望するように、ワークライフバランスはかなり重要な要因である。働くにあたり、家庭と仕事が両立できることは大前提であるが、両立の度合いは個人差がある。「仕事と家庭の「両立」は、掃除・洗濯・食事がある程度できる状態で働ける程度」「両立の程度は仕事7：家庭3でも両立できていると思っている」「自分にとって家庭と仕事の両立の度合いは家庭6：仕事4」などである。中には家族への罪悪感を抱えながら働いている人もいる。

この「両立」の部分での問題を避けるために、積極的に勤務条件がゆるいパート・アルバイトという就業形態を選択する人も見られる。

（5）「やりがい・自己実現」の理想と現実

「やりがい・自己実現」の理想と現実については、全体的な傾向として、89.2%がやりがいを持つことや自己実現を希望し、62.2%が理想に近いと満足している。しかし27.0%は理想と現状でギャップを感じている。

やりがいについては「どんな仕事でもそこに何か自分が積極的に関わればやりがいは見出ししていけると思う」「やればやるほどいろんなことができるようになる。いろんなことに展開していける」など満足の声が聞かれた。

やりがいや自己実現で理想通りでないと感じている人は「これまで取得した簿記や医療事務の資格が活かさない」といった能力が活かさないことや、「インテリアコーディネーターの資格を取りたいが1歩踏み出せない」「仕事を探そうとは思いますが（実際に求職活動はしていない）」「教育関係へ転職したいが転職に向けた準備はしていない」など目標に向かって行動できないジレンマが、自己実現におけるギャップを感じさせていると考えられる。

（6）「職業生活の展望」

「職業生活の展望」については54.1%の人が現状よりも将来の職業生活は「明るい」という展望を描いている。

就業形態別にクロス分析を行ったところ、自営業とパート・アルバイトの将来の職業生活は「明るい」展望を描いているのに対し、正規従業員は約半数が将来の職業生活は見当がつかないと感じている傾向が見られた。このことから就業形態によってキャリア展望が異なることが認められた。

(7) 総括

総合的にみると、理想と現実について「キャリアアップ」40.5%, 「家庭と仕事の両立」35.1%, 「やりがい・自己実現」27.0%, 「前職までの経験や資格の活用度」21.6%の順番でギャップを抱えていることが明らかになった。

5. 成 果

5.1 本調査の意義

全体的に見て、結婚というタイミングで退職をした割合が高く、また同時に他地域からの流入が多いことが認められた。働く理由では経済的ゆとりよりも能力向上を挙げる人が多く、それを反映するように約7割の人が何らかの自己啓発に取り組んでいる。また約9割の人が「キャリアアップ」と「家庭と仕事の両立」を希望しつつ⁴、しかしそれらはトレードオフの関係にあるため、他の要因よりもより大きなギャップを抱えていることが見受けられた。

5.2 促進要因と阻害要因

キャリア形成促進において、支援者である「キャリアアップの助言・援助者」や行動を起こす動機付けになる「(職業生活で)目標となる人」の存在は重要である。「目標となる人」を見て自ら行動を起こしていく人、「助言・援助者」「目標となる人」からの強い勧めで意識や行動を変えていった人が見受けられた。内部要因としてもともと持っている「自己実現欲」「学習意欲」が、外部要因である「支援者」や「目標者」の刺激により、キャリア形成のための行動が起こるという結果が得られた。さらにキャリア形成意欲を共有できる「仲間(同志)」の存在がモチベーション維持

に寄与していることがインタビューから確認できた。

一方でキャリア形成の阻害要因として、「周囲の否定的な反応」、「家族の反対」、性別役割分業意識や「こどもは自分の手で育てる」等の「社会性」に阻まれる場合や「社会性」に自らも同調している場合などが挙げられ、キャリア形成への関心が薄くなる傾向が見られた。

5.3 調査地域への貢献

本調査は現在福島第一原子力発電所の事故を受け避難を余儀なくされた富岡町と広野町、同様に多大な被害を受けたいわき市が調査地域となっている。

この地域において、東日本大震災の半年前に女性のキャリア形成の実情について調査したことは震災以後に同じ調査ができない可能性が高く、一定の価値があると考えている。

6. 課題と今後の展開

6.1 本調査の限界

本稿は福島県浜通り南部の「いわき市」「広野町」「富岡町」に限定して、働く女性のキャリア形成の一定の傾向を見ることができたが、一般性については、ある一定の広がりを持った地域、例えば福島県や東北六県、あるいは全国調査との比較が必要という課題がある。

6.2 経済指標について

当該地方の経済指標として、「表2 主要経済指標1」(面積、人口、農業産出額、製造品出荷額等、小売業年間商品販売額)、「表3 主要経済指標2」(男女別人口、年齢別人口構成、産業別就業者割合)を記載するが、いずれも分析までは至っていない。これらの点について今後の調査の際は考慮したい。(表2)(表3)

6.3 経済背景

調査対象者の30歳代後半～50歳代の入職時は安定成長の時期で、経済成長率は1965-73年度8.9%、1974-85年度は3.9%、1986-90年度は5.0%であった。調査対象者の30歳代前半以降の入職期の経済成長率は1991-95年度1.4%、1996-2000年度は0.8%、2001-05年度は1.3%、2006-12年度は0.2%であり景気落ち込みが顕著である。(財務省財務総合政策研究所(2013)「日本経済の現状と課題」)

インタビューから経済情勢の負の影響を受けたという声は上げられていない。しかし経済成長が鈍化した

⁴ 女性が「家庭と仕事の両立」を希望する理由として、1つ目には性別役割分業の意識が根強いことが挙げられる。2つ目としては、夫の家事・育児参加は低い水準にとどまっており(総務省平成23年社会生活基本調査)、家庭での家事・育児分担は女性に偏っている。そのため女性が仕事をする上では、家庭と仕事の両立を図らざるを得ない状況にあることが挙げられる。

状況においては、入職・転職先が減少し、そのことがキャリア形成に大きく影響することは必須である。そのため、サンプル数を増やした上で、出生コーホート別の分析をする必要があるという課題も明らかになった。

6.4 キャリアの「支援者」や「目標になる人」

また本調査では「メンター」や「ロールモデル」という言葉を使用しなかった。調査対象者には一般的ではないと考えたためである。一方で「キャリアアップの助言者・支援者」や仕事上の「目標となる人」という言い回しを行っている。

「キャリアアップの助言者・支援者」や仕事上の「目標となる人」などキャリア形成におけるキーパーソンについて7割近い人が「いた」と回答しているが、それらキーパーソンと本人の内面的な要素（やりがいや自己実現欲、キャリアアップ志向など）がどのように関わり合い、その結果としてどのようなキャリアパスの選択に至るかについての関係性は今後調査対象者の範囲を広げ、継続して研究していく必要がある。

今後はキーパーソンとの関連性からメンターに焦点を当て、人と人とのつながり（ネットワーク）の観点からキャリア形成を捉え、さらに研究を深めていく必要がある。

表2 調査地域的主要経済指標

	面積		人口		農業産出額		製造品出荷額等		小売業年間商品販売額	
	km ²	構成比(%)	万人	構成比(%)	億円	構成比(%)	億円	構成比(%)	億円	構成比(%)
広野町	58	(0.4)	0.6	(0.2)	3	(0.1)	244	(0.4)	29	(0.06)
富岡町	68	(0.5)	1.6	(0.8)	21	(0.8)	75	(0.1)	243	(0.5)
いわき市	1,231	(8.9)	34.9	(17.1)	108	(4.3)	10,945	(18.2)	8,492	(18.2)
福島県	13,783	(100.0) 3.7	204.0	(100.0) 1.6	2,505	(100) 3.0	60,132	(100) 1.8	46,700	(100) 0.9
東北	66,951	17.9	937.0	7.3	13,599	16.0	184,807	5.5	269,430	4.9
全国	372,910	100.0	12,751.0	100.0	84,736	100.0	3,378,640	100.0	5,482,370	100.0

- (注1) 『データで見る県勢 2011 年度版』, 「いわき市統計書 (各年度版)」, 「農林省ホームページ統計情勢『わがまち・わがムラ』」(<http://www.machimura.maff.go.jp/machi/index.html>)」を基に筆者作成。東日本大震災前の最新データで各項目ごとに年度を統一しているが、集計日が異なるものもあるので、参考情報とする。
- (注2) いわき市、広野町、富岡町は、福島県を 100% とした場合の構成比。() で示す。

表3 調査地域的主要経済指標 2

	人口 (2010 年 3 月 31 日) (人) (住民基本台帳人口)			年齢別人口構成 (%) (2013 年 3 月 31 日) (住民基本台帳人口)			産業別就業者割合 (2005 年)			
	男	女	計	0~14 歳	15~64 歳	65 歳以上	総数 (人)	第一次産業 (%)	第二次産業 (%)	第三次産業 (%)
広野町	2,739	2,756	5,495	14.6	62.7	22.7	2,707	5.5	33.9	60.6
富岡町	8,007	7,861	15,868	14.4	64.3	21.4	7,807	6.3	32.9	60.7
いわき市	169,945	179,236	349,181	13.8	61.8	24.4	160,757	4.2	32.0	63.2
	人口 (2009 年 10 月 1 日) (人: 千人以下割愛) (人口推計年報)			推計人口 (2009 年 10 月 1 日) (%) (人口推計年報)			産業別就業者割合 (2005 年) (総数: 千人以下割愛)			
福島県	989,000	1,051,000	2,040,000	13.8	61.5	24.7	1,010,000	9.2	30.7	59.4
東北	4,487,000	4,881,000	9,368,000	12.9	62.0	25.2	4,653,000	10.4	26.8	62.7
全国	62,130,000	65,380,000	127,510,000	13.3	63.9	22.7	61,505,000	4.9	26.6	68.3

- (注1) 「人口」, 「年齢別人口構成」のうち広野町、富岡町、いわき市は「住民基本台帳人口」(2010 年 3 月 31 日)、福島県、東北、全国は「人口推計年報」(2009 年 10 月 1 日)、及び「産業別就業者割合」は「地域別統計」を基に筆者作成。東日本大震災前の最新データで各項目ごとに年度を統一しているが、統計元、集計日が異なるものもあること、割合の小数点以下の処理の関係、あるいは、「産業別就業割合」では分類不能を含むため必ずしも合計が 100% にならないので、参考情報とする。

参 考 文 献

- 1) 薄葉祐子：修士論文『地方における女性のキャリア形成の現状と可能性—福島県浜通り南部地域を事例として—』，東北大学，2010
- 2) 橋本由紀・宮川修子：なぜ大都市圏の女性労働力率は低いのか—現状と課題の再検討—，RIETI Discussion Paper Series 08-J-043, 2008
- 3) 武石恵美子編著：働くということ第7巻女性の働き方，ミネルヴァ書房，2009
- 4) 武石恵美子：雇用システムと女性のキャリア，顎草書房，2010
- 5) 佐藤博樹編著：働くことと学ぶこと 能力開発と人材活用，ミネルヴァ書房，2010
- 6) (財) 矢野恒太記念会編集発行『データでみる県勢 2011年版』2010年
- 7) いわき市統計書 <http://www.city.iwaki.fukushima.jp/kankobutsu/008780.html>, (2013.12.3)
- 8) 農林省ホームページ統計情報『わがマチ・わがムラ』 <http://www.machimura.maff.go.jp/machi/index.html>, (2013.12.3)
- 9) 住民基本台帳 http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/jichi_gyousei/c-gyousei/daityo/, (2013.12.4)
- 10) 人口推計年報 <http://www.stat.go.jp/data/jinsui/2.htm>, (2013.12.4)
- 11) 地域別統計 <http://www.e-stat.go.jp/SG1/chiiki/CommunityProfileTopDispatchAction.do?code=2>, (2013.12.4)

東北工業大学における学校との連携による教職課程の事例

—— 県立高等学校での「一日実習」の取り組み ——

佐藤 三之*・中島 夏子**

A Case Study of Teacher Education Program based on High School and University Collaboration : A One-day Teaching Practice at a Public High School for Students at Tohoku Institute of Technology

Kazuyuki SATO and Natsuko NAKAJIMA

Abstract

The purpose of this paper is to discuss how to provide teaching experience at a high school to students enrolled in teacher education program. Teacher Training Center at Tohoku Institute of Technology has been providing the students for ten years a one-day program at a public high school, which includes discussion with high school teachers, class visits and teaching practice. The paper introduces the program in detail, and then points out reasons why it has been carried out for ten years successfully from the following four perspectives : close relationship between a high school and a university ; time arrangement ; sequence of the teacher education curriculum ; and benefits for a high school.

1. は じ め に

本年度（平成 25 年度）の後期から、4 年生を対象とした必修の教職科目「教職実践演習」が実施されている。この科目は、平成 18 年 7 月 11 日の中央教育審議会（以後、中教審）答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」の中で提言されたもので、教職課程を履修する者の教科に関する科目及び教職に関する科目の履修状況を踏まえ、教員として必要な知識技能を修得したことを確認するものである（教育職員免許法試行規則第 6 条表備考第 11 号）。つまり、4 年間の教職課程の総仕上げの位置づけにある重要な科目となっている。この授業を実施するにあたっては、大学における教科に関する科目や教職に関する科目での知見だけでなく、学校現場の視点を取り入れることが必要であり、学校現場の見学・調査等を実施したりすることがカリキュラムの例として挙げられている（文部科学省 2008）。同答申はまた、教員に「これまで以

上に広く豊かな教養が求められている」ことから、教職課程を開発する際には体験活動やボランティア活動、インターンシップ等を充実する事などを提言している。そしてこのような活動については、教職実践演習に限らず教職課程の全体を通じて、学生の学習状況や成長に応じて効果的に提供されるべきであるとも述べられている。このように、学校現場との連携による実習は教職課程全体を構築する上で必要不可欠なものとなっている。そのため、学校現場との連携に基づいた実習の在り方は、本学のみならず全国の教職課程担当組織の喫緊の課題となっている。

このような課題に対応するため、東北工業大学（以後、本学）は本年度から 4 年次の学生を対象に実施する「教職実践演習」において、同一法人の仙台城南高等学校との連携の下、高等学校の見学やそこでの実習を行っている。その他、10 年前から毎年「実習指導（教育実習事前・事後指導）」の一環として、宮城県松島高等学校（以後、松島高校）における「一日実習」を行っている。具体的には、松島高校との連携の下、「一日実習」という名称で 3 年次後期の学生を高等学校に送り出し、授業の見学や高校生を相手にした授業を行

2013 年 10 月 21 日受理

* 共通教育センター客員教授

** 共通教育センター

わせている。このうち、前者の「教職実践演習」については、本稿を執筆している平成25年10月段階で全体の半分まで進められているが、依然として試行錯誤が続いている状況にある。そこで、この「教職実践演習」の効果的な実施に資する意味も込め、後者の「一日実習」の実施方法とそれが10年間続けられている理由を明らかにしていきたい。そして、それを通して、学校現場との連携に基づく今後の教職課程の在り方について考えていきたい。

2. 松島高校「一日実習」の事例の概要

松島高校での「一日実習」は、本稿の執筆者でもある共通教育センター客員教授の佐藤三之（以後、佐藤）が東北工業大学に着任した平成15年から毎年11月に、大学3年次の教職科目「実習指導（教育実習事前・事後指導）」の事前指導の一環として実施されてきた。「実習指導（教育実習事前・事後指導）」はその名の通り、教育実習に行く学生を対象とした事前と事後の指導を行う科目であり、本学では3年次から4年次にかけて実施している。前期に実施される第1回目～第8回目では各学生の教育実習で担当する科目の教材に基づいて各学生が指導案の作成を行い、その指導案を基に模擬授業を行っている。そして後期からは、第9回に一日実習の概要と授業観察の仕方の説明をした後に、第10回～第12回目まで松島高校での一日実習の際に学生が担当する授業を計画・準備し、リハーサルを行っている。この科目を担当するのは、佐藤の他、教員経験者であり「教科教育法」を担当する非常勤講師2名、そして本稿の共同執筆者である中島夏子（以

後、中島）である。受講生数は毎年変動があるが、平成23年度は40名程度であった。

松島高校での実習の目的は「高等学校での一日を見学し、また、生徒との交流を体験することによって、次年度の教育実習への予備知識と心構えをつくり、教職に対する意識を高め、自らの志望を明確なものにすること」である（「一日実習」実施要領）。実施日時は毎年、大学の推薦入試で半日休講になっている日であり、平成23年度には11月15日（火）の8時から16時までである。この日は松島高校にとっては学校公開期間の4日目にあたる。具体的な一日のスケジュールは表1の通りである。このスケジュールは大きく分けて、① 現職教員の講話、② 授業観察、③ 学生による授業の3つによって構成されている。3章以降において、それぞれの活動がどのようなものであり、それに対する学生の反応がどのようなものであったのかを平成23年度の事例を通して紹介する。

3. 現職教員の講話

8時50分から10時まで現職教員の講話が行われる。松島高校の校長からは学校が置かれている社会情勢や教育行政の中での学校の役割について、教頭からは教員の仕事とはどのようなものかについて自らの経験を踏まえた講話があった。実際に日々教員として働く方からの話を、その勤務校において聞くという経験は学生にとって良い経験となっているようだ。その感想の一部を紹介する。

表1 松島高等学校でのスケジュール（平成23年度）

8:05	松島高等学校の会議室に集合
8:10	開講の挨拶、日程等の説明、出欠確認
8:35	朝読書、朝のショート・ホームルームを参加者全員が見学（1年各担当教室）
8:50-10:00	校長・教頭・教務主任の先生による講話（会議室）
10:00-11:50	2～3校時は1・2・3年生の授業を見学する（各教室）
11:50-12:50	昼食・休憩（会議室・食堂）
12:50-13:20	クラス担当毎の打ち合わせ（会議室）
13:30-14:20	5校時（1年各教室）各担当に分かれて大学進学の実態、大学生活の紹介と学生の専門領域に関する学習内容の魅力等を紹介する
14:30-16:00	閉校式（会議室）感想発表、アンケート記入、諸連絡、終了

- ・先生方がこれまでに経験してきたことや教師を続けてきての正直な気持ちを話していただき、この職業の魅力がとても伝わってきた。特に、教頭先生がおっしゃっていた「生徒に育てられてきた」という言葉が深く印象に残っている。
- ・お話の中で「教育は時代の流れで変わる」とおっしゃっていましたが、このことを聞いて、生徒だけではなく社会など様々な角度から教育に目を向けていかなければならないと思いました。また、教員として熱意を持って生徒に向き合い「志」を持って欲しいとお話をいただきましたが、私もこういったことを心がけたいと感じました。

4. 授 業 観 察

授業観察は8時35分からの朝読書と朝のショートホームルームと、10時からの教科の授業の2回行われる。授業見学では学生の関心に応じて、1年生から3年生まで自由に見学することができる。このような事が可能なのは、松島高等学校の全面的な協力が得られているからであるが、この日が同校の学校公開の期間でもあるためである。学生には行動描写法による授業観察記録をとるように指示しており、表2にあるような観点から授業を見学し、記録簿に記入している。

表2 授業観察記録の観点

教 師 の 活 動	① 教師は、どのような「教材解釈」をもって授業に臨んでいるか。
	② 授業で、どのような「知識」・「技能」を「どこまで」生徒に習得させようとしているのか。そのねらいを、教師の提示する「学習課題」とおして確かめる。
	③ 学習への動機づけが、前時の復習や導入の活動とおしてどのようになされているのかを知る。
	④ 学習課題を提示するタイミングやその手だてがどう工夫されているか。
	⑤ 生徒の指導活動を促す「発問」や「問い返し」が、どのような手法（タイミング、頻度、板書、まなざし等）で行われているか。
	⑥ 生徒の学習時間を理解し、行動を促す教師の指示がどのような手法で行われているか。
	⑦ 教師の教材に関する説明や学習内容をまとめる際の説明がどのような手法で行われているか。
	⑧ 生徒の学習活動の評価が、どのようになされているか。

生 徒 の 活 動	① 学習への動機づけが、教師の働きかけによってどう引き起こされているか。
	② 学習課題を習得する場面での生徒の活動状況を、生徒の発言や行動をとおして詳しく観察する。
	③ 生徒の思考活動や感情の内面的な動き・変化を生徒の発言や行動をとおして観察する。
	④ 学級の生徒の全体としての働き（挙手や発言、つぶやきやそぶり）、生徒相互の活動の仕方やその内容を観察する。
	⑤ 特定の生徒一人か二人を抽出して、上記の視点から詳細に記録する。

このような授業観察によって、学生たちはどのような「発見」をしたのか、彼らの実習日誌からは3つの傾向を読み取ることができる。一つ目は高校生の実態と自分の予想との違い、二つ目は教員の授業上の工夫、三つ目は学年や教員による生徒の反応の違い、の3つについての「発見」である。以下、それぞれの学生の記録の抜粋を通して紹介していく。

① 高校生の実態と自分の予想との違い

「(体育の時間に) 真面目に授業を受けているのは7割程度で、それ以外は座りこんで話をしたり、別の事をして遊んでいた。担当の先生は常に指導を行っており、とても苦労していた。私の記憶にある高校のイメージと松島高校の実際とでは差異がかなり大きく、視野が狭いことに気づかされた」

② 教員の授業上の工夫

「担当の先生は声が大きく、後ろにいてもはっきりと内容を聞き取ることができた。また、その内容も一つの漢文に対して訳と意味だけではなく、誰が書いたかなどのエピソードも入れて、生徒の興味や関心を引くような工夫がされていた。これにより、下を向いていた生徒も顔を上げていた。加えて、集中力の切れた生徒に対して発問したり、次週の授業で答えさせることを提示した上で課題を出すなど、私たちが普段授業で学んでいることを平然と行っていた。現場で働いている教師は、私たち実習生とはかけ離れたプロであると痛感させられた。」

「少し落ち着きのない生徒が何人かいました。そういった生徒へは先生はどのように指導をするのかみていると問題の解説をしている時に生徒に質問をするなど積極的にコミュニケーションをとっていました。もし生徒が「分かりません」という発言をし

でも、どこが分からないのか聞いたり、少しずつヒントを与えたりして、答えが出るまで辛抱よく何度も聞き返していました。また、問題を出した時、生徒一人一人の机を見回りながら質問を聞いたり、悩んでいるようなら少しヒントを出すなど、授業を行う上で心がけなければいけないことが分かりました。」

③ 学年や教員による生徒の反応の違い

「同じクラスなのに、授業の先生が変わっただけで、うるさかったクラスがピシッと静かだまじめなクラスに変わった時は、やっぱり指導の仕方が変わるということがはっきり分かりました。授業中に自由に行動している生徒たちは、どんな子だろうと思っていましたが、休み時間中に会ってみると、「こんにちは！ 工大ってどんなところですか？」など挨拶をしっかりとし、しっかりとした敬語を使い元気に話しかけてくれました。本当は、ちゃんとすればできる子たちなんだと思いました。そういう子たちがどうして授業になるとあんなに話を聞かない子に変わってしまうんだろうと考えたところ、やはり教える側に問題があると思います。」

授業見学に関する学生の反応で共通しているのが、「自分が教員だったら」という視点を持っていることである。つまり、自分が教員としてどのような対応をすれば良いのかを、「良い点は取り入れよう」、「悪い点は解決策を考えよう」という観点から考える姿勢を持っている。このように学生が考えるのは、この授業見学の後に自分たちが実際に「教師」として教える立場に立つということの他、半年後には2週間の教育実習が控えているという緊張感があるからであろう。

5. 学生による授業

「一日実習」の中心となるのが、5校時目のロングホームルームの時間（50分）を使って学生が高校生に対して大学紹介をする特別活動の授業を行うことである。そのために複数回の「実習指導」の時間を使い、指導計画を立てて、高校生にとって有意義な50分になるよう指導内容を考え、指導方法の工夫をするなど班員みんなが協力をして準備をする。班員は、年度によって異なるが、5～8名である。その50分をどのように使うかは学生に任されているが、佐藤によるテ-

マ例と実施上の注意事項は以下の通りである。

- ① 班員全員の自己紹介……名前を板書する、出身県の特徴・方言などの紹介、地図を黒板に貼って示すなどの工夫をする。
- ② 東北工業大学の紹介……所在地、二つのキャンパス、学部・学科の種類等を大学のパンフレットを活用して紹介する。
- ③ 大学生活の紹介……授業（高等学校との違い）、サークル活動、アルバイト、大学進学志望の理由。
- ④ 所属学科で学んでいることの中から、高校生が興味を持ちそうな内容を授業の形式で紹介する……学ぶ楽しさを実感させるよう工夫すること。そのためには、具体物を使ったり、ちょっとした作業を取り入れると効果的である。明るい表情で、自信を持って大きな声ではっきりとしゃべることが大事である。



写真1 学生による授業の様子

この授業を通しての学生の反応は主に二つである。教えることの楽しさを知ったという意見と教えることの難しさを知ったという意見である。学生全体でみた時には、反省の多い授業であったようで後者の意見の方が多く見られた。以下、それぞれの代表的な感想を見ていく。

① 教えることの楽しさを知った

「事前にグループで何をするのか話し合い、準備をしてきましたが、実際に生徒の前に立つと緊張し

てしまい、想像通りにはいきませんでした。しかし、私が困っていると生徒の方から質問してくれるなど助けられる場面が何度もあり、改めて生徒との関わりはとても大切だと思いました。また、パンフレットを持っていき、それを生徒にみてもらいながら学科の説明を行いました。熱心に聞いてくれとてもうれしかったです。」

「私たちのグループは、生徒に多角的な視点と柔軟な発想力、そしてどんな場合にも対応できる力を身に付けてほしいと思い、色々な面接問題やSPIに挑戦してもらいました。生徒たちは、一人一人違った色々な考えをもっているのに驚きながらもすごいなと感じました。また、その問題に挑戦する態度がとても前向きで嬉しかったです。」

② 教えることの難しさを知った

「授業では、生徒に何かを伝えることのむずかしさを実感させられた。グループを作って大学の説明をするときは、進学希望者が一人しかいなかったため、興味を持たせることに苦労した。また、「質問はありますか」と聞いても反応が得られず、想像していた以上に生徒の疑問を引き出すことは難しいことであった。しかし、具体的な質問や、全く関係の無い話を混ぜて説明することによって、生徒の興味をひくことができるということを、授業中に気づけた。小さなことではあるが、授業を行う上での技術の一端を掴むことができたように思う。」

「中には私たちの説明には興味がなく、他のことをして遊びだす生徒もいました。そんな時、私はなかなか注意することができませんでした。一体どうやって注意したらよいかかわからず、「ちょっとだから話聞いてね」と声をかけることしかできませんでした。人に教えるというのは、難しいと改めて思いました。教える側に問題があると、他の先生たちの授業を見た時に思いましたが、教える側に実際なった時、私は生徒たちをまとめることができませんでした。その時、事前の準備が足りなかったことに気づかされました。様々なことを想像して、そのことに対しての対策をもっとしておかなければと思いました。」

「全体での自己紹介と学科紹介は順調に終わり、班に分かれた。事前に思い描いていた通りにはいかず、生徒に書くように求めたアンケートの半分が空欄で、質問もでなかったために、大幅に時間が余っ

てしまった。普段通りにも話せなくなり、思いついたことを生徒と話し、気付いたら時間が終わっていた。」

どの学生も一様に、実際に授業をすることの難しさ、特に生徒の反応を踏まえての授業づくりの難しさを身をもって知ったと述べている。教職科目の「事前指導」ではすでに前期から模擬授業を重ねており、これが彼らにとって初めての授業実践ではないが、模擬授業では生徒役を務めるのも学生であるため、今回のような生徒の反応は見られない。当日の授業観察を通して、教員の指導の仕方によって生徒の反応が違っていると気づき、優れた教員がどのような点を工夫しているのかを学んでも、実際にそれを自分がやろうとしてもできないことを実感させられたようだ。このような「失敗」は彼らにとって非常によい経験となったようで、「今回、とても不甲斐ないものになってしまったが、教育実習に行く前の貴重な良い経験、良い失敗になったし、改めて、教育の奥深さを感じた。」といった意見に代表されるように、この失敗を半年後に控える教育実習に活かして行こうとの意気込みが多く語られていた。

6. 「一日実習」を継続できている理由

本章では「一日実習」という高等学校との連携に基づく実習が10年間続けられている理由を、① 高等学校との関係づくり、② 時間の確保、③ 教職課程における位置づけと意義、④ 高等学校にとっての意義、の4つの観点から明らかにする。なぜならば、学校現場での実習を実施する際には、① そもそも受け入れ先の学校現場を確保することが困難であること、② 大学においても高等学校においても時間の確保が難しいので長時間の実習が実施が困難であること、③ ただの体験活動に終わってしまったり、教育実習等との差異化が図れないために同じような体験の繰り返しとなったりしてしまう可能性があること、④ 受け入れる高等学校にとって「負担」としかならない可能性があること等の課題が考えられるためである。これらの課題を解決しない限り、継続的に実施することはおろか、実施することさえも難しいのではないだろうか。したがって、これらの課題を、10年続く本事例はどのように解決したのかを実施した当事者（佐藤）及び観察者（中島）の立場から考察を行いたい。

まず1つ目の高等学校との関係づくりについて、高

大連携が今よりも一般的でなかった10年前から「一日実習」を実施できたのは、「一日実習」の担当者である佐藤の力によるものが大きい。実習先である松島高校は佐藤がかつて校長として勤務した経験のある高等学校であり、同高等学校の事情を熟知しているだけでなく、現職の校長や教頭とも意思疎通が取れる関係にあるからである。言うまでもなく高等学校での実習を行うためには高等学校との密な連携を前提としているが、そのような関係を築くことは容易ではない。その点からすると、既に高等学校との繋がりを持つ者が大学にいることは、このような活動を行う際には大きな強みとなっている。

2つ目の実習のための時間の確保は、大学にとっても高等学校にとっても大きな課題である。特に教員養成系ではない大学において、全学科にまたがる教職の受講生が他の授業を休むことなく集まれるのは、平日であれば18時以降、あとは休日と祝日に限られている。授業を見学したりするとなると、学校が開いている平日の16時までに行う必要があるが、その時間はそのまま学生の授業時間帯と重なる。さらに時期の問題もある。大学においても高等学校においても、学期の初めや終わりは通常の授業が行われていなかったり、教員が多忙であったりするため不適当である。その他にも行事があったり等して、高等学校と大学の双方にとって都合の良い日時を確保することは、このような実習を実施する上での大きな障壁である。「一日実習」は上記の時期を避け、幸運にも大学の入試で授業が半日休みになっている11月半ばの一日に行うことで、学生の他の授業への影響を最小限にとどめている。それでも大学の授業やゼミなどのスケジュールに

重なってしまう学生はいるため、それぞれの学科に対して理解と配慮を求める依頼文を送る等して、学生を実習に参加させている。それでも参加できないという学生が毎年いるが、そのような学生に対しては各自が4年次に予定している教育実習の実習校で見学させてもらうことになっている。もう一つの幸運は、その日が高等学校側にとって学校公開週間の一日となっているため、大学生による授業見学に対する高等学校の教員と生徒の理解を得やすくなっていることである。10年続いている今では、「一日実習」は高等学校の年間行事に組み込まれているため、この実習に合わせて高等学校側が学校公開週間に設定するなどの配慮が行われている。

3つ目の教職課程における位置づけと意義について結論から先に述べると、この「一日実習」は教職のカリキュラムの中で、学生が最も活動に対するモチベーションを持ちやすく、教育効果の高い時期に実施されており、その内容についてもその時期の学生に適したものとなっている。

表3は1年次からの教職課程の概要である。それぞれの年次で開講される主たる科目と、教職に関連する活動を載せた。1,2年次は教職に必要な基礎的な理論を学び、3年次からはそれぞれの教科の指導法を学んだ上で4年次に教育実習をするという配列になっている。このような課程の中で、教育実習の半年前に行われる「一日実習」は、その目的にもある通り、教育実習で経験するであろう事を一日だけではあるが経験することによって、教育実習への備えをすることを可能にしている。学生らは「一日実習」の授業見学を通して、高等学校や高校生に対する理解が深まり、教員の

表3 教職課程の中での「一日実習」の位置づけ

学期	科目	関連する活動
1年次	教職概論	
2年次	教職専門科目群	
3年前期	教科専門科目群 教科指導法 教育実習事前指導	
3年後期	教科専門科目群 教科指導法 教育実習事前指導（「一日実習」）	就職活動開始 教育実習参加判定会議
4年前期	教育実習 教育実習事後指導	公立高等学校教員採用試験
4年後期	教職実践演習	

授業上の工夫を学びとり、実際に授業をすることを通して教えることの難しさと楽しさを学んでいる。そして、それを教育実習に活かしていこうとする姿勢が見られている。このような教育実習への心構えだけではなく、この「一日実習」は例年、学生の進路決定にも影響を与えている。この実習を通して教員志望を強く持つようになり4年次前期にある教員採用試験に向けて一層励む学生もいれば、教員にはなりたくないと思うようになり教育実習と教職履修を取りやめる学生もでている。これも3年次後期という、学生にとっては進路を決める重要な時期に実施されているからであろう。このように、学生の動機が高い時期に、教育効果の高い内容を提供している事が「一日実習」が10年続いている理由の一つである。

4つ目の高等学校にとっての「一日実習」の効果については、高等学校側に正式なアンケートを行ったわけではないが、校長や教頭、教務主任とのインフォーマルな意見交換の中で出された意見を紹介する。高等学校側は近年、その教育活動を公開し、外部からの意見を反映させた「ひらかれた学校づくり」をすることが努力義務として求められている。「一日実習」を行う時期に行われる授業公開もその一環であり、そのような教育改善に向けた取り組みを高等学校は行っていないかなければならないという状況に置かれている。そのような中、教員を志望する大学生を受け入れ、彼らに授業を公開し、意見を求めるという取組は高等学校にとって高い評価を受けうる活動となっている。そのような外部評価だけではなく、学生を受け入れることは、教員が自らの授業を振り返る機会となっていたり、学生からの教員という仕事の面白さや難しさへの感想は教員たちの励みにもなっていたりするという。本稿で紹介した学生の感想はそのコピーが高等学校に送られ、職員室で閲覧できるようになっているとの事である。

以上の4つの観点についてうまく機能している事が「一日実習」を継続できている主たる理由であると考えられる。もちろん、これらが揃っていなければ実施できないというわけではないだろうが、比較的容易に、継続的に、そして効果ある学校現場での実習を行うためには、これら4つの観点が揃っている事が望ましいのではないかというのが、現段階での筆者らの見解である。

7. お わ り に

前述の通り、本学では本年度から4年次後期に開講される「教職実践演習」において、同一法人の仙台城南高等学校との連携の下で、学校現場での実習を行っている。仙台城南高等学校での実習は、高等学校での実習という点で、松島高等学校と共通する実践であるが、本稿で検討した松島高等学校での「一日実習」の4つの観点に照らし合わせた時、どのような課題があるかを「おわりに」では考えてみたい。

まず1つ目の高等学校との連携に関しては、法人として高大連携を強化するという観点から、高等学校教員としての実務経験を持つ、法人の参与の職に就いている者が高等学校側の窓口を務める等、十分な協力が高校から得られている。その一方で、「一日実習」の担当者の佐藤のように大学と高等学校双方の事情を熟知している者が大学側にいないため、頻繁に互いの事情を情報交換しながらの模索が続いている。2つ目の時間の確保については、大学と高等学校が隣接している事やゼミが中心となる4年次の後期は学生の時間の融通が付きやすい事等もあり、日時の設定が容易になっている。それでも複数回実施したり、学生の活動可能日に合わせて実施したりするなどの配慮を、高等学校の協力の下、行っている。時期については、10月が高等学校と大学双方にとって都合の良い時期だということで、その時期に活動を集中させた。4年次の学生にとっては学期の後になればなるほど卒業研究との両立が困難になるため、学期の前半に集中して活動を行うこととした。現在、大きな課題となっているのが3つ目の教職課程全体の中での位置づけについてである。4年次の後期というのは、特に教職以外の進路が決定している学生にとっては、教育実習という目標もないため、動機を持ちにくい。また、教育実習という2週間（学生によっては3週間）の密度の濃い学校現場での経験を既にしてしている学生に対して、わずか数時間の実習を複数回実施することだけでは教育上の意義を持ちにくい。このような課題を乗り越えるためには、教職実践演習の趣旨にもある通り、教育実習をはじめとする教職課程での経験を振り返り、自らの課題を克服するという「学校現場を知る」以上の目的をもって臨ませる必要があり、そのための様々な取り組みを行っているが、現段階では松島高校での「一日実習」ほどの意義を持っているとはいえない。また4つ目の高等学校側の意義に関しても課題があり、同一法人の高大連携の一環として位置づけられている以上、複

数日に渡る活動の場を提供する高校に対して大学から何を提供することができるのか、今後、考えられなければならないだろう。これらの観点を含め、「教職実践演習」については、改めて別稿にて考察を行っていききたい。

参 考 文 献

- 中央教育審議会（2006）中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度のあり方について」
文部科学省（2008）「教職実践演習の実施にあたっての留意事項」

東北工業大学における履修カルテとその活用事例

—— 教職指導と教職実践演習の取り組みの中間報告 ——

中島 夏子*・小川 和久**・片山 文雄***
佐藤 三之****・鈴木 伸一*****

A Case Study of Teacher Education Program at Tohoku Institute of Technology using RISHU-KARUTE : A Midterm Report of Guidance and KYOSHOKU-JISSEN-ENSHU

Natsuko NAKAJIMA, Kazuhisa OGAWA, Fumio KATAYAMA, Kazuyuki SATO and Shinichi SUZUKI

Abstract

The purpose of this paper is to report a case of teacher education program at Tohoku Institute of Technology, which has used a newly introduced teaching/learning portfolio, named RISHU-KARUTE. The paper first shows the format, followed by the practice using it. Second, the paper analyzes the outcomes and challenges. The positive outcomes are seen on both teachers and students : teachers have paid more attention to the purpose and structure of the teacher education curriculum, and more successfully communicated with and supported students based on the information ; students have more reflected upon and looked into their learning experience. However, these outcomes would not appear only by filling out the portfolio, therefore careful guidance and intensive communication are needed besides it.

1. はじめに

平成 18 年 7 月 11 日の中央教育審議会（以後、中教審）答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」は「教職大学院」制度の創設や教員免許制の導入、「教職実践演習」の新設・必修化を柱とした教職課程の質的向上に関して提言を行った。教職実践演習に関しては、平成 20 年 11 月に教育職員免許法施行規則が改正された結果、普通免許状に係る所要資格を得るために修得が必要な教職に関する科目として、4 年次学生を対象とした必修科目となった。そして、「履修カルテ」を入学直後から作成し、この演習を実施するにあたって活用すべき事も指示されたため、全国の教職

課程を担当する部署はこれらの実施方法をめぐって試行錯誤を続けている。

筆者らが勤務する東北工業大学（以後、本学）は、平成 25 年度後期に実施される教職実践演習及びこの科目を実施する上で必要な履修カルテの作成と活用を平成 22 年度から行ってきた。このうち、教職実践演習については本稿を執筆している平成 25 年 10 月現在も実施の途中にあるため、詳細な報告は来年度以降行う予定である。一方で、履修カルテに関しては平成 22 年度入学生から開始され、現在までに数年間の実績があるため、本稿では履修カルテを用いた教職指導及び現段階での教職実践演習での活用事例を報告していきたい。

2013 年 10 月 21 日受理

* 共通教育センター講師

** 共通教育センター教授

*** 共通教育センター准教授

**** 共通教育センター客員教授

***** 共通教育センター非常勤講師

2. 履修カルテとは何か

履修カルテの導入は上述の中教審の答申において、入学直後からの学生の履修履歴を把握し、それを踏ま

表 1 履修カルテの観点 (例)

教職の意義、教育の理念・教育史・思想、学校教育の社会的・制度的・経営的理解等、学校教育に関する理解が身についているか。
子どもに関する心理・発達論的な理解や子どもの状況に応じた対応方法等、子どもに関する理解が身についているか。
教科・教育課程に関する基礎知識・技能が身についているか。
自らの役割を見つけ、与えられた役割をきちんとこなし、他者と協力して課題に取り組むことができるか。
子どもや保護者に対応するコミュニケーション能力が身についているか。
教材開発、授業の構想・展開等の実践的な能力が身についているか。

えて指導に当たる事が必要である事が提言されたことに端を発する。同答申では、「履修カルテ」という表現は使われておらず、「学生の履修履歴」との表現がなされていたが、その後の平成 20 年 10 月に、課程認定委員会による「教職実践演習の実施にあたっての留意事項」の報告の中で、教職実践演習を実施するにあたっての準備事項として、「入学の段階からそれぞれ学生の学習内容、理解度等を把握」するためのものとして「例えば、履修する学生一人一人の「履修カルテ」を作成」することが挙げられた（文部科学省 2008a）。この説明の際に使われた「履修カルテ」という言葉が以後、使われるようになった。課程認定委員会はまた「履修カルテの活用方法 (例)」も提示した（文部科学省 2008b）。それによると、履修カルテは教職関連科目の履修状況と必要な資質能力に関する評価によって構成される。前者は教職関連科目の履修情報の他、教職に関する学外学習やボランティア活動の状況について記入する。そして後者は必要な資質についての自己評価と教職を目指す上で課題と考えていることを自由記述することが例示されている。

これを記入するのは、それぞれ大学又は学生と担当教員及び学生となっているが、そのどちらかが記入するかによって履修カルテの性質は異なってくる。つまり、大学あるいは教員が記入した場合には大学側が学生の学修状況を把握する事を目的としたものになるが、学生が記入した場合には自己認識を積み重ねることを通じた学生のモチベーションの向上を目的としたものになる。そのどちらを選択するかは大学の判断で行うこととなっている。また、「担当教員」が誰であるのかについても、科目の担当教員ごとに評価を行う場合と教職担当教員が総合的に評価を行うことが考えられるが、どのような方法をとるかは大学の判断に任されている。

担当教員及び学生が評価をすることとなっている必要な資質能力の観点は大学が決めることとなっているが、表 1 にあるような 6 つの観点から評価することと例示がある。この 6 つの項目は中教審の平成 18 年の答申で示された今後の教員に必要な資質と対応したものである。このような観点を参考に各大学はそれぞれ達成すべき資質能力を設定し、それを履修カルテに記載し、学生を評価することになっている。

履修カルテを作成するのは教員養成カリキュラム委員会といった教職課程の運営や教職指導を全学的に行う組織である。この組織は履修カルテの管理も行うこととなっている。この際、「全学的」であるということが重要であり、履修カルテに限らず、教職実践演習に関しても教職に関する科目の担当教員だけではなく、教科に関する科目の担当教員が協力して行うことが留意事項として挙げられている。このようにして作成された履修カルテは教職指導と教職実践演習への活用が期待されており、教職指導に関しては必要に応じた苦手分野の補完的な指導の実施やクラス毎の指導計画の策定、教職実践演習に関しては教職実践演習の実施に当たり、担当教員が、履修カルテを参照して学生の履修状況を把握したり、教職実践演習の進め方や個別の補完的な指導等に活用したりすることが例示されている。

3. 東北工業大学における「履修カルテ」

本学では平成 22 年度の入学生から年次進行で履修カルテによる指導を行っている。履修カルテを作成するにあたっては、上述の文部科学省による作成例を参考にしながら、本学ならではの特色を加えていった。まず名称について、本学では「履修カルテ」ではなく、「教職のための学習ポートフォリオ」（以後、「学習ポー

表2 東北工業大学の学習ポートフォリオ（2ページ目一部抜粋）

必要な資質能力の指標			自己評価（1：あてはまらない 2：どちらかといえばあてはまらない 3：どちらともいえない 4：どちらかといえばあてはまる 5：あてはまる）				備考欄 （関係する科目等）
項目		指標	1年次	2年次	3年次	4年次	
一 学校教育 についての 理解	教職の意義	教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務を理解していますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	教職概論
	教育の理念・教育史・思想の理解	教育の理念、教育に対する歴史・思想についての基礎理論・知識およびその現代的課題を理解していますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	教育原理
	学校教育の社会的・制度的・経営的理解	学校教育の社会的・制度的・経営的理解に必要な基礎理論・知識およびその現代的課題を理解していますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	教育制度論

トフォリオ）」とした。「履修カルテ」とすると教員が学生を診断するものとの印象が強いので、「学習ポートフォリオ」とすることで学生の学習を支援するものとしての性質を強くした。

「学習ポートフォリオ」はA3サイズで3ページの構成になっており、基本的には文部科学省が提示したフォーマットに沿って作成されている（参考資料として文末に掲載）。その他、これとは別に教職担当と教科担当の教員が総合的に評価を行う「履修カルテ」も作成したが、この説明は別稿で行う。「学習ポートフォリオ」の1ページ目には教職に関する科目の一覧とその科目の目標が記載されており、修得年度順に配列されている。また、それぞれの年度で取り組んだ社会活動やボランティア活動等の状況を記入する欄もある。2ページ目には必要な資質について、学生が自己評価をする項目が並んでおり、「学校教育についての理解」、「子どもについての理解」、「他者との連携・協力」、「コミュニケーション」、「教科・教育課程に関する基礎知識・技能」、「教育実践」の6領域について、学生が到達すべき項目をそれぞれ3項目設定し、それらについてどの程度達成できたかを5段階評価するようになっている。6つの領域の中にそれぞれ3つの項目を設定し、項目ごとに学生が自己評価するための指標を設定した。例えば、学校教育についての理解を問う領域では、表2のような項目と指標を設定した。一つ目の項目「教職の意義」については、「教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務を理解していま

すか」を5段階で問い、備考欄にはこの指標に到達するための主たる科目として教職概論を挙げている。

それぞれの指標を設定するにあたっては、まず教職課程部の教員が文部科学省の例を参考に6つの領域と各3項目を設定した。そして、それぞれの項目を達成するにあたって、教職課程のどの科目が貢献しうののかを決め、その科目の担当者に対して指標を作成するように依頼した。科目の担当者は文部科学省の指標を基に、それぞれが学生に必要なと考える指標を加えて作成した。この一連の作業は「学習ポートフォリオ」の自己評価項目を作成するものであると同時に、科目を担当する教員に対してこれらの指標を達成する事を自覚させる事にもつながった。

3ページ目の上段には、2ページ目で行った6領域の総合評価を行うために、レーダーチャートを作成するようになっている。そして下段にはその結果を踏まえた教職に対する取組の姿勢や理解度についての1年間の反省と今後の抱負を記入する欄を設けた。

大学によっては電子データで管理している所もあるが、本学は規模が小さいため、システム導入の費用とその効果を考え、紙ベースで行うこととした。紙ベースで実施する事によって、保管方法に課題が生じたが、インターネットの環境が整っていない教室でも学生が記入や閲覧をすることができるというメリットがあった。

4. 教職指導への活用の取り組み

教職指導とは、前述の中教審の平成18年の答申によると、「学生が教職についての理解を深め、教職への適性について考察するとともに、各科目の履修を通して、主体的に教員としての必要な資質能力を統合・形成していくことができるよう、教職課程の全期間を通じて、課程認定大学が継続的・計画的に行う指導・助言・援助の総体、即ち教科と教職の有機統合や、理論と実践の融合に向けての組織的取組」である。このようなきめ細かな教職指導を行うためには、学生の

適性や履修履歴を把握することが必要であり、その役割を果たすのが履修カルテ(本学では「学習ポートフォリオ」)である。

本学では「学習ポートフォリオ」の導入に併せて、教職指導の充実に努めてきた。その中でも重点的に取り組んできたのは、学生が「学習ポートフォリオ」を記入する際の教職指導である。学生には各学年の後期終盤に「学習ポートフォリオ」を記入させているが、その際に表3のような指導を行っている。

表3の通り、学年ごとに指導の内容や形態を変えて実施している。まず1年次は教職課程の4年間の大ま

表3 東北工業大学における教職指導

1年次学生対象の教職指導 (平成24年度の場合)
日時: 11月26日(月)及び27日(火) 16:20~16:50の2回実施 担当者: 教職課程部教員2名 内容: ① 教職課程部からの情報提供 (15分) 16:20~16:35 ・「学習ポートフォリオ」とは何か ・教員に必要な資質とは何か ・4年間の教職課程について ・教育実習に必要なGPAについて ② 「学習ポートフォリオ」の記入 (15分) 16:35~16:50 ・学生が記入をしている間に巡回し、履修状況や成績に問題のある学生等に関しては、その場で指導をする。 ・適宜学生からの質問に答える。
2年次学生対象の教職指導 (平成24年度の場合)
日時: 11月29日(木) 16:20~17:00 担当者: 教職課程部教員4名 内容: ① 教職課程部からの情報提供 (20分) 16:20~16:40 ・教職課程部の指導方針や教員に求められる資質について ・教員免許に必要な科目について ・教育実習に必要なGPAについて ・教員採用情報、教員採用試験の学習方法について ② 「学習ポートフォリオ」の記入 (20分) 16:40~17:00 ・学生が記入をしている間に巡回し、履修状況や成績、目標の達成状況に問題のある学生等に関してはその場で指導する。 ・適宜学生からの質問に答える。 ・書き終えた人から4人の教員のうちの一人に提出し、教員はその場で確認し1人あたり2,3分を目安に指導し、押印する。 ・指導の観点は① 履修状況、② GPA、③ 学生の意欲・態度(進路も含む)を主とする。 ・特筆すべき点があった場合には、ポストイットに記入の上、ポートフォリオに貼る。 ・個別の指導を必要とする学生(教員の判断と学生の希望)は後日、個別指導を行う。 ・時間が必要な学生は自宅で作成後、来週の木曜日までに担当教員のポストに提出する。
3年次学生対象の教職指導 (平成24年度の場合)
日時: 11月中 内容: 各自で記入し、教職課程部の教員に直接提出すること。 提出の際に教職課程部教員が「学習ポートフォリオ」を確認し、適宜、指導を行う。そこで得た情報は教職課程部教員間で共有する。

かな展望を持たせ、そのために必要な科目と GPA 要件を周知することを主たる目的としている。次に 2 年次の学生に対しては、教員に必要な資質について学生に自主的に考えるよう指導した上で自己評価を実施する等、「学習ポートフォリオ」による指導を本格化させている。そして、2 年次の段階で GPA 要件を満たすことが困難と見込まれる学生については、個別の指導を行っている。また、主として 3 年次に行われる進路選択に向けて、教員になるための方法についての情報提供も行っている。3 年次の後期の段階では教育実習に行くことがほぼ確定している学生のみが教職課程を履修している状況にあるので、全体的な説明は行わず、個別対応としている。このようなきめ細かな対応が出来るのは、本学の教職課程を履修する学生が、年度によって異なるものの、1 年生で 80 名程度、2 年生で 50 名程度、3 年生で 30 名程度と少数であるためである。この指導を担当するのは筆者に名前を連ねる教職課程部の教員であるが、教職課程の履修の継続が困難であるにも関わらず学生が継続の意思を見せている等、教職課程部の教員のみでの判断が困難な場合には、全学的な教員養成審議委員会を通して学科の担当教員との話し合いを設定している。

5. 教職実践演習への活用の取り組み

次に平成 25 年度の 4 年次学生を対象とした教職実践演習においてどのように「学習ポートフォリオ」を利用しているのかについて紹介をしたい。なお、教職実践演習は本稿を執筆している段階で、全行程の半ばまで進行している状況である。したがって本稿で紹介する内容は授業の前半において行われた活動に限定されていることをあらかじめ断っておきたい。

教職実践演習の第 2 回では「学習ポートフォリオ」を利用した教職課程の振り返りのためのディスカッションを行った。実施日は 6 月 11 日（火）と 7 月 11 日（木）の 14 時 40 分から 16 時 10 分までと 9 月 13 日と 17 日の 10 時半から 12 時までであり、受講生数は全体で 20 名程度である。実施日を学生が教育実習を終えて 1 か月以内にすする事で、教育実習の記憶がはっきりしている中での振り返りができるようにした。この回の授業ではまず教育実習の感想を自由に学生に発言させた後、「学習ポートフォリオ」を記入させ、その後、教員に必要な資質は何か、それに対する自己評価（満たしている資質、今後向上すべき資質）、今後、自分にどのような取り組みが必要かの 3 点について発

言させ、教員と学生間で意見交換を行った。その上で、演習の第 3 回では上記の 3 点についてレポート課題を出し、その内容を踏まえて学生に個別の指導を行った。

これらの授業を通して、「学習ポートフォリオ」に関して気づいた事をいくつか記しておきたい。まず、学生が「学習ポートフォリオ」をどのように理解しているのかについて、学生は教育実習に行つて初めて、これらの資質のリストの意味が分かったということである。その発言は裏を返せば 3 年次までの「学習ポートフォリオ」は、その意味もほとんど分からず記入していたとも受け取れる。次に、学生の自己評価の結果を総合すると、その多くは生徒とのコミュニケーションの力が教員に必要な資質であり、生徒との円滑なコミュニケーションが今後の課題であるとのことであった。その一方で、教育実習の巡回指導を行った教員が考える学生の主たる課題は、教材研究の不足およびそのための知識の不足であり、学生と教員とで認識が異なっていた。また、個々の学生の自己評価の記載内容を見ると、教育実習で自らの未熟さを痛感させられた事で、自己評価の点数を 3 年次よりも低く評価する学生が多かった。そして、教育実習先からの評価や教職に関する科目での成績と比較した時に、必ずしもこれらの評価が高い学生の「学習ポートフォリオ」での自己評価が高いとはいえず、むしろ優秀な学生ほど自分に厳しく評価をするケースもあった。

このような事実を踏まえると、改めて言うまでもないが、学生による自己評価は学生の客観的な資質能力を表わすものではない。したがって、この自己評価の結果を教職指導や教職実践演習の資料として利用する際には、あくまで参考資料の一つとして扱う等の慎重さが必要だろう。この事については、改めて検証と検討を行っていきたい。

6. 本学における履修カルテの成果と課題

本章では、このような履修カルテ及びそれを用いた教職指導を行うことによって、本学においてどのような効果と課題があったのか、これらを主として担当してきた教員（筆者）の立場から挙げていきたい。学生への効果については、今年度の教職実践演習が終了した後学生へのアンケート等を通して明らかにしていく予定である。ここで挙げるのは具体的には、教員の立場から見た、教員に対する効果と学生に対する効果である。

まず教員に対する効果として挙げられるのは、履修

カルテを作成する過程において、教職課程の目的とそれを実現するためのカリキュラムや教職指導の在り方を考えなおす機会を得た事である。加えて、それぞれの科目において教職課程の目的を実現するための教育内容や方法を意識して実施できるようになった事も挙げられる。また、学生の履修状況を継続して把握することができたことによって、履修登録に際しての問題を発見したり、学生の成績や教職課程継続の意思の有無等に対応した教職指導を行ったりすることができるようになった。教職実践演習では、学生間でディスカッションする際や教員が指導を行う際に、教員に必要な資質という共通する指標があることで、それらの活動が円滑に行われるという効果があった。

次に学生に対する効果としては、早期の段階から教職課程の全体像を意識するようになり、教職を続けるかどうか、成績が足りているかどうか、どのようにすれば教員になれるのかについて考えるようになったことが挙げられる。さらに、教員という職業のもつ魅力や特性について、これまで以上に主体的に考える機会になっているともいえよう。これは、教職課程部の教員への相談件数の増加という形で現れている。ただし、「学習ポートフォリオ」に記入することそれ自体が学生の行動に変容をもたらしているというよりは、そこに記載されている内容を基に教員が指導をすることによって初めて、上記のような変化がもたらされていると考える方が自然である。本学においては、「学習ポートフォリオ」と教職指導はセットにして初めて学生に対して効果をもたらしていると考えられる。

一方で課題というよりは「学習ポートフォリオ」の限界として挙げられるのは、上記に述べた事の繰り返しになるが、「学習ポートフォリオ」そのものの教育的効果は限定的であるという事である。履修カルテを実施した事により、学生の履修情報の記録が残され、情報が集約され、蓄積されることになったが、それそのものは大学教員にとっても学生にとっても、教育や学習にイノベーションを与えるには情報量として不十分かつ信頼性に欠くものだからである。例えば、教員は「学習ポートフォリオ」の記載内容を、教職実践演習を計画する際に利用することが期待されているが、本学の教員に関して言えば、そこに書かれている以上の情報を日々の授業や教職指導、教育実習巡回指導を通して獲得しているため、実際の授業計画の際には参考にならなかった。また、学生が認識する課題は教育実習先での評価や教育実習の巡回指導を行った教員との評価と食い違っている印象があるため、「学習ポ

ートフォリオ」の記載内容はあくまで参考程度にとどめるべきなのではないかとの感想を持った。一方、教育実習に行く前の3年次までの学生にとっては、教員に必要な資質として挙げられている項目の意味を理解するのは困難であるようだ。したがって、教員がオリエンテーションや教職指導を通して学生に教え、学生との対話を行う事によって理解を促すようにしているが、それでも実際に教育実習で教員という立場を経験してみない事には分からないようである。

このような事から、本学における「学習ポートフォリオ」は教員および学生の教職課程に対する有益な「気づき」をもたらすものであるが、それ以上の効果は薄く、その「気づき」を活かした教職指導や教職実践演習における教員の指導が必要不可欠である。おそらくその活用の仕方を形式的かつ厳密に考えすぎると、効果が出ないどころか弊害が出ることも予想される。たとえば、学生の自己評価が下がったことを理由として成績評点を下げるなどという方式をとってしまうと、厳しい内省や自己批判を踏まえての内的成長を促すという、教育における重要な契機を見逃すことになってしまうだろう。しかしこれはあくまでも教職課程部の教員の立場からの限定された意見であるので、今後は学生や全学的な教職課程の委員会等の意見、そして他大学の事例等も踏まえて、そのあり方について継続的に考えていきたい。

7. お わ り に

以上、本学の履修カルテの実施状況について、平成25年10月段階までのものを紹介してきた。先述の通り、本稿を執筆中にも教職実践演習は進められており、そこでの「学習ポートフォリオ」の活用方法について模索が続いている状況にある。教職課程に関して、本学の目下の課題は教科に関する科目を提供する学科との連携が十分に進んでいないことである。幸い、今回の履修カルテや教職実践演習の導入は、専門科目の教員との協働体制を築ききっかけとなっており、これを機に今後、教科に関する科目と教職に関する科目とが有機的な連携をする教職課程の構築を進めていきたい。その体制が整えば、本稿で扱った履修カルテの在り方もまた変わっていくだろう。引き続き、検討を続けていきたい。

参 考 文 献

- 中央教育審議会（2006） 中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度のあり方について」
- 文部科学省（2008a）「教職実践演習の実施にあたっての留意事項」
- 文部科学省（2008b）「履修カルテの活用方法」

参考資料 東北工業大学「教職課程のための学習ポートフォリオ」（平成 24 年度入学生用）

東北工業大学 教職課程のための学習ポートフォリオ①<教職に関する科目の履修状況>平成 24 年度入学生用					
学籍番号 _____ 氏名 _____					
<教職に関する科目一覧>					
授業科目名	単位	修得年度	教員名	履修後に期待される資質（科目の目標）	成績評価
教職概論	2	1 年後期	佐藤 三之	教職の意義や教員の役割の重大さ、職務内容、子どもに対する責務を理解し、教員を目指すのにふさわしい自己形成に努めている。	
教育心理学	2		小川 和久	子どもの心理・発達に関して、子ども理解と学習集団形成に必要な基礎理論と知識を習得している。いじめ、不登校、特別支援教育などについて、個々の子どもの特性や状況に応じた対応の仕方を理解している。	
教育原理	2	2 年前期	八 嶺 友広	教育の理念、教育に関する歴史・思想についての基礎理論・知識およびその現代的課題を理解している。	
教育制度論	2		中 島 夏子	学校教育の社会的・制度的・経営的理解に必要な基礎理論・知識およびその現代的課題を理解している。	
生徒・進路指導論	2		佐藤 三之	生徒指導と進路指導の意義と目的、現代的課題及び子どもの発達段階の特性を踏まえた指導のあり方について理解し、実践する気構えを持っている。	
特別活動の指導	2	2 年後期	佐藤 三之	特別活動の意義と目的、現代的課題について理解している。集団活動において、他者との協力を大切にしながら、役割を果たそうとする主体性や責任感を発揮して行動することができる。他者の意見に耳を傾け、自己の向上に努めようとする。	
教育課程論	2		中 島 夏子	教育課程の編成に関する基礎理論・知識を習得している。	
教育方法学	2		鈴木 伸一 森山 賢一	情報教育機器や教育メディアの基礎理論・知識に基づき、それらを活用した授業を設計し、実践して、評価することができる。	
教育相談	2		若 島 孔文	カウンセリングを含む教育相談に関して、いじめ、不登校、ひきこもり、非行など、心・生命・健康に関わる問題と対応の方法を理解している。保護者や地域との連携・協力の重要性を理解している。	
工業科教育法 A	2	3 年前期	齋 藤 信六	工業科教育に関する学習理論と指導方法の基礎知識や技術を身につけ、それに基づいた学習指導案を作成することができる。	
商業科教育法 A	2		橋 本 勝美	商業科教育の教科書や高等学校学習指導要領の内容を理解している。商業科教育に関する基礎理論・知識を理解している。	
情報科教育法 A	2		鈴木 伸一	情報科教育のうち、普通教科「情報」の教科書や高等学校学習指導要領の内容を理解している。情報科教育に関する基礎理論・知識の理解に基づき、学習指導案を作成し、模擬授業をすることができる。	

工業科教育法 B	2	3 年後期	齋藤 信六	工業科教育の教科書や高等学校学習指導要領の内容を理解している。工業科教育法 A で学んだ基礎知識や技術を基盤とし、さらに評価に関する知識と技術を加えて学習指導案を作成し、模擬授業をすることができる。	
商業科教育法 B	2		橋本 勝美	商業科教育法 A で学んだ基礎知識や技術を基盤とし、さらに評価に関する知識と技術を加えて学習指導案を作成し、模擬授業をすることができる。	
情報科教育法 B	2		鈴木 伸一	情報科教育法のうち、専門教科「情報」の教科書や高等学校学習指導要領の内容を理解している。情報科教育と「総合的な学習の時間」との関連について理解し、インターネット・マルチメディアを活用した学習指導案を作成し、模擬授業をすることができる。	
教育実習事前・事後指導	2	3～4 年	佐藤 三之夏子 中島 信六 齋藤 伸一 鈴木 伸一	教材の分析と予想される子どもの実態を踏まえての学習指導案を作成し、それに基づき、適切な板書・発問・説明をしてわかりやすい模擬授業ができる。	
教育実習	2	4 年前期	佐藤 三之夏子 中島 信六 齋藤 伸一 鈴木 伸一	子どもと親しみを持った態度で積極的かつ適切に接することができる。教材研究に基づいたわかりやすい授業ができる。教育現場でのさまざまな活動から多くのことを学ぼうと努力する。教職員の指導を素直に取り入れ、真摯な姿勢で実習に取り組むことができる。	
教職実践演習	2	4 年後期	小川 和久 片山 文雄 中島 夏子 齋藤 信六 鈴木 伸一	教職現場で必要とされる実践的能力が身に付いている。教員としての使命感と責務を理解している。社会性や対人関係能力を身につけている。生徒理解・生徒指導のあり方を理解している。専門教科に関する基礎知識・技能と学習指導法を習得している。	

*その他、教職関連科目である「日本国憲法」、「スポーツ実技Ⅰ」あるいは「スポーツ実技Ⅱ」、「健康論」、「英語ⅠA」と所属学科の科目、そして教科に関する科目を履修することが免許取得のためには必要である。詳しくは、入学年度のシラバスを参考にすること。

<社会活動・ボランティア活動等の状況>

1 年次	
2 年次	
3 年次	
4 年次	

東北工業大学 教職課程のための学習ポートフォリオ②＜自己評価シート＞平成 24 年度入学生用

学籍番号 _____ 氏名 _____

＜必要な資質についての自己評価＞

必要な資質能力の指標			自己評価（1：あてはまらない 2：どちらかといえばあてはまらない 3：どちらともいえない 4：どちらかといえばあてはまる 5：あてはまる）				備考欄 （関係する科目等）
項目	項目	指標	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	
1 学校教育についての理解	教職の意義	教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務を理解していますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	教職概論
	教育の理念・教育史・思想の理解	教育の理念、教育に対する歴史・思想についての基礎理論・知識およびその現代的課題を理解していますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	教育原理
	学校教育の社会的・制度的・経営的理解	学校教育の社会的・制度的・経営的理解に必要な基礎理論・知識およびその現代的課題を理解していますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	教育制度論
2 子どもについての理解	心理・発達の子ども理解	子ども理解のために必要な心理・発達の基礎知識を習得していますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	教育心理学，教育相談，生徒・進路指導論
	学習集団の形成	学習集団形式に必要な基礎理論・知識を習得していますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	教育心理学，工業科/商業科/情報科教育法 A・B
	子どもの状況に応じた対応	いじめ、不登校、特別支援教育などについて、個々の子どもの特性や状況に応じた対応の方法を理解していますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	教育相談，生徒・進路指導論
3 他者との連携・協力	保護者・地域との連携協力	保護者や地域との連携・協力の重要性を理解していますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	教職概論，特別活動の指導，教育相談
	他者との連携・協力，役割遂行	集団において、率先して自らの役割を見つけたり、与えられた役割をきちんとこなすことができますか。 集団において、他者と協力して課題に取り組むことができますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	特別活動/特別活動の指導，教職実践演習
	社会人としての基本	挨拶，言葉遣い，服装，他の人への接し方など，社会人としての基本的な事項が身についていますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	特別活動の指導

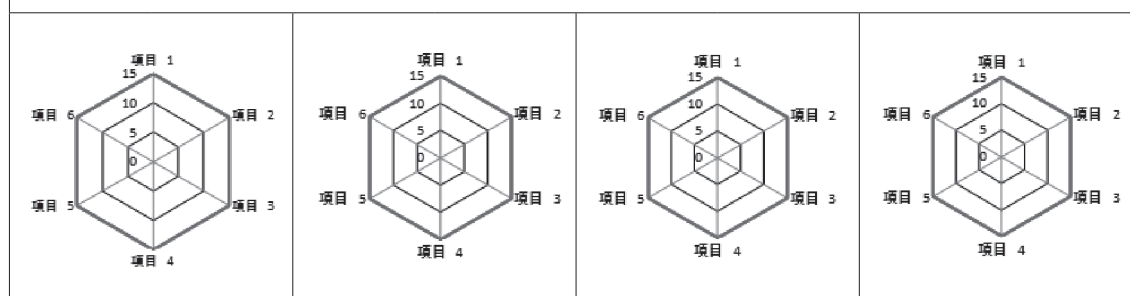
4	コミュニケーション	発達段階に 対応したコー ミュニケー ション	子どもたちの発達段階を 考慮して、適切に接する ことができますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	生徒・進路指導 論, 教育実習
		子どもに 対する態度	気軽に子どもと顔を合わ せたり, 相談に乗ったり するなど, 親しみを持っ た態度で接することがで きますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	生徒・進路指導 論, 教育相談, 教育実習
		公平・受容 的態度	子どもの声を真摯に受け 止め, 公平で受容的な態 度で接することができますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	生徒・進路指導 論, 教育相談, 教育実習
5	教科・教育課程に関する基礎知識・技能	専門教科に 関する基礎 知識・技能 工業科・商 業科	工業/商業/情報の分野 の科目について理解して いますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	教科に関する科 目
		教育課程の 構成に関す る基礎理論・ 知識	学習指導要領や教科書な どの教育課程に関する基 礎理論・知識を習得して いますか。 (教育課程: 教科・総合 的な学習の時間・特別活 動・道徳教育)	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	教育課程論・特 別活動/特別活 動の指導
		学習指導法	情報教育機器の活用を含 む学習指導法に係る基礎 理論・知識を習得してい ますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	教育方法学, 情 報科教育法 A・ B
6	教育実践	教材の分析・ 開発	教科書にある題材や単元 等に応じた教材・資料を 分析・開発し, 指導案と してまとめることができ ますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	工業科/商業科 /情報科教育法 A・B, 実習指 導
		授業展開力	子どもの反応を生かし, 適切な板書や発問をしな がら授業を展開すること ができますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	工業科/商業科 /情報科教育法 A・B, 実習指 導
		学級経営力	学級経営に必要な, 集団 をまとめて導く力を身に つけていますか。	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	1・2・3・4・5	工業科/商業科 /情報科教育法 A・B, 実習指 導

東北工業大学 教職課程のための学習ポートフォリオ③＜自己総合評価シート＞平成 24 年度入学生用

学籍番号 _____ 氏名 _____

＜各項目ごとの得点と総合点＞

	1. 学校教育 についての 理解 (15 点)	2. 子どもに ついての 理 解 (15 点)	3. 他者との 連携・協 力 (15 点)	4. コミュニ ケーション (15 点)	5. 教科・教 育課程に 関する基 礎知識・ 技能 (15 点)	6. 教育実践 (15 点)	総合得点 (90 点)
1 年次							
2 年次							
3 年次							
4 年次							



1 年次

2 年次

3 年次

4 年次

教職に対する取組の姿勢や理解度についての 1 年間の反省と今後の抱負

1 年次	
2 年次	
3 年次	
4 年次	

序文

劇作家 D.H. ロレンス (翻訳) (4)

D.H. ロレンス, 『戯曲集』

編者: ハンス・ウィルヘルム・シュワルツェ & ジョン・ワーゼン

(出版社: CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS 出版年: 1999 年)

(訳者) 高橋 克明*・後藤 眞琴**

Katsuaki TAKAHASHI and Makoto GOTO

『ホルロイド夫人やもめになる』—依然として、これまでに上演されたロレンスの唯一の戯曲—の 1926 年 12 月の上演はこの戯曲の 3 度目の上演であった。演出はエズメ・パーシーで、パーシーは『ホルロイド夫人やもめになる』を上演したいという長年の願いを果たすために演出したのである。その上演はロンドンのキングズウェイ劇場 (Kingsway Theatre) で 1926 年 12 月 12 日 日曜日, 13 日 月曜日, 19 日 日曜日に行われ, 21 日の夕方にはそれについて討論があった¹⁶¹⁾。この戯曲のプロデューサーであるフィリス・ホイットワースは最初の 2 回の上演後, ロレンスに新聞の切抜きと写真を送った。1926 年 8 月以来ロレンスと親しくしているロルフ・ガーディナーはそれを月曜日のマチネーで見て—「とてもすばらしい上演」と思った—しかし, もう 1 人の友人 (おそらくキャサリン・カーズウェル) は「祖母は愚痴をこぼし過ぎる」と思っていた¹⁶²⁾。ガーディナーは, バーナード・ショーもまた月曜日の上演を見て, 「そのダイアログは自分が今まで聞いたうちで一番すばらしく, これに比べたら自分の作品は「フリート街の床屋」だ」とショーが言ったと, 伝えた。パーシーはショーのその感想を「それと比較したら, 私の散文は機械織のレースです。あなたはそこにタイプライターの音を聞きとることができます」と伝えた (『書簡集 v. 605. 注 1』)。ショー自身は「あふれるばかりに豊富にあって, 生き生きとしていて印象的なダイアログの大変な奔流となって突き進んでいく彼の戯曲を見て, 私自身の戯曲はこれ

に比べたら時代遅れのように思われる」¹⁶³⁾と感じた時のことをのちに思い出している。

しかしながら, キャサリン・カーズウェルは 1926 年の上演は 1920 年のオールトリンカム上演ほどよくないと思った¹⁶⁴⁾。そしてその劇評も励ましになるものではなかった。1927 年 1 月の『イングリッシュ・レビュー』のホラス・シップはロレンスの戯曲が「シャフツベリー・アヴェニュー (訳注: London の Soho の南側を走る通り。Queen's, Shaftesbury などの劇場や映画館あり, 'the heart of theatreland' といわれる) の普通の通りの外」にあり, 「赤裸々な現実, わびしさ, および必死になって真に迫っていることにおいて構成的にも劇的にも偉大な作品である」と評した (pp. 120-1)。しかしながら, 『ザ・タイムズ』はロレンスが表面上は登場人物たちを「故意に単調に」描写していること, 及び「ダイアログを無駄なく使っていること」を受け入れ難いものとした¹⁶⁵⁾。その上演を見ることは生きている登場人物よりもむしろ「フリーズ」(訳注: 建築の柱の上の部分である entablature 中 cornice と architrave の中間の部分; 装飾的な彫刻を施すことが多い) を見ているようであり, その戯曲は堅苦しく, 進展がなく, 観客を苦しめ, 「観客の心の重荷のように」なっているように思われると, 『ザ・タイムズ』は評した。一方, アイヴァ・ブラウンはその戯曲は「クライマックス」を作りながら, そこからその劇作家は自分の作品に壊滅的な損害を与える仕方突然逃げ出した」と思った。『ニュー・ステイツマン』と『アウトLOOK』の劇評家たちはその戯曲を是認する批評を書き, その戯曲のダイアログが強烈で, 十分に感情に満ちていることを強調しているが, 彼らは

2013 年 10 月 22 日受理

* 共通教育センター教授

** 東北大学名誉教授

二人とも最後にホルロイドの死体を洗う場面は長すぎるとみなした¹⁶⁵⁾。

ロレンスはパーシー宛の手紙でこういった点のいくつかを話題にしている。ロレンスは「私自身その戯曲を読んでから何年もたつことを白状しなければなりません。私が未熟だった時の15年前に、私はその戯曲を書いたのです」と述べている。ロレンスはその手紙で次のように述べた時、観客と批評家たちはおそらく正しいだろうと思っていた。

彼らが最後の幕は、少しも前向きに生きないで、死者を洗うのに専念し過ぎていると言った時、彼らは完全に正しいでしょう。それが私の現在の考えであることは間違いありません。あなたに少しでも時間がありましたら、あなたはどう思われるのか—またヴァン嬢（ホルロイド夫人を演じる）がどう考えておられるのかを私に話してくださいませんか。—それから、もしその戯曲がもう一度上演されるようなことがありましたら、最後を書き直します。私はそうしたいと思っています。

（『書簡集』v. 604）

ロレンスはイーストウッドの旧友に—「観客の大部分がその戯曲が陰うつ過ぎると感じたと思っています。それがもう一度上演されることがあるなら、その最後を変更して、もっと明るくしようと思っています。僕自身、今は、気がめいる結末は嫌いです。しかし僕があの戯曲を書いてからとても長い時間がたつのです」（『書簡集』v. 610）と—同じ考えを述べ、そしてフィリス・ホイットワースにも述べた。しかしながら、ロレンスはホイットワースには「その戯曲がとても立派に上演されて僕はうれしく思い、上演の機会を与えてくださいましたあなたにとっても感謝しております……あなたがその評判に失望しないよう心から願っています……とても立派に一生懸命に仕事をしたあとで、それは不運のように思われます。しかし私は、本当に、あなたに感謝しています」¹⁶⁷⁾と言っている。『ホルロイド夫人やもめになる』はロレンスの生前再び上演されることはなかった。

しかしながら、セッカーが出版する『ダビデ』の廉価版の問題がまだ解決されていなかった。4月は「その本の出版には遅いように思われます……よろしかったら、あなたの望み通りに早く出版してください」（『書簡集』v. 623）と、ロレンスは1月12日にセッカーに意見を述べた。セッカーはその出版をそれ以上遅らせることはなく、6シリングの『ダビデ』（E1の無訂正

のリプリント版）を1927年2月3日に出版した¹⁶⁸⁾。

早くも12月の末には、ロレンスは不安定な健康の危険を冒してまで、2月にイングランドで行われる『ダビデ』のリハーサルに本当に出席しなければならないだろうかと思い始めた（『書簡集』v. 616）。『ダビデ』は3月ではなく、4月に上演されるだろうという新年早々の知らせに、ロレンスは喜んだ。「太陽が北国でちょっと暖くなるまで、僕はここにとどまっていたい」。時が経つにつれて、ロレンスはそのリハーサルに出席するのがますます嫌になり、「おそらく僕は行かないだろう。ばか者たちがダイアログをもてあそんでいる間、そこにいなければならないと考えると計り知れないほどの嫌悪を感じるのだ」（『書簡集』v. 637）と、2月6日に述べ、3週間後にはロレンスは行くのがさらに嫌になった。ロレンスは病気であって、「僕は行こうとは思わない……あいつらなど糞くらえだ、あいつらに好きなように『ダビデ』を上演させればいい。どうして僕が自ら直接あいつらとかかわらなければならないのだ！ あいつら全部のことを考えるだけでも嫌だ」（『書簡集』v. 648）と言っている。そして10日後には、ロレンスは「僕はあの人達に僕の命をだめにされることになるから、絶対に行かないよ。彼らは好きなだけ『ダビデ』を乱暴に扱い、いじくり回すがいい。彼らはどうせそうするだろう。どうして彼らはさらにぼくの命を吸い取らなければならないのだ？」（『書簡集』v. 651）と、述べている。

ロレンスは上演を見なければならないとまだ感じてはいたが、しかし『ダビデ』の上演そのものが最後にまでも、5月に延期されたのである—「それはいつまでも未定のように思われる」とロレンスが述べたのにも十分な理由があったが—ロレンスにもまた行くのを嫌がる新たな理由もあった。それは「ロンドンへ行くことに、そして特に演劇関係の人たちと大酒を飲むことに僕には非常に性に合わないものがあるのです……『ダビデ』そのものです。今は僕の気分にはまったく合わないのです。僕はそれを見たくもないし、聞きたくもないし、それについて考えたくありません」（『書簡集』vi. 50）という理由であった。しかし、これはロレンスがフィリス・ホイットワースに言ったことではなかった。4月末にロレンスはフィリス・ホイットワースに次の週にロンドンにいるようにしますので、「そうしたら私たちはあの戯曲（『ダビデ』）についてできる限りのことをしなければなりません」¹⁶⁹⁾と、まだ話していたのである。しかしながら、ロレンスは『チャタレイ卿夫人の恋人』の第二稿を最近完成した

ところであり、『羽鱗の蛇』を創作している時にロレンスは『ダビデ』の構想を思いついたのだが、『羽鱗の蛇』の気分と意義は今やロレンスにははるか過去のものになっていたのである。ロレンスのメキシコの小説『羽鱗の蛇』は1926年1月に出版されて、「出版後ロレンスがほとんど何も言わないのは……おそらく、その小説の重要性に対する彼の信念が弱まっている証拠なのだ」と、論じられたりしていた。一方では『ダビデ』と1925年初めのロレンスの病気との関連性は彼の忘れたいものでもあった。フリーダは「彼はあとになると『ダビデ』をそんなに好きでなくなりました。多分『ダビデ』のために彼はあまりにもひどい目にあったのでしょう」とあとで述べている¹⁷⁰⁾。1927年5月初めには病気がさらに進んだので、ロンドンへ行かなければならない問題は解決された。ロレンスは「良心のとがめと（ロレンスがロンドンに来られないのを）嘆きかなしむ手紙にもかかわらず」（『書簡集』vi. 56）、ロンドンに行くことはまったくできないと思ったのである。少なくともフィリス・ホイットワースからの手紙の1つには「彼らは僕の手助けを欲している」（『書簡集』vi. 46）と述べられている。キャサリン・カーズウェルによれば、ロレンスがリハーサルに出席できないことになって「ロンドンでは人々は当然ながらかなり憤慨した。その上演にはボランティアの多くの困難な活動とかなりのお金が費やされていて、ロレンスはその企画を促進し、指導するためにあらゆる努力をするべきであると思われていたからである」。最終的な出費は約400ポンドであったようである¹⁷¹⁾。

しかしながら、ロレンスはフィリス・ホイットワースに長たらしい手紙を書いて、再び謝罪し、削除する箇所と衣装についてプロデューサーのアーネスト・ミルトンからのいくつかの質問に答えている。

僕は自分が『ダビデ』を見に行けないことについて言葉では表させないほどすまなく思っています。このひどい風邪はマラリアの再発と間違えられました……ロンドンへ行くことがそんなに長い距離でさえなければ、僕は思い切って行きます。しかしロンドンに到着して、病床に就いて、誰かにご迷惑をかけなければならないようなことはしたくありません。だが実際のところは、キニーネのせい、耳がまったく聞こえないのです。本当についていません！

ミルトンさんに一番いいと思うように削除してください。ようにお話しください。おそらく第三場の全部—サウルのたくさんの長いせりふ—と、それから動きのある展

開を遅らせるものでしょうが。僕はそこにいて、長いせりふが、特にサミュエルのせりふが、サミュエルの祈りだけを申しているのではなく、終わりごろのせりふもでございます—それらがだらだらと進んでいくのかどうかを見ることができたらよかったですと思っています。それらが実際うまくいくな、削除されなければありがたいと思います—僕はその戯曲の印象をしゃれていて、かなりゆっくりとした、擬古的・宗教的なものにはしたくなく、なかったからです。しかしそれがだめでしたら、長めの語句を削除し、速やかにすばやくはっきりと言うようにしてください。長ったらしくて、厄介なまま放置しておくよりもむしろどんなものでも構いません……衣裳に関しては、それについてはほとんど何もありません。男性には、膝まである、袖なしの短いシャツ、時には、その上に、綿かウールの長めの、袖のゆったりした上着で、色がついていて、腰のところで結び付けられるものが必要な場合もあります—それから、時には、バーヌース（訳注：アラビア人などの着るフード付きのマント）。女性には、ゆったりとしているか、ひもで結んだ、長い袖なしの上着と、時にはもっと短い、袖の広い、色のついた上着です。¹⁷²⁾

戯曲『ダビデ』は、2つの「場」を除いて¹⁷³⁾、ロンドンのリージェント劇場（Regent Theatre）で5月22日の日曜日午後7時30分と23日の月曜日のマチネーの公演で上演された。ロンドン在住のロレンスの知人の幾人かは一コテリアンスキー、ナンシー・パーン、ミリセント・ベヴァリジー・ロレンスに手紙で自分たちはそれが気に入ったと述べているけれども、またミルトンは日曜日の夜の公演の終わりに観客に「熱烈に迎え入れてくれたこと」に対して感謝し—ロレンスが健康上の理由から見に来られなかったのは残念であると述べているけれども（『書簡集』vi. 66 注1）—その上演はこの上なくひどく批評された。『ネイション・アンド・アシニアム』（1927年5月28日）の劇評家（‘オミクロン’）はそれを次のように思ったのである。

その戯曲には劇を展開していくすべての動きが欠けていることで、上演は確かに非常に難しくなっていて、上演の大失敗の結果を著者のせいにするのをためらわせるような陳腐な創造性のない本質的なものがその戯曲にはある。……20世紀の作家が17世紀初期の文体を模倣しようとして一生懸命になって一体全体何になるのか。その結果は、英語の最も有名な本からの引用句をしばしば挿入した、退屈なウォーダー街英語（訳注：歴史小説などに多

い擬古体の英語)の言葉遣いになっているのである。(p. 261)

『スペクテイター』(1927年5月28日)のリチャード・ジェニングズはその戯曲はまったく上演には適さないとみなして、俳優たちを非難したいとは全然思わなかった。ジェニングズはその戯曲によって、「それは聖書の場面および人物の一連のクロモ石版刷りの「眺め」であり、欽定訳聖書(訳注: 1611年英国王James I世の裁可により編集発行された英訳聖書)から悪い方へとただそれていくことになる言葉遣いで表現されていて、それは劇的な場面に役立つような「特徴」に集中している映画に似ている……」(p. 930)と、『ベン・ハー』の映画を思い出している。『ザ・タイムズ』(1927年5月24日)もまた、それは「退屈で」、「劇でもなく詩でもなく」、「上演するのは難しい作品」とみなしている。『ザ・タイムズ』はミカルを演じたアンジェラ・バデリーを選んでほめたが、しかし特にサウルを演じたピーター・クレスウェルを、「私たちは彼の演技にたくさんのニュアンスの異なる意味があるのを理解できなかった」¹⁷⁵⁾と非難している。ロレンスの旧友であるエドワード・マーシュが見た日曜日の夜の上演についての説明は、クレスウェルがどうしてそんなにまづかったかを明らかにしている。マーシュは次のように非常に鋭い目と耳の力を発揮している。

A氏にサウルを演じさせないように全力を尽くしたが、できなかったとでも言うかのように、「止むを得ない事情のためサウルの役が急にA氏によって演じられることになる」と、プログラムにかなりぶっさばうに言い表された発表から、その面白さは始まった。彼はこの上なく下手だったから、これはその通りに信じられただろう。たぶん最もおかしい場面は、サウルが気が狂い、ヨナタンがダビデを連れてきて、それについてダビデが何をできるかを見る時である。サウルは舞台の後ろで王座に座り、わめき散らし、ダビデはフットライト近くのソファに座って、ダビデ自身の作の聖歌の1つを、私たちみんなが朝の祈りからとてもよく知っている曲に合わせて歌い始めたが、これは震顫譫妄症(訳注: しんせんせんもうしょう: アルコールや麻薬中毒により、体が震え、恐ろしい幻覚を見る)にはあまり効きそうにもない治療法のように思われる。サウルは全然注意を払わないで、くだらない長話を続けたが、その要点は(賛美歌の歌声にかき消されずに私に聞こえた限りでは)神は実は巨大な「カプトムシ」で、「地球」を卵として、しかも腐っ

た卵として産んだのだということであるように思われた。時々サウルはダビデに投げ槍を投げてダビデを跳び上がらせたので、ダビデはとても狼狽した。それでダビデは「あなたはあなたの「おみ足」の業(わざ)の支配権を彼に与えられ、万物を彼の「支配」の下におかれました」のようなものを歌った。もうひとつの愉快な場面は終わり近くで、サウルがギルボア山の山頂かどこかで再び気が狂って、ダビデをののしり始めた時であった。「ダビデは」とサウルは言った、「一のように一のように(プロンプター(演劇中の俳優に忘れたせりふを教える人)へ)何?」(プロンプター「イタチ」)サウルは「ああそうだ、イタチだ、子を産むことのできない処女のイタチだ」と言った。ほとんど忘れることができないようなせりふがあるとすれば、それは「処女のイタチ」についてのせりふだと、僕は思った。

ゴリアトは舞台の袖で、ある程度は聞き取れるダビデとののしり合いのあとで殺され「首を切り取られ」た。僕はその戦いを見たかったのだが、残念だった。ダビデが意気揚々と帰ってきた時、サウルの娘たちとその侍女たちは *Tootloo* (「さようなら」のその当時の俗語)と言いながらタンバリンを持ってあちこち走り回った。彼女たちはそれをとてもたびたび、とてもはっきりと歌ったので、僕が間違ったはずはない。僕はその言い回しがそんなに遠い昔に由来するとは知らなかった。¹⁷⁶⁾

あらゆることが日曜日の夜にはうまくいかなかったのである。クレスウェルが自分のせりふを一度ならず読んだだけでなく、クレスウェルの声は時々聞き取れなかった—「ダビデに向けられた彼のモノローグは……全然聞こえなかった」—「一方その演劇中にひどいことにはちょっとの間、夜会服を着た1人の若い男が、間違って、舞台に現われるのが、観客に見えてきたり」¹⁷⁷⁾したのである。

事態は月曜日になっても全然よくならなかった。月曜日には有名な劇評家のジェイムズ・エイガトが午後2時のマチネーを見に来た。

そこで我々はリージェント劇場のほら穴のような暗がりの中に座り、隣の人がいるのかどうかも見えず、共に退屈していても支持は得られず、ひとり倦怠しているのを恥ずべきなのかどうかともわからず……ハーコート・ウィリアムズ氏[サムエルを演じている]は、ノア(訳注: 大洪水の時、神のお告げにより箱舟を作り、それに自分の家族と動物の1つがいくつか乗せて難を免れた信仰深いヘブライの族長、「創世記」5: 28-10: 32 参照)

とメトセラ（訳注：ノア時代以前のユダヤの族長で、969年間生きたといわれる典型的長命者、「創世記」5：27参照）と一緒にしたように見えて、床に触れて再びトルコスリパー（つま先が上を向いた、かかとのない柔らかい上履き）のように巻き上がったあごひげを生やしていて、哀歌を歌った上に挽歌を、葬送歌を歌った上に弔歌を歌い続けた。このせりふは（〔第2場〕）どう読むようになるのか私には分からない。私が確実に分かっていることは劇場ではそのせりふは有名な「テレネース〔テラメース〕の語り」よりも長く、退屈に聞こえたということと、劇場の外は5月で、太陽が輝いていて、ローズクリケット競技場ではミドルセックスがニュージーランド人のチームの得点を上回っていたということである。しかしその識者は、ひとたび観客をとりこにしまうと、悪評通り容赦なかった。¹⁷⁸⁾

エイガトは、「しかし16の「場」から2つの「場」を削除してもまだ14の「場」が残っていて、14の「場」のために私たちは数本の悲しい最後の白髪を振り回して、その詩人が言うように、お互いにうめき合うのを、座って、聞いていた」と、『ダビデ』の2つの「場」が削除されたのに気づいた。エイガトは「私たちに多数の、絵のように美しい光景と、いかにも本当らしい衣装を見せてくれたこと」でプロデューサーをほめたが、エイガトは「東洋は、絵のように美しいけれども、常に乱雑な、砂だらけの場所であったというのが私の頭の中にあるのだが、この上演に関しては何もかもがさっぱりしていた」と、その扱い方の不利な点にも注目した。エイガトはミカルを演じた、アンジェラ・バデリーを「数千年モダン過ぎる」と思い、他の劇評家たちのように、ヨナタンを演じたフランク・ヴォスパがその上演でただ1人すばらしい演技をしたと思った。アイルランドの劇作家のジョン・アーヴィンは、5月29日のオブザーバーで、「私たちが「ホルロイド夫人やもめになる」で聞いたすばらしいダイアローグのいかなるものもこの戯曲ではほとんど聞かれないで、3時間ずっとくだらなく続いたので、観客は倦怠と疲労の恐るべき状態に陥らざるをえなかった。私たちはうんざり、うんざり、うんざりした。」と、エイガトよりはるかにぶしつけに批評した。アーヴィンは、「この戯曲のような「場」の長さ」と「場」が変化に富んでいる戯曲はスリー・ハンドレッド・クラブ（Three Hundred Club）が、ステージ・ソサイアティ（Stage Society）と協力するにしても、もっと多くのリハーサルをする必要があるし……〔ミルトンには〕キャス

トにあるよりもすぐれた俳優と女優が必要であったし、少なくとも1カ月の絶え間のない、真剣なリハーサルが必要だった」（15ページ）として、上演の失敗の責任はロレンスにもあり、上演した側にもあるとみなした。ナンシー・パーンは「リハーサルをする限られた機会」について、ロレンスに同じような主張をした（『書簡集』vi. 70 注1）。

コテリアンスキーと画家のマーク・ガートラーは日曜日の上演を見て、コテリアンスキーはそれについてロレンスに次のように手紙を書いている。

主な責任はサウル（ピーター・クレスウェルが演ずる—その俳優が誰だか僕は知りません）の演技が非常にまずかったという事実と、彼はあなたのサウルを完全に誤解して、あなたのサウルをかなり芝居がかったわざとらしい、非常に平凡な者にしたという事実にあります。彼の演技がその戯曲を台無しにしなかったのは驚くべきことです。ダビデは悪くありませんでしたが、よくありませんでした。（ロバート・ハリーズ）その俳優が誰だか僕は知りません。しかしその俳優がイングランド人であるとは思いません。彼の声から判断しますと、その声は気持ちのいいものではなく、声の抑揚も貧弱で、彼はユダヤ人かウェールズ人です。けれども彼はあなたの原文に従って「ダビデ」を演じようとしたのですが、その登場人物を本当に親密に理解してはいません。一番よかったのはヨナタン（フランク・ヴォスパ）だと思います。彼はかなりよく演じたばかりでなく、彼はあなたのヨナタンを正確に理解して、演じているように僕には思われました。ミカル（アンジェラ・バッドリー）は非常に、非常によく演じました。彼女はあなたのミカルをととてもよく実現して、あなたのミカルでした。彼女とヴォスパがサウルのまずい、お粗末な演技からこの戯曲を救ったのだと、僕は思います。（『書簡集』vi. 66 注1）

コテリアンスキーは「一流のプロデューサーの監督の下で、サウルやダビデを演ずる本当にすぐれた俳優たちがいれば、戯曲『ダビデ』はこの上なくいいものになり得るだろう」と主張した。コテリアンスキーは『「ダビデ」の芸術的価値のためだけではなく、財政的にも大成功を収め得るので、他の誰かが『ダビデ』を取り上げるだろうと確信していた。このように確信していたのは誠実な友達だけではなく、あの現実主義で計算高いカーティス・ブラウンも「神聖な主題に対するばかげた偏見さえなければ、『ダビデ』は、敬虔に扱われて、実際、立派な戯曲になるだけでなく、注

目すべき映画にもなるだろう。たぶんそのうちそうなるだろう」¹⁷⁹⁾と、1930年代の中頃まで『ダビデ』の価値を信じ続けていたのである。しかしながら、『ダビデ』は劇として決して成功しなかったし、映画化されることも決してなかったのである。

ロレンスはコテリアンスキーの手紙を5月27日に受け取って、「僕がそこになくてよかったように思われます。豚の耳で絹の財布は作れない（訳注：粗悪な材料で立派なものは作れない、人間の本性は変えられない等の意）から……俳優たちは自分たちに心の中で感じるものが十分でないのです」（『書簡集』vi. 66）と、言った。ロレンスは「生意気な」反応を受けていらいらして、「それはまったく退屈だったと、彼らは言っています。彼らは腑抜けで、金玉がないのだよ」（『書簡集』vi. 72）とも言っている。合併した演劇協会（Incorporated Stage Society）の経営者会議（Council of Management）は一普通そうするように—ウェストミンスター、セントラルホールの1室で、マチネーが終わったあとの月曜日の夕方に『ダビデ』について「非公式の討論会」を開いて¹⁸⁰⁾、コテリアンスキーとミリセント・ベヴァリッジが出席したが（『書簡集』vi. 82）、しかし何が話されたかについての情報は残っていない。ロレンスは、ある段階ではイングランドに行き、フィリス・ホイットワースがロレンスに約束していた上演パーティーを楽しみたいとまだ思っていた—特にフィリス・ホイットワースが「できれば、僕らのために、ダビデとサウルとミカルなど全部を集めることができれば、それはとても面白いだろう」。¹⁸¹⁾しかしロレンスは二度とイングランドに行くことはなかった。

1932-64における戯曲の出版、上演および評判

1932-41. 『D.H. ロレンスの戯曲集』の出版、『バーバラ争奪戦』を『バーラの保持』として出版、『ダビデ』の上演、『嫁』を『私の息子は私の息子』として上演、『炭坑夫の金曜日の夜』の出版と上演および『ノアの洪水』、『高所』、『回転木馬』、『既婚者』の出版

ロレンスは1930年3月にヴァンスで死んだ。1930年3月に、フリーダ・ロレンスとジョージ・アーサー・ロレンス（当時生存していたロレンスの兄）は、その時にはロレンスの遺産を共同で管理していて、1冊の戯曲集を出版するセッカー—彼は新しいロレンスの本を出版し続けるのに最善を尽くしていた—との契約書

にサインした。これは3篇の出版済みの戯曲（『ホルロイド夫人やもめになる』、『一触即発』および『ダビデ』）と未出版の断片である『高所』を含めるように計画されていたが、『高所』は除かれた¹⁸²⁾。カーティス・ブラウンがそういったことについては何もまだ知らなかったように、他の5篇の省略してない戯曲のどれかを含めることについては何の話し合いもなかった。『炭坑夫の金曜日の夜』の原稿はまだエドワード・ガーネットが所有していて、『回転木馬』の原稿は1933年まで再発見されてはいなかった。『嫁』、『既婚者』および『バーバラ争奪戦』の原稿はすべて1931年5月にエルゼ・ヤッフエによって発見されて、フリーダがそれらの戯曲の発見後間もなくそれらの戯曲について知ったのは確かである（フリーダは1931年に『バーバラ争奪戦』を「私がとても好きで、それは私たちが初めて一緒にいた時の」戯曲と言っている）¹⁸³⁾。しかしながら、フリーダはこれら3篇の新しい戯曲を、むしろ未出版のままにして置きたかったようである—1934年にセッカーとカーティス・ブラウンは『バーバラ争奪戦』、『回転木馬』、『既婚者』および『高所』を含む1冊の本を出版する話し合いを実際に真剣に行っているから（『炭坑夫の金曜日の夜』は単独で1冊の本として既に出版されていた）、おそらくそれでもう1つの戯曲集があとで出版されることになったのであろう。『嫁』はその時にはおそらく劇場代理人が所有していたので、省かれたのであろう。『ノアの洪水』を含めようとは誰も考えなかったようである。1933年7月に、セッカーの『D.H. ロレンスの戯曲』が出版された。それはただ3篇の出版済みの戯曲から成り立っているだけであるが、『D.H. ロレンスの物語』（1934）というセッカーの出版したものとり合うような仕方出版されたのである。『D.H. ロレンスの物語』もまた未出版の作品および最近発見された作品はすべて除いていたのである。

1933年3月に、フリーダは『嫁』、『既婚者』および『バーバラ争奪戦』の原稿の発見を公表した。フリーダは「それらの原稿がミュンヘンの私の姉の家で発見されるまでは……それらの戯曲が存在しているとは全然思っても」いないで、「1篇は「バーバラ争奪戦」という軽い陽気な喜劇で……これらは出版されて、上演されると思います。「バーバラ争奪戦」は十分に商業向きであると言われているものです」と述べている。しかしながら、カーティス・ブラウン著作権代理店は発見できる未出版のロレンスの原稿のすべてのありかをまだ探し出して、コピーしていた。1933年4月と5

月にロンドンの書店、バンパスで開催された、ロレンスの『オリジナルの原稿、訂正されたタイプ原稿、草案等』（『ダビデ』や『高所』の原稿だけでなく『回転木馬』や『既婚者』の原稿——最初の5ページは紛失——も含まれていた¹⁸⁶⁾の展示会もまた以前には知られていなかった資料発見のきっかけとなった。例えば、エドワード・ガーネットは展示会が開催されたあとで、『炭坑夫の金曜日の夜』の彼の持っていた原稿を展示会に送ったり、1933年5月には、その原稿が返還される前に、カーティス・ブラウンはその原稿のタイプ原稿を作ったりしたのである。新たに発見された5篇の戯曲全部のカーティス・ブラウンの作ったカーボンコピーが残っているという事実には、カーティス・ブラウン著作権代理店がその5篇全部の戯曲が出版され得るか、上演され得ると思っていたことが示されている。そう思われる第一番の戯曲はおそらく『炭坑夫の金曜日の夜』であったのかもしれない。『炭坑夫の金曜日の夜』は、連載されるだろうと期待して、1933年の夏にT.S. Eliotの雑誌『クライテリオン』（フェイバーによって出版されていた）に提出された。『炭坑夫の金曜日の夜』は『クライテリオン』によって却下されたが、フェイバーはクリスマス進物用の本として『炭坑夫の金曜日の夜』を出版しようと申し出た。しかしながら、その出版権を持っていたマーティン・セッカーは同意しないで、翌年自分で『炭坑夫の金曜日の夜』を出版した。1933年の末か1934年の初めに、演劇協会（Stage Society）は『炭坑夫の金曜日の夜』の上演をセッカーがその戯曲を出版するのと同時にしようと考えていたが、その考えからは何も生じなかった。ほぼ同じようにすぐに、1933年の夏に、カーティス・ブラウンは『バーバラ争奪戦』の出版権を雑誌『アーゴシー』に売り、『アーゴシー』は1933年12月に、大幅に削除し、改変した版で『バーバラの保持』という題名で、その戯曲を出版したが、自筆原稿の原文のほぼ四分の一を削除する権限を誰が与えたかについての指示はまったくない。『アーゴシー』はその戯曲を「文学的発見」とであると宣伝して、それは「D.H. ロレンスのすばらしい喜劇／『息子たちと恋人たち』および『チャトレイ卿夫人の恋人』の作者による新しい戯曲で、ロレンスの原稿の中から最近発見されて、『アーゴシー』に今独占的に出版される」のだと、紹介した¹⁸⁷⁾。

『D.H. ロレンスの戯曲集』の1933年7月の出版は、ロレンスの生涯と作品についての評判が継続しているのとあいまって、『ダビデ』を秋にもう一度上演させ

るのを促すのに役立ったかも知れない。『ダビデ』は10月23日から28日にケンブリッジ・フェスティバル劇場（Cambridge Festival Theatre）で上演されたのである。プロデューサーのジョウゼフ・ゴードン・マクラウドはその上演についてフリーダ・ロレンス（その時にはニューメキシコに戻っていた）に手紙を書き、フリーダは「その公演を見ることができたらすばらしいと思います——しかし私はここにいます——それが大成功するのを期待しています。私はあの戯曲がいつも大好きでした——私のことを忘れないでいてくれてありがとうごさいます——ロレンスがこのことを知ることができたらいいのに」¹⁸⁸⁾と返事をしていたのである。マクラウドの上演は1927年のミルトンの上演より時間は短く、切り詰められていた。それは約2時間だけで、舞台装置は「実際に使用できる本物で、申し分なく、照明もよかった」。しかしながら、マクラウドは『ダビデ』を大幅に削除もしていて、かなり驚いたことには、マクラウドは「第15場は舞台では十分に表現することはできないという理由で」第15場を完全に省いたのである。1人の劇評家が指摘したように、このことによって「ロレンスが『ダビデ』のクライマックスとするつもりであったと想像される「場」」がその戯曲から奪われたのである¹⁸⁹⁾。ケンブリッジの上演はロンドンの上演よりも大体において好意的な批評を受けた。「それは偉大な戯曲ではないが、私はその戯曲に感謝している。その戯曲には驚くほどに美しい瞬間と、非常にマンネリに陥ってはいるが、すばらしい散文の数節がある」と、『ガウンズマン』の劇評家は書いている。しかし基本的な批判はロンドンでなされた批判と同じままであった。『ケンブリッジ・クロニクル・アンド・ユニヴァーシティ・ジャーナル』は劇団が「上演に適さない戯曲を勇敢に成功」させようとしたのを賞賛する一方で、ロレンスを「隠喩が華やか過ぎる」と批判し、「その戯曲が、特に後半のいくつかの「場」で、短縮されるならば、かなり改善されるだろう」と、指摘した。ロレンスに公平を期するために言えば、ロレンス自身はこのことが必要であるのを分かっていたのである。1927年にロレンスはマックス・モーに——モーはその戯曲のロレンス自身のドイツ語訳のベルリンでの上演を準備しようとしていた——「もちろん戯曲全体は文学的過ぎて、言葉が多過ぎる」と手紙に書いていた。ロレンスは「おそらく彼らは——そして——あなたは——それを切り詰めて形を整えることができるでしょう」と、思っていたのである（『書簡集』vi. 204）。しかしながら、知られてい

る限りでは、『ダビデ』は1933年以降プロの劇団によって公演されたことはない。

1933年にカーティス・ブラウンの作った5つのタイプ原稿のうち、3つの原稿が劇場経営者の手に渡ったが、たった一度の上演が行われただけであった。1933年12月28日から1934年2月19までの間に、ロンドンのマネージャーのメルキョー・レンジェルは『回転木馬』と『既婚者』を渡されて、その2篇の戯曲を検討した。レンジェルはロレンスを賞賛して、その2編の戯曲は面白いと思い、その2編の戯曲は、ヨーロッパ大陸の観客には向かないだろうが、「適切に脚色したら」イングランドの舞台ではうまくいくのではないかと示唆した¹⁹²⁾。しかし、一番うまくいく可能性のあるのは『嫁』であるように思われた。1934年に計画された未出版の戯曲集に『嫁』を含める計画が全然なかったのは、多分これがその理由であろう。残っているカーボンコピーのタイプ原稿の、リボンコピーか、もう1つのカーボンコピーかのどちらか（以後はTCC I）が、1933年10月に、劇場経営者、俳優兼劇場支配人およびプロデューサーでもあるレオン・M・ライオン（ライオンはチャーリング・クロスでプレイハウス劇場（Playhouse Theatre）を経営していた）に送られた¹⁹³⁾。ライオンは『嫁』がそのままではロンドンの劇場には向いていないと思ったが、しかし作家のリチャード・ヒューズにその脚色に取り組むように依頼した。フリーダはなぜ『嫁』が脚色される必要があるのか理解できなかったが、ロレンス・ポリンジャー（その時はカーティス・ブラウンのところでロレンスの遺産の問題を取り扱っていた）はフリーダに「もし『嫁』がいつか上演されるとしたら、『嫁』はある箇所では修正される必要があります」¹⁹⁴⁾とはっきりと言ったのである。ヒューズはその戯曲を18ヵ月以上持っていたが、その仕事を結局することができなかった。それで1936年4月にライオンは『嫁』を作家のウォルター・グリーンウッドに手渡した¹⁹⁵⁾。『嫁』はグリーンウッドによって急いで修正され、タイプされて、『私の息子は私の息子』と題名を改められて、1936年5月26日にライオンのプレイハウス劇場で上演され、そのあとでそれは巡業に出た。それは——まさに契約通りに——「ウォルター・グリーンウッドによって完成されたD.H. ロレンスの無修正の戯曲」¹⁹⁶⁾だと宣伝された。実際には、グリーンウッドがしたのはパーディ夫人、パーディ夫人の娘のバーサおよびジョー・ギャスコインのような登場人物の運命を明確にする書き加えをしたという意味で、その戯曲を「完成した」だけ

であった¹⁹⁷⁾。契約書には「グリーンウッド氏は、認可を受けた人が前記の戯曲の成功のために必要であると当然考える変更を、原文の原稿の精神と意図にできるだけ忠実に最後までする」¹⁹⁸⁾と規定されていたのである。グリーンウッドがしたメロドラマ風の結末はおそらくライオンが望んだものであろう。

第2幕の終わりと最後の場面の終わり頃にそういった書き加えをしているということを別にすれば、グリーンウッドは、残っているタイプ原稿のプロンプター用台本から明らかなように、ロレンスの原文に対して意外にほとんど手を加えなかったのである。グリーンウッドはいくつかのささいな削除をし、筋とダイアログを少し短くして、方言を2,3か所修正した（例えば、‘stall’という語はなくなっている）。平易にすることはリハーサルでも続けられた。例えば、プロンプター用台本が示しているように、グリーンウッドは最初‘scrape your tabs’（‘search your ears’の意）という句を最初は元のままにしておいたのだが、それは‘scrape your breeches’に標準化された。しかしながら、劇評家たちは自分たちが見ているものはグリーンウッドによって「完成された」——すなわち、最後の「幕」がある戯曲を一ロレンスの戯曲であると思い込んでいて、その通りに反応した。1人の劇評家は「その戯曲はテーマが次々に変わって、統一がなく、ギャスコイン夫人を第2幕の間じゅう登場させないでおくのは明らかに間違いであった」と、言っている。5月27日の『イーヴニング・スタンダード』は次のように述べている。

その戯曲には最初の2つの「幕」（まく）のどのせりふにもみなD.H. ロレンスが表されていて、ウォルター・グリーンウッドはロレンスよりもはるかに劇作家であるので、第3幕を真に迫った、生きているものにうまく仕上げた。それはD.H. ロレンスの序文付の1幕ものの演劇である。

実際には、書き加えられなければ、純然たる（少し削除されたとしても）ロレンスの書いた40ページからできている最後の「幕」（まく）に、グリーンウッドは8ページを書き加えただけなのである¹⁹⁹⁾。

グリーンウッドの修正にもかかわらず、俳優たちは依然として方言のことでかなり困っていた。方言は大部分元のままであったからである。『イーヴニング・スタンダード』の劇評家は「執拗に忍び込んできて、ルーサーの妻を演じるサラ・アースキン嬢がとうとう

あからさまに出してしまった純粋なケンジントンことばの数節を開きのがす人は誰もいなかった」と、述べている（10 ページ）。その戯曲は 1936 年 8 月にゴールドーズ・グリーン・ヒポドローム（Golders Green Hippodrome）と、11 月にマンチェスターのパレス劇場（Palace Theatre）で再上演されたけれども、どちらの会場でも大して成功はしなかった。

『嫁』についての出版交渉が長引いている間に、『炭坑夫の金曜日の夜』がカーティス・ブラウンのタイプ原稿から出版された。セッカーが『炭坑夫の金曜日の夜』を出版するための話し合いは 1934 年 1 月に始まり、フリーダ・ロレンス（1932 年 12 月からロレンスの遺産のただ一人の受取人）は 1934 年 2 月 8 日に契約書に署名した²⁰¹。セッカーの『炭坑夫の金曜日の夜』の出版もまた演劇協会による『炭坑夫の金曜日の夜』の上演とあわせたものであったが、演劇協会はその上演を実現することができなかった。『炭坑夫の金曜日の夜』もまたいくつかの雑誌に掲載を申し込んだが、掲載されることはなかった。1934 年 6 月に『炭坑夫の金曜日の夜』が出版される 2 ヶ月前に²⁰²、エドワード・ガーネットは『炭坑夫の金曜日の夜』の序文を書いた（付録 I に印刷）。ガーネットは「家庭生活のこの劇的記録の芸術的技量と深い感動を与える率直さの確かさ」を指摘して、心を打たれる冒頭の場面と終わりの場面を賞賛したが、しかし概して『炭坑夫の金曜日の夜』は「ちょっと無邪気過ぎて、散漫過ぎるし、集中力と意外性が足りな過ぎる」と思っていたのである。

『炭坑夫の金曜日の夜』の最初の書評は、アイルランドの劇作家ショーン・オーケイシーによるもので、『ニュー・ステイツマン』に載った。彼はその戯曲の雰囲気、感情、迫真性、性格描写、ユーモア、詩的情趣の特質を簡潔に要約している。オーケイシーにとって『炭坑夫の金曜日の夜』の欠点は劇の筋の運び、柔軟性、ペースが欠けていることであった。それにもかかわらず、オーケイシーは「生活の不安定な状態」、「生活の苦労」を描いた戯曲として『炭坑夫の金曜日の夜』に深い感銘を受けたのである。『炭坑夫の金曜日の夜』は「イングランドの劇場支配人たちが駆け出して行って出迎えるような」戯曲でないことは確かであるとオーケイシーは言うが、『炭坑夫の金曜日の夜』の価値を認めるがゆえに、オーケイシーは当時のイギリスの演劇界への攻撃に転じた。

それが最初に書かれた時、上演する価値があった戯曲が

ここにある。そして、その戯曲は今も上演する価値があるのだ。ロレンスが、その戯曲には必要であり、なお受けるだけの価値があった助成を受けていたなら、イングランドには偉大な劇作家が生まれていたであろう。その戯曲は人目につかないように隠されていて、誰もその戯曲については知らなかったなどと言っても何にもならないのだ。要はだれもがその戯曲について知っていたとしても、その戯曲は上演されはしなかっただろうということだ。というのはその戯曲は本当に立派すぎて、たくさん金貨が劇場支配人の思う通りに手に入るのを保証しないのだから。命が消えたとともに、芸術がイングランドの舞台から消えてしまったのだ。²⁰³

オーケイシーの嘆きは「彼（ロレンス）は演劇界に入ったのに、演劇界は彼を受け入れなかった」という言葉で終わっている。『ロンドン・マーキュリー』の 8 月のオズバート・バーデットの短い書評もまた、概して好意的で、『炭坑夫の金曜日の夜』は読むためではなく、上演するために書かれたのは確かで、ロレンスの戯曲の才能は一目瞭然であると、バーデットは主張している。しかしバーデットは、自伝的特徴が目立ち過ぎて、「この戯曲に人目を引く印象的な「幕切れ」、すなわち緊張した大詰があるか」という意味では、第 3 幕にはそのような大詰があるけれども、この戯曲にはないので、この戯曲は上演には適さない、また「筋には……統一がなく、関心を引くクライマックスもない」（376 ページ）という点で、ロレンスの未熟さが明白であると、考えている。

出版されたロレンスの戯曲の次の 2 篇の戯曲は『ノアの洪水』、『高所』という断片であった。『ノアの洪水』の第 2 稿の原文はロレンスの死後に出版された作品集『不死鳥』に印刷されている。『不死鳥』はヴァイキング社とハイネマン社が 1936 年に出版したのである。しかしながら、『不死鳥』の書評はどれも『ノアの洪水』に特別な注意を払わなかったし、長い方の第 1 稿の原文は出版されないままであった。『高所』の第 1 場の大部分は 1938 年にスパッド・ジョンソンの雑誌『ラフニング・ハウス』に初めて出版された²⁰⁵。

しかしながら、この 10 年間には、1939 年 3 月 22 日と 25 日に、モーリー・アダルト・スクール・プレイヤーズ（Morley Adult School Players）というアマチュアのグループによって、ヨークシャーのモーリーで『炭坑夫の金曜日の夜』の初公演というもう 1 つの初めての上演があっただけであった²⁰⁶。『炭坑夫の金曜日の夜』は毎年行われるブリティッシュ・ドラマ・リーグ・

フェスティバル (British Drama League Festival) で、そのグループが演じた劇であった。『モーリー・オブザーヴァー』の評者は、『炭坑夫の金曜日の夜』はロレンス自身の体験を忠実に表現したもので、第3幕を別にすれば、『炭坑夫の金曜日の夜』には「ごくわずかな劇的なもの」もなく、「読者が炭坑夫の金曜日の夜がどのようなものであるかを知っていれば、読者はこの戯曲が何についてなのかが分かる」^[207]と、『炭坑夫の金曜日の夜』は「写実派」の極端な例と見なすことができると、考えていた。アーネスト・ランバートの役を演じた俳優は、「私たちがその劇を上演した時に大評判になって、その結果劇場は大入り満員になりました。4通の電報を受け取りましたが、3通はバーナード・ショー、アシュリー・デュークス、バリー・ジャクソン卿からで、最後の電報はその時ハリウッドにいたフリーダ・ロレンスから来ました」^[208]と、その時のことを思い出している。

カーティス・ブラウンが出版社を世話することができなかった戯曲は2篇だけで、それは『回転木馬』と『既婚者』であった。その2つの戯曲の原文は1933年にタイプされ、1934年に再びタイプされて、そのタイプ原稿はニューヨーク支店に送られたけれども^[209]、1930年代半ばにはポリンジャーはそれらの戯曲を売る望みをあきらめたようである。フリーダはその2篇の戯曲の原稿を『バーバラ争奪戦』の原稿と一緒に、ニューメキシコの牧場へ持ち帰った^[210]。『既婚者』の原稿は完全でなく、その最初の5ページは、カーティス・ブラウンが1933年に最初にタイプ原稿を作った時には、紛失していて、『既婚者』に残っている原文はみな冒頭の場面の初めが欠けている。1939年秋に、フリーダはいくつかの未出版の手書きの原稿を雑誌に出版する可能性について、『ヴァージニア・クォーターリー・レビュー』の編集長ロレンス・リーに相談して、1939年10月にリーに1篇の短編（「デライラとパークムショー氏」）と3篇の戯曲を提供した。リーは4篇全部を見せてくれるように頼んだが、しかしフリーダは「それぞれ1つの原稿しか」持っていないので、当然リーに原物の手書き原稿を送るのをいやがった。フリーダがその内の1つを彼女自身の手書き原稿で作りはじめたのはこの段階であったかもしれない^[212]。しかしながら、フリーダがその雑誌のためにタイプコピーを作ってもらわざるをえなくなると、15ポンドの小切手がそのタイプ代を賄うために彼女に送られた。フリーダはそれらの戯曲についてリーに「たぶんロレンスは晩年にそれらを再び見たら、書き直したで

しょう。1篇は「バーバラ争奪戦」、もう1篇は「回転木馬」という戯曲で、3番目の戯曲は6ページ目から始まり、その題名は紛失しています——おそらく私は思い出すことができるでしょう……その上タイプするのはここではそれほど容易ではありません。タオスは小さな町ですが、すぐに誰かを見つけられると思います」と、話していたのである。フリーダは2人のタイピストを見つけて、そのタイピストたちへの支払いのレシートの日付は1940年1月3日となっている^[213]。

『ヴァージニア・クォーターリー・レビュー』は未出版の作品のみを出版することを誇りにしていたので、それで4篇のどれかが他のどこかの雑誌に以前に掲載されたかどうかを調べ始めた。リーはまた4篇全部を含める1冊の本についてニューヨークの出版社と交渉を始めることを提案した。リーはさらにその4篇の戯曲が出版される見込みについて調べるようにも提案した。しかしながら、ロレンスの目録編纂者であるエドワード・マクドナルドは『バーバラ争奪戦』は以前に出版されているのを説明した^[214]。リーはフリーダに4篇の内の他の3篇を出版するのに275ドルを払うと申し出て、題名のページが紛失している戯曲の題名（「少し愛して」）を提案した。フリーダはこれに同意したが、しかしその戯曲が出版された時、それは『既婚者』という正確な題名で出版されたのである。それはロレンスが手紙（『書簡集 I. 509』）でかつて述べた題名をフリーダが思い出したか、あるいはだれかがオルダス・ハクスレー版のロレンス書簡集にその戯曲への言及があるのに気づいたからである^[215]。『既婚者』と『回転木馬』は『ヴァージニア・クォーターリー・レビュー』によってタイプし直されて、これらの新しいタイプ原稿は活字を組む原稿として使われた。『既婚者』は『ヴァージニア・クォーターリー・レビュー』の1940年の秋号に出版され、『回転木馬』は1941年冬に『ヴァージニア・クォーターリー・レビュー』のクリスマス号の付録として出版された。

1941-64. 無視される

戯曲だけでなく、ロレンスの作品はすべて1940年代の間広範囲にわたって無視されて、作品の多くは絶版になった（紙が大戦中不足して、再版は難しくなったのである）。ロレンスを劇作家として批評した数少ない人の中に劇評家のエリック・ベントリーがいた。ベントリーは——『D.H. ロレンスの戯曲集』に完全に

基づいて——ロレンスは「3篇の戯曲を書いたが、そのどれも面白くない」と述べているが、しかし「多くの偉大な芸術家たちは現代の劇場のために書いてはいいても、偉大な演劇を生み出してはいない。実際は、現代の重要な作家はほとんど——オーデンもジョイスもロレンスもヘンリー・ジェイズも——自分はとても不幸な結果しか持たない劇作家だとうぬぼれているのだということには賛成するだろう」とも述べている。1950年にロレンスの戯曲の価値を評価して、リチャード・オールディントン は次のように書いている。

『ダビデ』を除いて、ロレンスの戯曲はほとんど無視してもよいと思うと私は言わざるをえない。ロレンスに真の「劇のこころ」があったとは思われない。戯曲はロレンスの文学表現形式ではなかった。『炭坑夫の金曜日の夜』の内容は『息子たちと恋人たち』においてもっと効果的に描かれているように思われるのは確かであるし、ややよりすぐれている『ホルロイド夫人やもめになる』のテーマは『菊の香り』という短編でもっと劇的に描かれている。²¹⁸⁾

1篇のロレンス戯曲の1回だけの公演があったようである。BBC ラジオのホーム・サービス（Home Service）が1953年9月14日に『ホルロイド夫人やもめになる』を放送したのである。『リスナー』のJ.C.トレウィンはそれに冷淡であった。その戯曲は「断固として上演され、演出された」のだけれども、トレウィンはその戯曲が「悲しみに満ちている」と思い、「死体埋葬準備についてのおしゃべり（と私は思う）」と解釈した²¹⁹⁾。

それ以外は、ロレンスの戯曲に言及することは引き続き断続的であり、言及するにしても正確な情報の不足に苦しむことがしばしばであった。戯曲の数についても、戯曲が書かれた順序についても確定できないでいた。戯曲について初めて概説したのはハリー・T・ムーアの先駆的な本である『D.H. ロレンスの生涯と作品』である。ムーアは6篇の戯曲と1篇の戯曲の断片を列挙して、短い要約をしている²²⁰⁾。マーク・ショラーは、ほとんど完全に忘れられている戯曲を取り戻す目的で1956年にアメリカで『ホルロイド夫人やもめになる』を再版させたが、それにもかかわらず、それは「確かに」偉大な戯曲ではないと断言している²²¹⁾。そしてまたアメリカで、『ダビデ』がマーヴィン・ハルヴァースン編集の『宗教劇』という選集に掲載された。ハルヴァースンは『ダビデ』が「詩的で、

忘我状態になるほど宗教的である」と断言したが、しかしハルヴァースンはロレンスが「宗教劇の現代の運動とは関係ない立場にある」²²²⁾と、主張した。1940年代と1950年代初めのイギリスの劇壇は詩劇と古典劇の復活に主に関心があり、20世紀初頭から始まったリアリズム様式の戯曲は忘れ去られていたのである²²³⁾。

ロレンスの戯曲に関する、依然としてまだ十分には理解していないが、広範囲にわたるか又は信頼できる学問的な評論が1960年についてに発表された。しかしながら、A.E. ウォーターマンは戯曲そのものの劇としての特徴よりはむしろ、思想、テーマおよび戯曲とロレンスの小説との類似点を強調している。ロレンス自身の自分の戯曲に対する態度については、「ロレンスは自分の劇作品をあまり真面目には考えていなかった」と、ウォーターマンは間違った説明をしている。そして——出版された戯曲がしばしば好意的な書評を受けていたにもかかわらず——ウォーターマンは「批評家たちはたいていロレンスの戯曲を無視した。批評家たちがロレンスの戯曲はどれもあまりいいものではなく、演劇の技法上もなんら新しいものを含んではいないとするのはもっともなことだ」と、ロレンスの戯曲についての批評家の決まり文句を繰り返しているのである²²⁴⁾。

しかしながら、1950年代の半ばから、イギリスの演劇の復活は着々と勢いを増して、リアリズムの伝統の戯曲に対する新たな関心呼び起こしたが、その戯曲の多くは労働者階級の生活についての戯曲（しばしば批判的となった「台所調の劇」（訳注：主に1950年代から60年代にかけて、労働者階級の家庭生活を極端なまでリアルに描いたイギリスのリアリズムの戯曲）であった。その上、テレビドラマもまた徐々に増加していく視聴者に影響を与え、主に自然主義的な方法を用いていた。1960年代の初頭までに、ラジオ、テレビおよび劇場はロレンスのような作家を20世紀の重要な劇作家として受け入れる準備をし始めていた。一方、1960年の11月の『チャタレイ卿夫人の恋人』の裁判によって、ロレンスの名前と作品は彼の死後前例がないほど一般の人々に知れ渡った。

1961年に『ホルロイド夫人やもめになる』がテレビで上演されたロレンスの最初の戯曲となったのである²²⁵⁾。『TV タイムズ』の紹介資料——『チャタレイ卿夫人』の裁判の被告側のいくつもの陳述の観点を転載している——には、『ホルロイド夫人やもめになる』は「一生非常に道徳的な作家であった男性によって書

かれた、道徳的な作品であり、ノッティンガムの炭坑町に基づいている。そこでロレンスが生まれ、人間の中に見たいと思った尊厳についての理解を深めた」と説明された。戯曲を「コマーシャルなしの1時間もの」に変えたということで、その脚色は非常に評判がよかった。『デイリー・テレグラフ』はそれを当時の演劇と直接結びつけて、「『台所調の』D.H. ロレンス」と形容した。『ザ・タイムズ』は「きびきびした、表現にむだのない、本当に劇的な」ダイアログがあり、「『息子たちと恋人たち』の時代の典型的なロレンス」とみなしたのである。『オブザーバー』は「ロレンスの特色である秘められた感情の底流を暗示するあの渦巻く特質」のあるダイアログを賞賛した²²⁷⁾。『ダビデ』もまた1963年に『現代演劇』のジョージ・A. パニチャスの論文で初めて長々と学問的に論じられた²²⁸⁾。しかしそれは劇作家としてのロレンスの名誉回復にはつながらなかった。これまでのところ劇場でのロレンスの戯曲の復活はなかった。

復活 1965-95

1965-6. 『炭坑夫の金曜日の夜』の上演、『嫁』を含む『戯曲全集』の出版、短編のテレビでのドラマ化

ロレンスの劇作家としての批判を決定的に変えたものは、『炭坑夫の金曜日の夜』のプロによる最初のとても重要な上演であった。ロイヤル・コート劇場(Royal Court Theatre)の副演出家のピーター・ギルは『ホルロイド夫人やもめになる』の1961年のテレビ版について「驚きの報告」を聞いて、『ホルロイド夫人やもめになる』を日曜日の夜に舞台装置なしで上演するのを仮に計画した。(舞台装置なしはイングリッシュ・ステージ・カンパニー(English Stage Company)の通常の慣例であり、利益にはならないと思われる新しい作品を、たった1回の上演で、試験的に試していた。)ギルは『ホルロイド夫人やもめになる』の原文のコピーを取り寄せた。しかし届いたのは、間違っていて、『炭坑夫の金曜日の夜』のコピーであった——ギルは『炭坑夫の金曜日の夜』に非常に感銘したので、代わりに『炭坑夫の金曜日の夜』を上演することに決めた。それは8月8日の日曜日の上演で、とても評判がよかったので、次の日曜日に再び上演された²²⁹⁾。『ザ・タイムズ』の劇評家はその戯曲の構成は単純である——「ロレンスが長い間の体験から知っている人々の生活の夜を単に描写したもの」——と批判した

が、しかしそれが「具体的な形とサスペンスをもたらすためにありふれた家庭の出来事を創意に富んだ利用の仕方」をしているのを認めて、ロレンスがすべての登場人物を扱っている公平さを強調している。『デイリー・テレグラフ』のエリック・ショーターはその戯曲が「場面の信頼できる観察で活気」あふれており、「その戯曲の家庭に対する捉え方が注目すべき劇的洞察力を示している」と賞賛し、高く評価している。ショーターはさらに「演技するように勇気付ける、演劇とダイアログに対する真のセンス」に注目した。2年後に、『ザ・タイムズ』はその上演は「劇作家としてのロレンスは無視して差し支えないという考えを打破した」と、主張することになるのである²³⁰⁾。

この大きな影響を及ぼした上演の4ヵ月後に、幸運な偶然によって、ロレンスの省略してない戯曲の8篇全部と2篇の戯曲の断片がハイネマン版の『戯曲全集』で出版されたのである。この時がロレンスの戯曲が出版されるのにほとんど一番いい時であったのかもしれない²³¹⁾。『嫁』はついに出版され、雑誌に掲載されただけの3篇の省略なしの戯曲も今や広く読むことができるようになり、他の4篇の戯曲も再版された²³²⁾。ハイネマン版の『戯曲全集』もまた多くの人によって論評された。ハイネマン版の『戯曲全集』の戯曲は広く熱烈に歓迎され、ロレンスの戯曲が劇場で上演されるのが促されることになるかもしれないと大いに期待されたのである。『オブザーバー』のアービング・ウォードルはロレンスが「すばらしい、事実上即したダイアログ」を書き、その戯曲が「家庭内の衝突と家庭の安らぎのみごとな場面」をいくつか含んでいるのに注目した。ウォードルはその戯曲のいくつかを「表現形式が貧弱」な故に批判し、ロレンスは自分が軽蔑していた劇場の慣習から解放されることができなかったとみなした。しかし、ウォードルはまたロレンスは「地方の演劇復活のためにいい時に生まれたが、間違った場所に生まれた。数マイル北に生まれていたら、マンチェスターのレパトリー制(訳注:1つの演劇劇団が一定数の演目を交互に上演する方式)運動にのめり込んでいただろう」²³³⁾と、主張した。(ロレンスが1912年にペイン(訳注:ベン・アイデン・ペインは俳優でプロデューサー;マンチェスターのレパトリー制運動にかかわっていた)に会えなかったということは、間違いであった)。『スペクテイター』(1966年1月7日)のトニー・タナーの書評は「生き生きとした即時性と賞賛せずにいられない本物であることの瞬間」、「人々と環境についての鋭敏な、注意深い、洞察

力のある感じ方」を発揮しているのを取り上げた。しかしタナーは、初期の戯曲は「呪文を唱えるようなレトリック」で「魅惑的な、とても信じられない作品」（16ページ）である後期の『ダビデ』とは非常に違っていると、主張している。アナイス・ニンは、『ニューヨーク・タイムズ・ブック・レビュー』（1966年4月10日）で、その戯曲と小説を比較している。ニンは、戯曲ではロレンスは筋、ダイアログ、および「表面にはっきりと示されて、直接表現されるものに忠実であること」の必要性を重んじ—そしてその結果、「彼は喜んで瞬間、瞬間の真に迫った生き生きとした描写をしている。彼は小説の慣習と決別したように、演劇の慣習と決別しようとはしていない」²³⁴⁾として、感情および彼の小説の特徴である無意識を深く探り、暴露するのを避けようとしたと、述べている。こういった判断は間もなく劇場で観客の体験によって試されることになったのである。一方劇作家としてのロレンスに対する関心の復活は長い間遅れていたが、その復活を助けるちょうどいい時に、グラナダテレビが1966年1月から1967年6月までの間、ロレンスの短編の13篇をテレビ劇として放映した。その短編が劇化と映画化に非常によくかなっていることが分かり、ロレンスの劇作家としての才能は非常に広範囲の観衆にすぐに知られるようになった²³⁵⁾。

原注

- 161) 演出家のプロンプター用台本——1914年のダックワース版の1部——には舞台照明の書き及び登場人物たちの配置と所作についてのメモが含まれている。せりふ用の版には数語が赤鉛筆と黒鉛筆で付け加えられ、約100行が削除されている（ノッティンガム大学蔵）。その討議がプログラムに書き留められていた。
- 162) 『書簡集』v. 604. Rolf Gardiner (1902-71), Land Service Campsの農場経営者、森林監督官、幹事。1926年12月13日の手紙にある（Nehls, iii, 121及び注143）。
- 163) 1932年8月6日の*Time and Tide* (London), p. 863. 'The Barber of Fleet Street' は、例えば、Frederick Hazeltonの*Sweeney Todd: The Barber of Fleet Street: Or The String of Pearls*のような*Sweeney Todd*ジャンルらしく気取った、メロドラマ風の戯曲のことを指す。フリーダの報告ではDHLはショーの論評を「とても喜んで」、「彼（＝ショー）はダイアログについて知るべきだが、とても寛大だ」と述べたと、いうことである（'Lunch with Mr and Mrs Bernard Shaw', *Memoirs* 147）。
- 164) Carswell, *The Savage Pilgrimage*, p. 135.
- 165) 1926年12月14日, p. 12. Sagarに再版。
- 166) Ivor Brown, *Saturday Review*, cxlii (18 December 1926), 767-8; Desmond MacCarthy, *New Statesman*, 18 December 1926, p. 310; *Outlook*, 24 December 1926, p. 629. 1926年の更なる劇評は*Era*, 15 December, p. 5; *Stage*, 16 December, p. 19; *Nation and Athenaeum*, 18 December p. 422; *Observer*, 19 December, p. 13; *Sunday Times*, 19 December, p. 4; *Graphic* (London), 25 December, p. 1093; J.T. Grein, *Illustrated London News*, 4 June 1927, p. 1010.
- 167) 1926年12月20日のフィリス・ホイットワース宛ての未出版の手紙（『書簡集』viiiに含まれる予定）。
- 168) 脚注153参照。そのリプリント版はもっと小さな紙に印刷されたが、活字の配置がリプリントする過程で変えられたいくつかの誤りによって明らかに示されているように、E1からの組み置き活字を使用した。コンマが13, 36, 97ページで抜け落ちていて、1つの重大な誤りが76ページで生じた。E1では'is there no other'と書いてあるところが、リプリント版では'here is oi outhter' ('u'は上下逆さの'n')。これらの誤りはすべて1930年のセッカーの3シリング6ペンスのNew Adelphy Library リプリント版に引き継がれた。
- 169) 1927年4月30日のフィリス・ホイットワース宛ての未出版の手紙（『書簡集』viiiに含まれる予定）。
- 170) *The Plumed Serpent*, ed. Clark, p. xlv; *D.H. Lawrence's Manuscripts*, ed. Squires, p. 174.
- 171) *The Savage Pilgrimage*, p. 253: 1927年5月27日ごろのフィリス・ホイットワース宛ての未出版の手紙（『書簡集』viiiに含まれる予定）。
- 172) 1927年5月13日のフィリス・ホイットワース宛ての未出版の手紙（『書簡集』viiiに含まれる予定）。
- 173) プログラムの注（[v] ページに「その戯曲を一回の公演の制限時間内におさめるためにプロデューサーは、残念ながら、iii場とx場の全部を割愛せざるを得ませんでした」と説明されている（ノッティンガム大学蔵）。
- 174) Anne Millicent Beveridge (1871-1955), スコットランドの画家。
- 175) それ以上の劇評は1927年5月26日, 16ページの*Stage* 及び1927年5月25日, 5ページの*Era*。
- 176) Christopher Hassall, *Edward Marsh: Patron of Arts* (1959), p. 547. プログラムの注（[v] ページ）には「止むを得ない事情のため、ピーター・クレスウェル氏が急にサウルの役を演じている」

- と書いてあった。「原初の甲虫」は *The Plays D.H. Lawrence* (Cambridge University Press, 1999) の 489: 38 にあり、ダビデは *The Plays D.H. Lawrence* の 490: 23 から「詩篇(旧約聖書中の一書)」第8篇を歌い、第6節は「あなたはあなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、万物を彼の足の下に置かれました」(訳は『聖書』、いのちのことば社、1981を参照した)となっている(欽定約聖書)。投げやりの挿話は *The Plays D.H. Lawrence* の 491: 7-8 と 18 で起こり、「処女であるイタチ」は *The Plays D.H. Lawrence* の 520: 15 で起こる。サウルの娘たちと侍女たちは第9場と第10場で「ルルーアーリールルー」をさまざまに変えた曲を歌い、‘tootleoo’は‘goodbye’のその当時の俗語であった。
- 177) 1927年6月21日のS.S. KotelienskyのSydney Waterlow宛ての手紙(ニュージーランド国立図書館蔵)、1927年5月28日、261ページの*Nation and Athenaeum*。
- 178) 1927年5月29日、6ページの*Sunday Times*, Jean Racine (1639-98)の悲劇*Phedre* (1677)で、TherameneはHippolyteがどのように殺されたかについて長々と報告する。
- 179) *Contacts* (1935), p. 73.
- 180) Programme, p. [iii]. 同じ討論会が1926年の『ホルロイド夫人やもめになる』の上演のあとでも主催された。前記参照 (p. lxxii)。
- 181) 1927年5月27日頃の手紙(『書簡集』viiiに含まれる予定)。ロレンスはフィリス・ホイットワースに*Mornings in Mexico*を1冊「1927年5月/『ダビデ』の記念に/D.H. Lawrenceより/ホイットワース夫人」と献呈の辞をつけて贈呈した(Bloomsbury Book Auctions Sale, 19 June 1997, Catalogue 304, Item 294)。
- 182) 1932年3月8日のカーティス・ブラウンのファイル(テキサス大学オースティン校蔵)
- 183) *Frieda Lawrence and her Circle: Letters from, to and about Frieda Lawrence*, ed. H.T. Moore and D.B. Montague (1981), p. 32.
- 184) Roberts A65, 1933年出版、価格7シリング6ペンス。初刷りは2千部であった。1938年2月ハイネマンにより再版。1933年7月20日、497ページの*The Times Literary Supplement*, 1933年8月17日、425-6ページの*New English Weekly*のD.G. Bridson, ‘Lawrence as Dramatist’参照。
- 185) 1933年3月24日、15ページの*Daily Telegraph*。
- 186) J. and E. Bumpus, Ltd (1933)。
- 187) Roberts C213, *Argosy*, xiv, 68-90. それは*Complete Plays*の5番目の戯曲であった。
- 188) フリーダの1933年10月5日のマクラウド宛の手紙, Festival Theatre Programme, 2ページ。
- MacLeod (1903-84) は俳優、演出家、作家、キャスターで、1933年から1936年までFestival Theatreを経営していた。
- 189) 1933年10月28日、19ページの*Gownsmen*。1933年10月24日、6ページの*Cambridge Daily News*の公告参照。
- 190) 1933年10月28日、19ページおよび1933年10月25日、2ページ。
- 191) アメリカの学生による上演が1938年5月12日にLos AngelesのOccidental Collegeで行われた。演出はKurt Baer Von Weisslingenで、野外のHillside劇場で上演された。Frieda LawrenceとAldous Huxleyの2人はその公演を見に行った。彼らの反応は知られていない(*D.H. Lawrence's Manuscripts*, ed. Squires, p. 174 および注1)。
- 192) Curtis Brownのファイルの注(テキサス大学オースティン校蔵)
- 193) 1930年代半ばちょっと前の演劇の専門家としてのLionの説明に関しては、Ethel Manninの*Confessions and Impressions* (1930)のxi章参照。
- 194) Curtis Brownのファイルにある手紙(1936年頃)(テキサス大学オースティン校蔵)。Hughes (1900-76)は劇作家として、また彼の書いた*A High Wind in Jamaica* (1929)という小説で有名であった。
- 195) Greenwood (1903-74) は労働者階級の生活を描いた有名な小説*Love on the Dole* (1933)の作家であり、その小説はRonald Gowがした1934年の舞台用脚色で大成功をおさめていて、「1935年の終わりまでには100万人の人々がその戯曲を舞台で見ていた」(Ray Speakman, ‘Introduction’ to Ronald Gow and Walter Greenwood, *Love on the Dole*, 1986)。GreenwoodはDHLにかなり共鳴していて、Huxley版のDHLの*Letters*からの引用がGreenwoodの小説の序文となっていた。
- 196) ‘Agreement / Re: “DAUGHTER IN LAW”’ between ‘MRS. FRIEDA LAWRENCE and LEON M. LION Esqre.’, 15 May 1936, clause (8) (University of Nottingham 蔵)
- 197) Greenwoodの版ではPurdy夫妻には夫妻が望む40ポンドが支払われる。そのお金はまだ生まれない自分の孫を自慢しているMrs Gascoyneによって用意される。Greenwoodの版では、Joeの運命もまた明確にされて、Joeは、劇の終わりで暴動によって肢体が不自由になり、——どうもLionの与えたメモに従ったようだが——彼の母の世話に委ねられる。
- 198) 注196のclause (9)として。Sagar 298-300に論じられているその資料のいくつかは(Lionのメモも含まれている)、かつてはSalford大学の所有であったが、今は紛失している。
- 199) *My Son's My Son*, prompt copy (University of Sal-

- ford 蔵), 1.6; D.B., *Evening Standard*, 27 May 1936, p. 10. 1936 年の他の劇評は, *The Times*, 27 May, p. 14; James Agate, *Sunday Times*, 31 May, p. 6; H.H., *Observer*, 31 May, p. 13; A.V. Cookman, *London Mercury*, xxxiv (July), 249-50. である。G[eorge]. W.B[ishop], *Sunday Times*, 24 May 1936, p. 6 も参照。
- 200) Sager 300 参照。Greenwood の原文は, 1937 年 3 月 31 日 Stockholm の Blancheteatren で初めてスウェーデン語で *Min son är min* [*My son is Mine*] として上演された。それはスウェーデンの地方の劇場を巡業して, 1938 年 4 月までに 70 回以上上演された (Marko Modiano, 'An Early Swedish Stage Production of D.H. Lawrence's *The Daughter-in-Law*', *D.H. Lawrence Review*, xvii, Spring, 1984, 49-50)。
- 201) テキサス大学オースティン校蔵。
- 202) Roberts A69. 5 シリングで出版され, 初刷りは 1,500 部。それは *Complete Plays* の 7 番目の戯曲であった。
- 203) 1934 年 7 月 28 日の, 124 ページ。 *Blasts and Benedictions: Articles and Stories by Sean O'Casey*, ed. Ronald Ayling (1967), p. 222-5 に再版。
- 204) Roberts A76, pp. 811-16. それは *Complete Plays* の 10 番目の戯曲であった。
- 205) Roberts C222; 20 号 (1938 年夏), 12-35 ページ。前記 lxii ページ参照。それは *Complete Plays* の 9 番目の戯曲であった。
- 206) John T. Kirk による演出。カリフォルニア大学バークリー校にある, その戯曲のタイプ原稿 (TCC I) を含んでいる書類挟みには, Kirk からの手紙およびこの上演にかかわるプログラムと新聞の切り抜きが含まれている。
- 207) 'Adult School Presents "World Premiere"', 24 March 1939, p. 4; cf. *Yorkshire Evening News*, 23 March 1939, p. 3.
- 208) George W. Atkinson の 1986 年の編集者への手紙。
- 209) Curtis Brown のファイルにあるメモ (テキサス大学オースティン校蔵)。
- 210) L.C. Powell's *The Manuscripts of d. h. lawrence: A Descriptive Catalogue* (Los Angeles, 1937) がその当時 Frieda が持っていた原稿についての情報 (完全には信頼できない) を与えてくれる。
- 211) University of Virginia にある手紙。
- 212) 脚注 228 参照。
- 213) University of Virginia にある手紙。1 人のタイプストは *The Fight for Barbara* (92 ページ) 分の代金 9 ドル 20 セントの支払いを受け, もう 1 人のタイプストは他の 2 篇の戯曲の 178 ページ分の代金 17 ドルの支払いを受けた。Frieda はさらに 12 ドルを受け取った。その 3 篇の戯曲は 'EMCO' と透かし模様の入った同一の紙にタイプされた。
- 214) 1940 年 1 月 19 日の McDonald の Lee 宛ての手紙 (テキサス大学オースティン校蔵)。McDonald は *The Fight for Barbara* が「本当に軽くて, 楽しい」喜劇とみなした。
- 215) *The Letters of D.H. Lawrence*, ed. Aldous Huxley (1932), p. 103.
- 216) Roberts C226, *Virginia Quarterly Review*, xvi, 523-47; Roberts C227, *Virginia Quarterly Review*, xvii, Supplement, 1-44. それらは *Complete Plays* のそれぞれ 3 番目と 7 番目の戯曲であった。*The Merry-go-round* もまた 1940 年と日付のある, 私的に出版された抜き刷りとして, 単独に出版された。書評は見つかっていない。
- 217) *The Playwright as Thinker: A Study of Drama in Modern Times* (1946; New York, 1967), pp. 280, 76.
- 218) *D.H. Lawrence: An Appreciation* (Harmondsworth, 1950), p. 30.
- 219) 'Drama: Talking Points', 24 September 1953, p. 520. Trewin はまたその戯曲と, 同じ週に放送された, Naomi Mitchison と L.E. Gielgud による *As it was In the Beginning* (1939) という, ローマの初期キリスト教徒についての「はるかに感動的な」反ファシストの戯曲との比較もした。
- 220) (New York, 1957), pp. 330-1. *The fight for Barbara* と *Noah's Flood* は無視されて, *The Daughter-in-Law* は名のない「未完の戯曲」として含まれているだけである。
- 221) *A Play by D.H. Lawrence. 'The Widowing of Mrs Holroyd'* (San Francisco, 1956), p. 3. Schorer はそれを彼が DHL の 5 篇の戯曲と 5 篇の戯曲の断片であると判断したものの中で最初に書かれた戯曲であると述べている。
- 222) *Religious Drama* (New York, 1957), pp. 165-266. 引用については, 7 ページ参照。
- 223) この時期の記録されている DHL の戯曲の唯一の上演は, Cambridge の Gonville and Caius College で *David* を 1958 年 2 月 4 日から 6 日までアマチュアが上演したものである。その上演は DHL の熱狂者である Andor Gomme の監督で College Dramatic Society によるものであり, David Pass が Saul を, Jim Hunter が David を, Susan Koechlin が Michal を演じた。初めてそれは無削除で上演された。
- 224) 'The Plays of D.H. Lawrence', *Modern Drama*, ii (1960), 349. 重要なことだが, その論文は *D.H. Lawrence: A Collection of Critical Essays*, ed. Mark Spilka (Englewood Cliffs, N.J., 1963), pp. 140-9 に再版されたことから広く流布した。
- 225) 1961 年 3 月 23 日の Granada TV (ITA), Television Playhouse シリーズのために Ken Taylor が脚色して, Claude Whatham が演出した。

- 226) 1961年3月18-25日1, 13, 33 ページ。
- 227) 3月24日16 ページ, 3月24日18 ページ, 3月26日26 ページ。Sagar 300-1 も参照。
- 228) 'D.H. Lawrence's Biblical Play *David*', vi, 164-76. *David* のアマチュアによる上演は, 1965年8月に California の Palo Alto で Peninsula Religious Drama によって上演された。
- 229) Sagar 301. Hugh Herbert, 'The Whipper-in', *Guardian*, 7 November 1973, p. 12 も参照。
- 230) 'The Economics of Affection', *The Times*, 9 August 1965, p. 5 (部分的に再版, Sagar 302-3); 'Lawrence's First Play Well Acted', *Daily Telegraph*, 9 August 1965, p. 14; *The Times*, 28 January 1967, p. 13. Terry Coleman は「私が進取の気性に富んでいると思われたテレビのプロデューサーであるならば, これらの他の…戯曲の台本を手に入れるだろう。私にはそれらの台本から誰かが有名になる予感がする」と, *Guardian* で示唆した。
- 231) Roberts A105; London, Heinemann, 1965, 63 シリング。初刷りは3,000部で, 1970年に1,250部の版で再版された。Viking Press は1966年に New York で, ささいな訂正をしてそれを出版した。1969年に, Heron Books (London) は Malcolm Elwin の序文をつけて *Plays* の題名で, *Complete Plays* の再版を出版した。
- 232) *The Daughter-in-Law* は *Complete Plays* の4番目の戯曲であった, [203] から267 ページ。1965年の初めに, James G. Hepburn は DHL の戯曲の完全な一覧表を提供した。彼はまた存在しないことになった行方不明の戯曲についての考察にもたずさわった (Book Collector, xix, 78-81)。
- 233) 'Lawrence on Stage', 12 December 1965, p. 26.
- 234) 4, 33 ページ。1966年のさらなる書評については, Alan Rudrum, 'Stage Sons, Stage Lovers', *Listener*, 10 February, pp. 214-15; 'Out of the closet', *Time*, 1 April, p. 60; David J. Gordon, *Nation* (New York), 6 June, pp. 686-7; V.S. Pritchett, 'Lawrence's Laughter', *New Statesman*, 1 July, pp. 18-19; Andor Gomme, 'Writing the Play', *Times Literary Supplement*, 17 November, p. 1041.
- 235) Ken Taylor は *The Widowing of Mrs. Holroyd* および DHL の短編のいくつかの自分の脚色について次のように書いている。

私は……ダイアローグは真実で自然主義的であって, できる場所ではどこでも使用されるべきであるという流行おくれの見方を取りました。私はまたサブテキストはダイアローグとして広範囲にわたって書き直されるべきではありませんが, しかし私たちは俳優たちが行間にある思いと感情を伝えるのを期待すべきであると唱えました。これは今ではあまり革命的ではないように思われるかもしれませんが, しかしその当時は Harold Pinter の作品はそれほどあまり詳しく説明されていませんでしたし, 多くの人々によって模倣もされていなかったのです (1983年2月17日の編集者への手紙)。

自 叙 伝 (2)

エドウィン・ミュア著

横山 竹己訳*

An Autobiography

by

Edwin Muir

Takemi YOKOYAMA

母親は歌うのが好きだった。彼女は賛美歌と「世俗的な」歌を厳格に区別していたが、賛美歌だけを歌っていたわけではなかった。私は世俗的な歌も賛美歌もみんな母親の後について歌った。まだズボンをはいていなかった四歳のときに、ワイア島の学校のコンサートで歌ったのを思い出すことができる。その歌はジェイムズ五世と托鉢修道士や乞食に変装して人々の中を歩き回る彼の習慣を歌った古いスコットランドのバラッドであった。今でも最後の節だけは思い出すことができる。最後の四行はこうである。

それから彼はぼろ服を脱ぎ、
そしてその服を捨て置いた、
そして彼は黄金に輝いた、
居合わせたすべての人をはるかに凌いで。

この部分を歌うと、私はとても誇らしい気持ちになった。母親のもう一つの古いバラッドは次のように始まった。

偉大な武人の名をもつ古のすべての
スコットランドの騎士の中で
最も勇敢なる、誉れ高き騎士は、
ジェイムズ薔薇卿なり。

以来この歌に出くわしたことは一度もない。また百年前や五十年前の俗謡もあった。クリミア半島やクリミア戦争のバラッドもあった。「アルマの丘を襲撃した」様子を歌ったバラッドもその一つである。また十八世紀のブロードシート・バラッド（ブロードサイド・バラッドともいう。大判紙の片面に印刷したバラッド＝訳者註）もあった。これらは農夫が好む単調なリズムで歌われた。例えば、次のような歌がたくさんあった。

彼はたいそう伊達者であったが、
残念なことに、
ひどい罪を犯したか何かで
ボタニー湾に送られた。

尊崇心のない兄のジョニーは、ある日、救世軍（一八六五年ウィリアム・ブースがロンドンで組織し、一八七八年に軍隊的組織に改編された、伝道と社会事業を目的としたキリスト教団＝訳者註）がカークウォールで歌うのを聞いたという賛美歌を持ち帰って来た。

わが旧友たちよ、さらば。
君たちと一緒に地獄へ行く気はない。
永遠にキリストと共に留まるつもりだ。
君たちは行くのか、行くのか。

父親と母親がいるときは、彼はこの歌を決して歌わなかったが、我々はこの歌を気に入っていた。母親はまた、古くて美しいコックニー・ソングを歌っていたが、

2013年10月21日受理

* 東北工業大学名誉教授

どうしてそのような歌を知っていたのかはわからない。

でも、彼女は蝶のように美しく、
女王のように誇り高かった。
彼女はパディントン・グリーンの
可愛い小さなポリー・パーキンズであった。

初期の歌と後期の歌には大きな違いがあった。ジェイムズ五世やジェイムズ薔薇卿を歌ったバラッドは、おそらく何百年もの間口承されてきたものであろう。その結果、そうしたバラッドは自信に満ちており、自分たちこそいつもそのバラッドを歌う資格があるのだと言わんばかりに、人々は大きな声で歌った。後者のバラッドは、やや文学的に、つまり歌詞に敬意を表して歌われた。英語の歌詞の音節一つひとつが、まるで発音の練習でもしているみたいに、注意深く発音された。長い間、人々の生活に根ざしてきたこれらの古い歌は、今ではほとんど死に絶えてしまった。

我が家には二つのヴァイオリンと一つのメロディオンがあった。二人の兄はヴァイオリンを弾いた。そして、我々は皆メロディオンがうまかった。ハー (Haa) で隣に住んでいたジョン・リッチは、伝統的なカントリスタイルでヴァイオリンを弾くのがとても上手であった。彼は弓を弦の上で振動させる巧みな技をもっていたが、そこが我々のお気に入りであり、特に、『雌鳥のこやし山へのマーチ』(The Hen's March to the Midden) のような、ゆったりした、厳かな調子の曲ではそうであった。またある年、我々は皆チェッカーに夢中になり、長い冬の夜を徹してチェッカーをしたことがあった。そしてサザランドと対戦するときはずっと用心しなければならなかった。というのは、彼はコマを取られた後、板上の自分のコマをさり気なく攻略しにくい位置に置き換えてしまうからだ。それを指摘すると、彼は大きな声でそんなことはしていないと言うか、コマがそんなところにあるのを見て驚いて見せたものであった。ブーでの冬と言えば、ストーブ——黒い鉄でできており、周囲には渦巻き模様がついていて、台所にでんと据え付けられていた——を囲んでチェスをやるか、ヴァイオリンかメロディオンを聴くか、そうでなければ、父の魔女や妖精の話を聞きながら過ごした長い冬の夜ということになる。冬は馬や牛を馬小屋や牛小屋に集めるように、我々を一つの部屋に集めた。空はより近くにあった。ランプは三時か四時に点灯された。それから夕暮れが一つの世界のように我々

の前に広がった。それはおしゃべりや物語、ゲーム、音楽、それにランプの明かりに満ちた夜であった。

この重苦しい冬の世界から春への移り変わりは、慌ただしかった。それは牛が六か月間閉じ込められていた暗い牛小屋の仕切りから解き放される日に始まった。父親とサザランドが牛小屋の扉を開けると、さっとわきに寄った。牛は、半年も暗い夜を過ごしたため目はよく見えないながらも、春の空気と日差しに狂喜しながら、空地へと疾走し、牧草地の向こう側の石の境界壁に阻まれるまで止まらなかった。もし誰かが牛の行く手に入り込んでも、牛はその人に目もくれずに、踏みつけて行ったであろう。夏の間は牛を厳重に監視していたわが家の犬プリンスも、この光景を目の当たりにして身を縮めていた。これが春の始まりである。

春に関係することと言えば、羊のお産があった。わが家の羊たちは春の終わり頃に生まれたにちがいがなかった。母親が緑輝く春の日に私の手を取って、二頭の生まれたばかりの小羊を見せるために裏庭に連れて行ってくれた光景を思い浮かべることができるからだ。何か血のついた、濡れたぼろ切れに似たものが草の上にあった。そしてちょっと離れたところに、二頭の羊がひょろ長い脚を二重にたたんで座っていた。何もかもが柔らかく、真新しく見えた——空も海も草も、前触れもなく芝生に投げ出されたかのように見える二頭の羊もそのように見えた。羊の目にはまだ痣があったし、蹄は漆を塗られたばかりであった。私が撫でようと近づいて行っても、羊は私に注意を向けなかったが、突然、物静かに頭を左右に動かし続けた。

次にやるのは、種まきであった。その時期になると世界が開けて、青や緑や紅といったさまざまな夏の色が目覚めるにつれ、空はいつそう高くなり、海はいつそう青くなっていた。黒々とした畑は輝いていた。くすんだベージュ色の袋が、農耕馬の尻のように、はち切れんばかりに膨らんで、二列に並んでいた。立ち耳のような、形の整った二つの小さな取っ手がそれぞれの袋から突き出していた。父親は袋を開け、灰色の穀粒を最初の袋から腰にくくりつけた麻布製のトレイにいっぱい移した。そして手を開いたり、閉ざしたりし、規則正しく腕を振り、両側に穀粒を蒔きながら、畑を大股で歩いていた。蒔き終わると、別な袋のところに立ち止まり、そして蒔き続けた。私はこの父親の姿を見ながら坐っていたが、私の目は、止まっているようにみえるほどゆっくりと黒々とした丘に向かって進んでいく船に引き寄せられていた。再度船に注意を向けると、船が進んでいるのを知って驚いた。太陽は輝い

ていた。黒々とした畑もきらきらと輝いていた。父親は腕をゆっくりと振りながら大股で畑を歩いていた。穀粒は畑に落下していく度に扇状になってかすかに光った。くすんだベージュ色の袋の列はずんぐりした記念碑のように畑に並んでいた。父親は種まきにことのほか喜びを感じていた。そして我々はみなその最初の日を特別な日だと思った。春はほんのわずかな鮮烈な出来事であって、一つの状態というのではなかった。そしていつの間にか、動きのない青い夏が来たが、何も起こらなかった。

我々は幼年期という領域を通過するが、就学の年齢に達するまで、いくつかの領域の中で生活する。学校に上がる年齢になると、幼年期の一部は永遠に止まってしまう。私は最初の七年間のいくつかのさまざまな記憶を区分することができる。第一に、光線をじっと見ながら寝ていた記憶である。この記憶はどの時期のものとは言えないが、揺かごの中にいたように思われる時期のものだ。その後の記憶は、洗礼を受けた記憶と演奏会で歌った記憶である。これらの記憶はベチコートを着ていた時期のもので、自分を巨大な存在の間を安心して動き回っている幼い子供だと意識していた時期である。次は——母親が私にズボンをつくってくれたことが、実際私を変えてしまったかのよう——自分が男の子で、女の子とは違うのだと意識した記憶である。私は、もはや結婚、あるいは親が決めた結婚といったものがない世界にはいなかったのである。

この段階は喧嘩のはじまりと一致していたように思われる。というのは、私の最初の喧嘩の記憶は、ナイフのことで他の少年とやった喧嘩だからである。その記憶はおぼろげだが、記憶中の人物は、輪郭がはっきりしないが巨人で、スコットランド民謡に出てくるダグラス家の人々やパーシー家の人々を思い出させてくれる。それは秋のことだったにちがいない。物悲しい光があたりを照らしていたからである。相手は、フレディーという名前の少年だったが、彼は二本の狭い道が交差する場所で私と立っていた。少し離れたところで、頭に被り物をしていた二人の年上の女の子がじっとこちらを見ていた。日が暮れようとしていた。湿った雲は頭上に立ち込め、我々を包み込み、小さな円形の決闘場をつくってくれた。怒りが込み上げ、手を振り上げ相手を殴ったのを覚えている。私はフレディーを殴り倒し、彼の手からナイフを取り上げた。彼は起き上がらなかったが、それで私は怖くなった。私は身を乗り出して彼の肩をゆすってみた。彼は湿っ

た草むらに顔を沈めて泣いていた。すこし前に、母親を診るために医者が我が家に来ていた。私は医者であると心に決め、フレディーのもとに再び行き、彼の脈をとるまねをし、彼は回復したと断言した。最後はどうなったのか、ナイフはどうなったのかは覚えていない。

この記憶は、私の喧嘩好きがほんの短期間だったために、他の記憶とは違った世界のものとなっている。インフルエンザに罹ってから、私は臆病になり、怖じ気づくようになった。他のことも原因としてあったかもしれないが、なぜこうなったのか、はっきりと説明することはできない。島ではすべてのものが身近にあり、一国あるいは一大陸じゅうに広がっているものがすべて島の中に凝縮されていて、そうしたもののから逃れる術はないのである。かぎタバコで膨れたポケットに入れてお菓子をよく持ってきてくれた隣の農夫が少し前にとっても苦しんで死に、彼が死んだ様子の一部始終をきいたが、その恐ろしさを今でも感じるができる。子供の心には自分の周辺に隠れた悲劇が起こっており、そしてその悲劇というのは、目に見えない状態ですでにそこにあるのだが、今後何年か先の生活のことだと本能的に察知する瞬間があるのではないかと度々思ったりした。子供はまた、失ってしまうとおそらく思い出せないような、子供特有の人間の世界像、つまり、原初の世界像をもっているのだ。この世界像とは、大地、大地の家々、そして人間一人ひとりの生活が、まるで天空が大地に、大地が天空に合わさって一つになっているかのように、これらすべてを被う天空とつながっている状態だと私は考えている。私が見るいくつかの夢は、子供がこの世界像をもっていることを確信させてくれる。そこには将来二度と知ることができないすべてのものの完全な調和がある。そしてこの世界像が壊れ、矛盾が人生に入り込む時期（幼年期から少年少女時代に移行する時期）が来る。この時期は感情的にも精神的にも張りつめる時期であり、それと共に罪の意識が現れてくる時期でもある。知人の死、見えない悲劇が周辺に起こっているという感覚、私の原初の世界像の崩壊、インフルエンザに罹ったこと、こうしたことがすべて私を変えたのかもしれない。とにかく私は臆病になり、怖じ気づくようになった。インフルエンザで覚えていることは薬の甘い味である。その薬は、飲むときに使った金属製のティースプーンの味がしたような気がするし、またスプーンのように、淡い黄金色であった。

子供らしい痛烈な罪悪感とは——それがどのぐらい長

く続いたかわからない。何か月だったかもしれないし、ほんの数週間だったかもしれない——父がカークウォールからもってきた洗羊液の袋と関係していた。その液は有毒だったので、家からいくらか離れた畑の真ん中に置かれていた。父は我々にそこに近づいてはいけない、決してその袋に触ってはいけなくと厳重に命令した。私はそこに近づかないように気をつけた。しかし羊がその液に浸され、袋が破られた後、その袋に触らなかったと確信できなかった。そして父の言葉を文字通りに受け取り、その袋に触ると死ぬと考えていたので、恐ろしくなった。というのは、私の手はその袋に触ったかもしれないからだ。袋はもうなくなっていたので、それを知る術はなかった。私は、あの時間と場所で袋に近寄せぬこともできずに、袋に触ったかもしれないし、触らなかったかもしれない少年を制することができないでいた。もちろん、私は恐れ慄いた。それで、手のつやがなくなり、透明になるまで、一日何回も手を洗い、そしてその後で、何かわかるのではないかと思いつつ、苦しみがきながら手をじっと見つめていた。恐怖心は私にまとわりつき、決して離れなかった。恐怖心から逃れるために街角を何度も曲がったり、あるいは自分一人しか入れない広さの、窓が一つしかない小部屋に自分を閉じ込めたりもした。しかし、その小部屋は私の恐怖心も入れるくらいの大きさだった。ときどき、恐怖心から逃れるために、これ以上遠くへは走れないくらい走った。そして倒れて膝を怪我し、出血でもすれば、他の子供たちが膝を怪我して、出血する普通の世界に戻れるにちがいないと思ったりもした。母親は、私が母親から離れてしまい、もう私にはついていけないと思ったのだろうか、心配そうな顔をして何度も私に目を向けた。私は母親のあの心配そうな表情に幾度となく出くわした。そして実際、私は一つ一つのものが恐怖に彩られている世界に入り込んでいったが、その世界は、普通の世界と大きさが同じであり、しかもどこもここも普通の世界とまったく変わらない世界であった。その世界はどこまでも続く、割れることのない一枚のガラスによって普通の世界と隔てられた一種の平行した世界であった。私の世界は外見では現実の世界とまったく同じであったが、恐怖心をつき破って現実の世界に到達することができないし、目に見えない形で自分が現実の世界から切り離されていることを知っていた。このことが私に恐怖心を与え、当惑させた。自分が出口のない場所にいるという感覚が常にあった。しかし、その場所は自分を取り囲む透明な雲か泡でしかなかった。何

かをすればいつでも脱出できる場所であったが、何をすればよいかわからなかった。数フィート離れた場所でひなたぼっこをしながら遊んでいる私の姉は現実の別の世界にいた。兄たちも現実の世界で乾草を刈り集めていた。船も通り過ぎていった。そして何日も何日も過ぎて行っった。何度もやってみたが、現実の世界に到達することはできなかった。母親は、私を両の手で抱いて、私の頭を肩にのせてくれたりして、とても近くにいるのだが、現実の世界の内側にいて、私は外側にいた。この状態がどのくらい続いたかはわからない。しかし現実の世界は再び現れたが、それはひびの入ったガラスを通った歪んだ光の中に現れた。そして恐怖心と自分自身を洗い淨めたいという懸命な願いは消え去った。

私はこの恐怖と罪の感情を説明することができない。たぶん、その根底には、幼い子供のだれもがもつ性に対する脅迫観念が、言い換えれば、それ自体は自然なものだが、大人たちの考えによって罪に染まってしまった好奇心があったのではなからうか。子供は二つの世界に住んでいる。自分たちの世界と大人の世界である。自分たちの世界でやることはごく自然であるようにみえるが、大人の世界からみると、不可解で、大きな罪なのかもしれない。子供というのは、自分で証明できるようになるまでは、あるいは理解できるようになるまでは、物事をただ信じなければならない。それが子供の世の中の学び方であり、唯一の学び方である。こうして、子供は罪を犯していると思わずに罪を犯していると信じることができるのである。そして、最初のはうのみにされ、振りをすることによっていかにも本当らしくなってしまう罪は、後には想像力によって現実性を帯びるようになるのかもしれない。そして、罪は空虚な空から子供に舞いおりてくるのかもしれない。私の恐怖の一番の問題は、恐怖の正体が何であるかわからないために、その恐怖について父親や母親に話すことができなかったということである。両親の助けが、いくら両親にその気があっても、自分には何の役にも立たないことを知って、私はうろたえた。自分の閉じ込められた世界と現実の世界との間の膜がなくなったとき、私の目にした世界は、私の最初の子供の世界ではなかった。そして、あの子供の世界は二度と戻ってくることはなかった。この罪の意識と恐怖の発作は私が七歳のときに生じたが、夏のことであった。それは明るい、鏡のように穏やかな、風の無い天候と結びついているからである。七歳であったことがわかるのは、我が家がブーから、一年しかいなかった隣接

のヘルツィガーサカヒーリー (Helye) の農場へ移ってきたばかりであったからである。

農場は誕生と死の行事の場所であり、それを子供が怖がるのは当たり前である。最初に二匹の小羊を見たとき、得体の知れない、汚らしくて赤い、ぼろ切れのような物体はまるで汚れを連想させた。今でも小羊を見ると汚れを見る思いがする。もしインフルエンザに罹らなかったならば、おそらく汚れのことなどあまり考えなかったかもしれないし、また身体が健康で五感が正常に働いていれば、びっくりすることや嫌なことでもさっと払い除け、こだわることなく心の片隅にしまい込んでしまったかもしれない。そのときは健康の回復期で、神経がかなり高ぶっていたにちがいない。しかし、こうした最初の恐怖は、生命と密接に結びついた物から生じたために、かえってよかったのではないかと思う。子供は農場という場所でこそ最もよく育つのではないだろうか。人間の文明の中心には牛小屋、納屋、糞の山があるからである。父親は、隣人の一人が連れきた雌牛に種付けをさせるため、雄牛を連れ出してきたが、それは、目覚めることなどあり得ない大昔からの夢を抱きながら、我々が何千年もの間生活してきた伝統の儀式であった。また隣の人が豚を刺し殺すためにやってきたが、それもまた、太陽が昇ったり、沈んだりするように、客観的な儀式であった。そうした行為がなければ、さまざまな慣習や考えや信仰が織りなす文明——教会、学校、会議室、応接室、図書館、都市——などはあり得ないといった考えは彼にはまったくない。彼はただそれをこれまで常にやってきたこととして、しかも一定のやり方でやってきたこととしてやっていたにすぎないのである。確かに、種付けと命を奪う屠殺には、罪を取り除く必要性があったし、少なくとも、儀式によって、罪を悲しくも神聖な義務に変える必要性があった。

雌牛が雄牛のところに連れてこられるときは、いつも母親は我々子供たちを家の中に閉じ込めておいた。何が起きているのか少しもわからずに、庭で叫んでいる男たちの声を聞いていたものだった。その声は、何か雄々しい試合でもやっている戦士たちか男たちの叫び声であった。母親はまた、豚が殺されるときにも——最初は七歳くらいだったにちがいない——私を家に閉じ込めようとしたが、母親が背中を向けると、こっそり抜け出して、牛舎へ歩いていき、窓から庭をじっとみていた。島のために豚の屠殺の役割を果たしていた農夫は、首の側面に丸くて大きなこぶがある屈強な、薄茶色の髪の毛の男だったが、そのこぶからは、何や

ら豚の剛毛のような淡色の毛が一束になって生えていた。彼は常にグリー、あるいはガリーと呼ばれる、柄が木製で、幅が広く、先が尖った刃をもつナイフをもち歩いていた。私が窓辺に来てみると、豚は喉に深手を負い、血は、サザランドが片膝を地面につけ、両手でつかんでいた洗面器に泡をたてながら流れていた。父親とその農夫は、暴れないように豚を押さえていたが、突然、豚は押さえを振り払い、サザランドを打ち倒して、疾走していった。洗面器はひっくりかえり、あたり一面が血に染まった。サザランドは、ののしりながら立ち上がり、赤く染まった両手をズボンで拭いた。その日は晴れていたが、風のある日で、突風が血だまりに吹きつけ、細波を立てていた。豚はこれまでとは違ってみえた。私には何がなんだかまったくわからなかったが、豚は、邪悪な決然とした目つきで、何かを捜しているかのように、また犯罪者の相棒、つまり、豚の屠殺者の相棒でもあるかのように、駆けずり回っていた。駆けずり回りながら、喉の隙間からノコギリのようなギーギーという叫び声をあげていた。ときどき立ち止まっては、次にどうしたものかと考えていた。豚はでたらめに行動しているのではなく、我々の計り知れない目的をもっていたのだ。そう思うと、豚は怖いと思った。しかし、豚は立ち止まって、庭の隅に生えていたギシギシの匂いをかぐと、豚らしくなった。それで、怖いとは思わなくなった。しかし、すぐに、口ごもりながら再び告発し始めた。そして豚が眼光鋭く睨みつけていたのは、人間の残酷さ、殺戮の行為そのものの残酷さであった。それから、豚はバランスを崩し、よろめき、今にも倒れそうになった。私は走って家の中に入り、泣きながら、母親のスカートの中に顔を隠した。母親は私を叱り、そしてなだめてくれた。

後になって思い出してみると、私はあの豚を可愛そうだと思っていたようにみえるが、実際はそうでなかったことを知っている。私はあまりの恐怖に戦っていたのである。そして、その豚に感じていたのは、憎悪であった。豚は（立ち止まってキジキジの匂いをかいでいたちょっとの間は別として）私には恐ろしくて邪悪なものにみえたからだ。その後、私は外へは出なかった。やや時間がたって、豚の屠殺者が、ひじまで血で真っ赤に染まった腕をお湯が入った洗面器で洗うために、台所に入ってきたとき、私はテーブルの下に潜って隠れた。彼は何とかして私をテーブルの下から引き出そうとしたが、私は出ようとしなかった。あとで納屋に行ってみると、きれいに切り開かれた豚は、

後ろ脚の腱を突き通した二本の綱で垂木に吊されていた。そこは温かくて甘い香りに満たされていた。それで、私はめまいがした。豚の内蔵は桶の水の上に浮いていた。豚はゆらゆらと揺れていた。その度に垂木は、我々が垂木に吊したブランコに乗ったときのように、静かにきしんだ。豚の内側はピンク色で、きれいだった。そして、渦巻き状の貝のように脂肪のフリルやスカラップが両側についていた。そこには私と死んだ豚以外にはだれもいなかった。私は、忌まわしくも不可解なものを凝視するかのよう、その豚を凝視して、立ち去った。

家に帰ってみると、従兄弟のサザランドがストールに腰掛け、ストローで豚の膀胱をふくらませていた。膀胱は、しばらくの間、財布のように、ぺちゃんこになっていたが、次第に膨らんできた。すると、何本もの薄赤い筋が膨らんだ表面にはっきりと現れた。そして、その表面は、どんどん薄くなり、シャボン玉のようになった。サザランドはさらに膨らませて、膀胱の首に糸を結びつけ、それを私に投げてよこした。私はそれを落とした。ぬれていて、すべすべしていたし、また強烈な匂いがしたからだ。数日後には、それは乾いて堅くなり、私はそれをときどきフットボールのボールに使った。

納屋で羊を屠殺していたサザランドの記憶は、おぼろげで、卑しむべき記憶であった。それは、おそらくサザランドが素人で、陽気ではあるが、いわくあり気に、その仕事に取り組んでいたからである。納屋の扉が光を遮り、屠殺という行為を隠すため閉ざされていたかのように、あたりが暗くて静まりかえっていたという印象をもっている。そこにはサザランドと私自身以外に誰も見当たらないのだが、そんなことはあり得ないので、おそらく、それは記憶のいたずらであるにちがいない。また、従順で愚かな雌の羊がベンチの上で横に寝そべっている姿や、今にして思えば、忌まわしいほど小さい懐中ナイフを手にもったサザランドの姿も記憶に残っているが、これもまた記憶のいたずらであろう。現場全体は恥ずべき場所で、臆病にも事を内密にしているという感じを与えていた。これ以上のことを思い出すことはできない。

辛い、納屋といえば、楽しい思い出でいっぱいである。同じ頃、農夫であり、熟練の建具屋でもあるヒュー・オー・ハブレック (Hughie o' Habreck) が私の父親のためにヨールと呼ばれる小型帆船をつくるためにやって来た。彼はずんぐりした、力の強い男で、低く響く声で話し、羊肉形ほおひげをはやしていた。物腰はゆっ

たりしていたが、もったいぶっていた。話すときは、評決を下しているかのように話した。それゆえ、人々はいつも彼に忠告を求めた。彼は建造中の船の上に立って、次に何をしたらよいか長い間思案していた。そして、最後に、しかと確信したかのように、裁判官のような声で、「今度はこれをしよう」とか「今度はあれをしよう」と言った。彼は急ぐということは決してなかった。この世に船と自分しかないかのように、船のことを考えることに没頭しながら、彼独特のやり方で、のこぎりで材木を切ったり、鉋をかけたり、のみで彫ったりしていた。彼と船の関係は、紛れもなく、完全に親密な関係であった。船の実際の建造のことはあまり記憶にない。ただ、記憶にあるのは、蒸気を使って板を曲げていたこと、滑らかな板を一枚ずつ順に重ねていたのも、なかなか船側ができあがらなかったこと、一日一日が心地よくゆっくりと過ぎてゆくにつれて船首から船尾まで船側がさらに膨らんできたこと、巻き上がった鉋くず、木材と樹脂の匂い、水に浸した手を突込んでも火傷しない沸騰したタールのことなどである。船はようやく出来上がった。兄たちは、夕方、度々その船に乗って漁に出かけていった。私も連れて行ってもらった。

暴風が襲ってきたのは、七歳であったにちがいない。最初の日をはっきりと覚えている。その日は、どんよりした風ひとつない日で、空には、大船団の満々と張られた帆のように、雲がどっしりと厚く垂れ込めていた。そして、その雲はどんどん広がり、暗くなっていくにつれて、いっそう低く垂れ込め、私の頭上にまで届くほどであった。学校からの帰り道、家の下方にあった小さな池のほとりを通りかかったとき、私は異常な静けさに気づいた。前後に空白の部分はあるが、あのときの自分の姿が今でも目に浮かぶ。台所に入っていたとき、母親はこんな空模様は嫌だと言った。それを聞いて、私はびっくりした。というのは、私は、どんよりした、もの悲しい静けさとか、一枚一枚の不動の草の葉から一滴の透明な水滴をしたたらせるじつとりと湿った空気とか、わびしくも微動だにせぬ池が好きだったからである。ほどなくして、鉄製のバケツが、家の端から端まで吹き飛ばされて鳴り響いたガチャガチャという音を耳にした。父親とサザランドは、納屋の扉や窓がしっかりと閉まっているか確かめるために走って出ていった。私も暴風の様子を見にいっしょに行きたかったが、母親は、風に吹き飛ばされるから、行っってはいけないと言った。当時、私は風が人を吹き飛ばすというようなことを知らなかったのに、

母親の言葉はうその警告だと思った。暴風そのものは私にほとんど印象を与えなかった。家の中にいたし、窓から外を見ていたので、雲が低く飛んでいるうっとうしい空や、何もかもがなぎ倒されていく様子や、うち捨てられた畑以外にみるべきものは何もないと思った。二日目になって、サザランドは、入り江に錨をおろしていた船がその錨を数マイル引きずっていたと言っていた。サザランドと父親はこのことにおおいに関心をもったようだ。私もそれに関心をもとうとしたが、実際に私がとてもうれしく思ったのは、これこそは暴風であって、単なる風ではないということを知ったことであつた。というのは、暴風というのは風と違うものだと考えていたからである。暴風は数日間続いたにちがいない。風がやんだとき、二人の男性と女性を乗せて本土から戻ってこようとした船が初日に行方不明になったというニュースが、ラウジー島から飛び込んできた。海はまだ波が高かったが、父親とサザランドは、ワイア島とラウジー島の他の船といっしょに、行方不明者一行を捜しに、船出していった。夕方になって、サザランドは海で死者に何が起こったかを話していた。遺体はふくれあがり、三日目に海面に浮き上がったのだ。他の溺死者たちもあがってきた。ほとんどの農夫が船を共同利用して、漁に出かける時期になると、オークニー諸島では、海での死はありふれたことであつた。結局、遺体はすべて発見された。

私が学校にやられたのは、私の最初の世界が崩れ、恐怖感を抱き、病気になった時期であつた。それは七歳になってからだと思う。それまで健康がすぐれなかったからである。私は他の男の子たちとつき合うことはほとんどなかったが、隣の農場の一歳年下の女の子とは大変親しくなった。何をしたのか、どんなゲームをしたのかは覚えていないが、夏の間は毎日いっしょで、自分たちと同じ背丈の雑草が生えていた、屋根のない礼拝堂で何時間も遊んでいた。それは、この年齢の子供に目覚める早熟の恋愛のまねごと——親たちはそう考えるかもしれないが——というのではなかった。我々はとても仲がよかった。我々にはライバルもいなかったのだから、喧嘩をすることはほとんどなかった。我々の友情は同じ年齢の二人の男の子の友情よりも親密であつた。それは物静かで、落ち着いたものであつた。まるで老夫婦の友情みたいなものであつた。ときどき自分を誇示したりして友情を損ねることもあつたが、そういうことは長続きしなかった。そんなことをすれば、何もかもがだめになってしまうとわかっていただからである。長い夏の日々の間、何をして

いたのか、またその時間を、どのようにして、夢でもみているように、何の努力もせずに、楽しく、過ごしていたのか、今では知るよしもない。私の兄たちや姉たちはみな学校に行っていたので、我々は毎日毎日二人だけであつた。

私は、このような友情から学校へ放り込まれた。学校は十五、六人の生徒しかいない小さい学校だったが、生徒たちはみな知らない人ばかりであつた。先生は——ブーの我々の家に来たときは、膝の上に私を座らせてくれた——私に優しくあつたが、教室では違うということがすぐにわかつた。そして、その理由を理解するのに長い時間がかかつた。私はやや遅れた子で、歌以外は何もうまくできなかった。最初の夏学期の終わりに学校に来た試験官は、私の答えにえらく失望し、今まで聞いたことのない恐ろしい声で、「この子はとくに劣っている子にちがいない」と言った。彼は、ピートの匂いがする茶褐色のツイードのスーツを着た、背の高い、顔の大きな男で、その大きな手は、とてもよく洗われていて、きれいであつた。

私ははじめから学校が好きでなかった。教室はインク、チョーク、石筆、コールテン、それにニスなどの匂いが充満していて、自分の頭はまるで暖かい綿が詰まっているような感じであつた。そして、はっきりわかつたことは、自分が捕らわれていて、逃げ口がないということであつた。教室の壁の一面には世界地図が貼られていた。小さな、くすんだ茶色の世界、教室より小さな世界の地図であつた。インク壺がはめ込まれた薄茶色の長椅子は、真新しく、とても硬そうにみえた。窓からみえるものは、空高く流れる雲だけであつた。そこでは、時間はゆっくりゆっくり進んだ。私は、誰にも見られないように自分の意志で時計の針を押し進めながら、長い間座っていたものだが、目覚めみると時計の針がほとんど動いていないのに気づいた。最初は他の少年たちを怖いと思った。これらの少年たちは自分とは違う世界で育ってきたようにみえたからである。次第に年下の少年たちと友だちになったが、その関係は、なぜだかわからないが、いつでも壊れそうな、不安定なものであつた。学校は怖かつたし、また嫌いでもあつた。だがそれは、確かに、自分の健康がすぐれていなかったせいであつた。

数年前、朝の汽車で私はエディンバラに——当時はセントアンドルーズに住んでいた——行かなければならなかつた。駅へ歩いていくと、学校へ通う子供たちとすれちがつた。その朝は、大きな洗濯物のように、雲の色褪せたぼろ切れで飾った陰鬱な朝であつた。雨

が時折意味もなくばらばらと降ってきた。濡れた木の葉が舗装道路や低い塀にへばりついてた。私は、ランドセルを背負い、校門を通り抜け、高い塀に取りつけられた扉の方に向かってのろのろと歩いていく子供たちをじっと見つめていた。音は、ほとんどどこからも聞こえて来なかった。そこは人通りの少ない通りだったからである。そして、そこには、すべてが秘密裡になされているという雰囲気があった。この光景のわびしさをどう考えたらいいのだろうか。かすんで濡れた大地。元気のない子供たち。私は、この学校よりも高く聳え立つ巨大な学校と、その学校に世界中の何百万人という子供たちがこっそり入っては消えていく姿をみているような気がした。こうした絵がひとりでに浮かび上がってきた。そして、この絵は、母親と私が散歩に出かけたワイア島の静かな日曜日の夕方を思い出させた。母親と私は学校の側を通った。学校は閉まっており、きれいになっているが、見捨てられたような感じであった。学校に近づくと、私の胸はいつそう高鳴った。そして、恐れおのきながら草ぼうぼうの運動場に目をやった。運動場は、もはや少年たちのブーツに踏まれることもなく、忘れられて、静まりかえっていた。教室や窓を眺めながらぶらぶらしていたが、頭が、まるで衣服の収納棚の中に閉じ込められたかのように、熱くなり、締めつけられた。この閉塞感、学校に行った最初の年に経験したもので、細長くてきれいな木造の建物の中に閉じ込められた感覚であった。学校に通っていた者はみんなこの感覚を知っていたにちがいない。この閉塞感による苦しみはあまりに多すぎて思い出することができないほどである。ある日、この閉塞感に襲われ、とても気分が悪くなった。アンガス先生は外へ連れ出してくれて、草原に座っていなさいと言ってくれた。温かい夏の日の中で、先生はその後また来てくれて、家に帰りなさいと言ってくれた。

最もよく覚えている日は、フレディー・シンクレアが私を家まで追いかけてきた日である。それは、我々がヒーリー (Helye) に来てからのことだった。彼が行く道と私が行く道は同じ方向であった。フレディーは、ナイフのことで私と取っ組み合いの喧嘩をした少年で、その日、彼はもう一度私と喧嘩をしたいと思っていたが、私は怖くなった。学校からヒーリーへの道は島の丘の頂上を通っていた。恐怖にかられて、その道を走り続けていくと、両側には空以外に何もないようであった。何をそんなに恐れていたのかわからなかったが、フレディーを恐れていたのではなかった。

それ以外のものであった。しかし、太陽が回るのを防げないのと同様、引き返して彼と対決することはできなかった。走りながら意識したのは、少数の極端に単純化され、拡大された巨大なものであった。すなわち、足元感じていたワイア島、他の丸い島々、空の太陽、それに一点の雲もない空などであった。以後ほぼ三十年間、パニックに陥ったあのときを恥ずかしく思い、そのことを誰にも話さなかったし、思い出すこともなかった。当時七歳で、罪深い恐怖に苛まれていた。あの夏の午後は、その恐怖がフレディー・シンクレアの姿となり、彼を恐ろしい復讐の人物に仕立て上げてしまったのだ。畑で働いていたワイア島の人々はみな立ち止まって、私のことをじっとみているのではないかと思ったら、恥ずかしくなり、恐怖は和らいだ。家族の者は誰も見ていないことを願ったが、お茶の時間に畑から戻ってきたサザランドが、「やあ、坊や、走れるんだ、見てたよ」と言った。そのときはもう恐怖は収まっていた。私は「フレディーと自分はただ競走していただけなんだ」と言い繕った。サザランドは笑って言った。「ああ、いい競走だったよ。若い、いい競走だったよ。」嫌味を言いたいとき、サザランドは私のことを「若いの」と呼んだ。

およそ三十年後、一篇の詩を書いて、あの恐怖から解放された。アキレウスがトロイでヘクトールを追跡する詩で、ヘクトールが、死後、再び競走するために戻ってくる姿を描いたものである。私自身が逃走中に知覚したとはっきり記憶している単純化された巨大なものではなく、小さなものを細部にいたるまで、夢のような正確さで知覚するヘクトールを想像したのである。物語はヘクトールの口から語られる。

私が足を踏み出すと、
草々からわずかな塵がぷっと立ちのぼり、
小さな道端の塀を通過すると、
そこに自分の影が写る。

両側の草の切れはしは、
光を浴びて輝き、
左右に目にするのは、
あの小さな空間のみ、

そして我らの影が、彼の影と私の影が
その空間の中を疾走する、
丸い小山、風に揺れる雑草、
脆くて細い草々の中を。

このようなイメージが、まったく瞬時に浮かんできたのである。そして、この詩のほとんど全部を一気に書き上げた。だが、それ以後、逃亡者が逃げるときに一瞬垣間見た小さなものへの強烈な集中力というのは、通常の目的には利用できない心の一角に保存されたあの日のより深い記憶ではないのではないかと思うようになった。ともかく、この詩は、私のうしろめたさを払拭してくれた。私の恥辱は、子供の一時期の途方もなく伸張された影であって、完全な記憶でなかったことがわかった。私の心の使われていない部分は、私の意識的な記憶が排除してしまったものを補ってくれた。そして、他の人々にもそうした出来事が大きな悲劇的な規模で起こっているのを知り、その出来事のすべてが理解できるようになった。この詩を書いた後、逃走そのものが変化してしまい、またそれとともに逃走に対する私の気持ちも変わってしまった。これは、自分が臆病であることを知っていたにもかかわらず、それを抑圧していたからであり、それを抑圧している限り、苦しむだろうと心理学者なら言うだろう。そうかもしれないが、それでは、私をその抑圧から解放したのは何だったのだろうか。これもまた問題である。我々の心の中には、我々の意志に反して、過去の未解決の問題が解決されるまでは安堵できない心があるにちがいないと思う。この心は、我々の意志が眠っていたり、物思いにふけっていたりなど、ほとんど働いていないときに、こうした問題を提起してくるのである。アキレウスとヘクトールの詩は、突然抑圧が取り除かれたというのではなく、自然に解消していったものの詩である。このような出来事は、人生の中で誰にでも繰り返し起こることであり、夢の中でも起こるかもしれない。そうした出来事はいつも不意に起こり、そのときあの出来事かと知って、我々は驚いてしまうのだ。それは悔悟と同様、明確な経験である。それは、我々がいないがしろにしている我々の一部からの警告のようなものであり、同時に我々が問うたことのない問いに対する答え、あるいは援助などあり得ないとわかっているようなところでの（要らぬ）援助のようなものである。

我々がワイア島を去る前の冬に、奇妙なことが起こった。父親の親しい友人であったワイア島の農夫の一人が立ち去り、その後に新たな小作人が来た。この新参の農夫は、体が大きくて太った、薄茶色の髪の毛をした男で、顔はポリッジの色で、睫毛はほとんど白色であった。彼は粗野で横柄な男であった。他の農夫たちはもの静かで穏和人たちであったので、彼を

嫌った。彼には人を嘲るような、やけになれなれしいところがあった。彼は隣人たちの畑に行き、冗談を言い合いながら働いている隣人たちに難癖をつけるのが好きであった。この島にやって来た数か月後のある冬の晩、この新参の農夫は、たいそう興奮してわが家に飛び込んできた。彼は、ワイア島の向こうの端にある店からやって来たのである。浜辺を歩いて帰っていったが、そのとき自分の船の様子を見て、船が大丈夫であることを確かめることにした。その夜は風があって、とても暗かった。彼が船のところに到着すると、船の向こうの端から声が聞こえて来たので、立ち止まって聞き耳を立てた。それは二人の若者の声であった。年上の青年は、その農夫が船出したとき、船に水がたまって溺死するように、年下の青年に栓を抜くよう説得しているところであった。その農夫は、大きな叫び声をあげて、二人がいる方へ突進していった。二人の若者は逃げ去った。彼は島の半分の道のりまで追いかけて行ったが、低い土塀につまづいたり、小川に落ちたりした。彼がブーに到着したときには、恐ろしい形相であった。父親はとてもショックを受けた。二人の若者というのは、我々のじき隣の息子たちだったからである。その農夫は、「奴を訴えてやる。奴を訴えてやる」と言い続けていた。私の見るところ、このことで彼は激昂していたようだった。というのは、人を訴えるといったようなことは、『ジ・オーケイディアン』や『ザ・ピープルズ・ジャーナル』にしか載らないような出来事だからである。その農夫は、弟の方を正直で、人に危害を加えるような子ではないとほめていたが、兄の方は、ワイア島のような島に悪が存在しているとは思ってもみなかったかのように、「あいつは悪だ、あいつは悪だ」と信じられない声で言い続けた。父親は、その農夫をなだめ、また上の子もそんな気はなかったと信じさせようとした。しかし、その農夫が立ち去った後、父親は、「あのウィリー・Aは悪い子だ。悪賢い子だ」と言った。「悪賢い」という言葉は、父親が人に使う言葉としては最悪の言葉であった。このスキャンダルはどうやら周囲に広まり、以後、隣人たちはその農夫を好意的に見るようになった。

ブーでの最後の年に、一つの農場で結婚式があった。我々もみな招待され、午後に出掛けていって、翌朝早く帰ってきた。明かりを灯した納屋でのダンスのことや、はみ出るくらい両方のポケットに菓子を押し込んでくれたりして、とても優しくしてくれた大勢の若い女性たちのことを覚えている。結婚式のとても不思議な記憶といえば、ひとりの若い農場の使用人の鮮やか

な、夢のような目のきらめきであった。この使用人が女性の一人を凝視していたので、我々は彼をガトのゴリアト（ダビデによって石投げ器により、気絶させられ、頭を切り落とされたベリシテ人の巨人、「サムエル記上」17; 21:9; 22:10 = 訳者註）と呼んだ。彼は力が強く、それを自慢していたが、愚鈍で、いつも言葉が出て来なかった。彼の雄牛のような頭は太くて頑丈な首にのっかっていた。大粒の汗が顔から流れ落ち、目は柔らかな、目に見えない炎の中に溶け込んでいるようにみえた。あのような大人の目の表情をこれまでみたことがなかった。大人の情熱について何か知っていたなら、彼のことを、愛の炎の中でゆっくりと身を焦がしている剃髪した雄牛と思ったであろう。実際、彼は今の私には神話の絵の一部のようにみえる。そして、数年前のある朝の夢が私の心に残した一詩行は、おそらく、四十年以上も前の彼のあの凝視から出てきたにちがいない。その詩行とは、

雄牛の重々しい栄光に包まれたジュピター

であるが、私が書くどんな詩にも似ていないものである。というのは、ジュピターの額というのは、雄牛の額のように広くて、いささか愚かではあるが、光輝に溢れていると常々思っていたからである。この詩行は好きではない。これは他の詩人の模倣で、典拠ははっきりしないが、おそらく、エリザベス朝時代の詩人を無意識のうちに盗用したものであろう。

夢そのものは奇妙なものであった。私はスペインカボルトガル（スペインやポルトガルには行ったことがない）のとある町にいた。チョッキを着ていることにいらいらしながら、明るい日差しの中、生地がやや堅

い、折り目のついたツイードのスーツを着て、通りをあちこち歩いていた。暑さは思ったほどではなかったが、それでも、その暑さで顔はこわばり、塩気がさし、ひりひりした。また柔らかなフェルト帽は、額が隠れるくらい下げて被っていた。このとき、自分のことを、幻想を抱かずに客観的にみることができた。それゆえ、夢の中の人物は自分ではなく、昔からの友だちのようにみえた。

街路を歩いていると、古い家の切妻の浅浮彫りに心に打たれた。それは大きな筋骨逞しい人物像で、ヘラクレイトスではないかと思った。体と手足は、大きな一房のブドウのように、壁面から重々しく、また生き生きと張り出していた。またその浅浮彫りは、紋章にも似た豪勢な宿屋の看板にもみえた。人物像の周辺は濃青色や濃紫色で被われていたが、ワインカップやブドウ搾り器を暗示していた。それは、動物と人間と神が同じ世界の中で一緒に生きていた時代、即ち、有機的な紋章の時間のない、群れ集った時代から時間の長い水の流れて洗われて生き抜いてきた大昔の豪華な遺物のようなものであった。この絵のどこかに、ワイア島のあの若い農場の使用人が、姿を変えて、存在していた。一瞬、動物の栄光に包まれた彼の顔は、こうしたものの啓示であった。しかし、当時私は啓示がどんなものであるかを知らなかった。ただ、光の輝き、変容といったものを、何だかわからずに、驚いてみていただけであった。「雄牛の重々しい栄光」とは、スペインを暗示していた。ワインか血だったかもしれない深紅色は、生贄の色であり、歓喜の色でもあった。ヘラクレイトスというのは、おそらく、あの農場の使用人の理想の姿であったろう。そして、四十年後、私は、心の中の未知の先祖の神に彼を捧げていた。

The Demystification of Emigration : Domestic Agricultural Crisis, Tragedy, and Hardy's Anti-Imperialism

Jun SUZUKI*

Abstract

In this paper, I have examined the myth of “emigration” in Hardy’s novels in relation to some agricultural problems which England faced in those days, and connected it with his characters’ tragedy. By analyzing one of the causes of characters’ tragedy in relation to the contemporary domestic agricultural problems, I have concluded that Hardy tried to stop agricultural laborers from leaving England for the colonies by writing about “the tragic myth of emigration” in his novels.

Hardy’s literary texts have been studied by many critics from a variety of perspectives, but few critics have focused on the issue of emigration in the novels. This is probably because Hardy’s “Wessex” has been thought to be unconnected with the real world or the contemporary national policy of imperialism. However, in Hardy’s texts, there are more references to imperialistic discourse or its traces than we might expect. Thus, a study from such a viewpoint will give Hardy’s texts a new kind of interpretation.

This theme of “emigration” in Hardy’s texts is not new in itself ; F. B. Pinion in *A Hardy Companion* lists a variety of examples of emigration in Hardy’s texts and describes : “Emigration provided opportunities for the more enterprising, and escape for others” (136). Moreover, recently, Jane L. Bownas has discussed emigration in Hardy’s novels :

Many of Hardy’s characters emigrate or move temporarily to the colonies or other distant countries, providing him with an opportunity to comment on the mores of the country which his characters are leaving. Some characters question the principles which had previously governed their actions, and realize that the moral certainties they had believed to be immutable are peculiar to a particular time and place in history and are not universal. [...] (9)

Pinion and Bownas perceive Hardy’s use of emigration in his novels positively. On the other hand, in *Oxford Reader’s Companion to Hardy*, edited by Norman Page, Hardy’s unfavorable feelings about the idea of emigration are mentioned along with many references to characters’ emigration (116). The companion book says that one of the main reasons for Hardy’s low opinion on emigration can be attributed to events detailed in his biography. However, in this paper, I will discuss the issue of emigration and Hardy’s low evaluation of it not from the viewpoint of Hardy’s personal life but from the angles of the imperial “myth” of emigration.

While pointing out Hardy’s negative descriptions about emigration, more significantly, I am also going to suggest that Hardy’s negative descriptions of emigration were concerned with the agricultural problem facing the British Empire at the time and finally with his characters’ tragedy. Concerning the problems about agri-

culture and emigration, Douglas Brown and Merryn Williams argue about the issues in detail, but they have not contemplated the topics in connection with the characters' tragedy described in Hardy's novels. Thus, I think that it is meaningful to reconsider one of the causes of tragedy in Hardy's novels from this new perspective. In this paper, I will examine the relationships among the following three elements : agriculture, emigration, and tragedy in Hardy's novels ; finally, I would also like to discuss Hardy's anti-imperialism.

I

In many of the novels of the mid-Victorian period, many characters emigrate overseas. In many cases, as Patrick Brantlinger argues in *Victorian Literature and Postcolonial Studies*, the reasons for emigration can be categorized as follows :

Colonization entails diasporas that are seldom entirely voluntary and are often coerced. Both the slave trade and the transportation of convicts are examples of the coerced displacement of people, but during the 1800s millions left Britain supposedly of their own free will, because they found it difficult or impossible to make a living there. After 1815, emigration to the colonies or the United States emerged as a partial solution to poverty, unemployment, and overpopulation. (24)

According to Brantlinger, millions of people voluntarily emigrated to the colonies or the United States in the 1800s. The main reasons for their leaving England were difficulties for them to live there due to the problems of "poverty, unemployment, and overpopulation." Indeed, Brantlinger, referring to Gaskell's *Mary Barton*, states : "In many Victorian novels, emigration helps characters, whether virtuous or otherwise, out of trouble in Britain" (*Victorian Literature* 26). In this way, for Victorians, emigration to the colonies or other countries overseas was a chance to blot out the errors committed in their past, get out of their present predicaments, and restart to live a happy life as a new person there.

Curiously enough, in many of Hardy's novels which have been considered to be not concerned with political issues, there are characters that emigrate or at least think of emigration to the colonies or the United States. However, as described in *Oxford Reader's Companion to Hardy*, "emigration recurs throughout Hardy's fiction, but almost always as a cause of disruption and loss rather than fulfilled happiness" (Page 115). Actually, in Hardy's texts, many characters wishing to emigrate to other countries ultimately die tragically without carrying out their plans, or even if they do not, they become destined to live unhappy lives in the new countries. What is worse, there are even those who emigrate and return to England later, becoming the very cause of another character's tragedy in turn.

In *Oxford Reader's Companion to Hardy*, the reason for these negative descriptions of emigration in Hardy's texts are attributed to his family matters :

It may be that Hardy's dislike of emigration went back to resentment (perhaps his mother Jemima's resentment) at the loss to the family of Martha Hand, her sister, to Canada in 1851, and of two of the Sparks sisters, her nieces, to Queensland in 1870. (Page 116)

However, in my opinion, the problem is not only a biographical, but also a political one. In that case, we need to reconsider emigration in relation to contemporary imperial myths. Thus, below, we will look at some of

the examples of Hardy's characters' emigration in light of imperial myths about emigration. Consequently, we will be able to recognize both Hardy's harsh criticism of the optimistic myth of emigration and his anti-imperialism.

II

In the Victorian period, one of the reasons for people's emigration to the colonies or other countries was to gain wealth. But in some Victorian novels, the wealth which is acquired overseas is not described as acceptable but rather as ambiguous. This is because it is inevitably connected with crime. In fact, as Brantlinger points out, regarding characters which appear in Dickens's *Great Expectations*, "[...] Pip rejects the idea of taking any more money from Magwitch, because he feels it is tainted by Magwitch's criminal past" (*Victorian Literature* 111). Likewise, in Collins's *The Moonstone*, the diamond which Herncastle brings back to England is loot from India. In this way, in some Victorian novels, economic success due to wealth acquired in the colonies or overseas is often illustrated in a negative sense.¹ In Hardy's novels too, for example, in *The Return of the Native*, negative descriptions of characters trying to emigrate to the colonies or overseas are shown. Indeed, although it is Eustacia who strongly longs to get out of the community of Egdon in the text, it is rather Wildeve that Hardy describes most negatively in relation to emigration ; for Wildeve plans to emigrate to America from the start, and later invites Eustacia to go there with him :

"God, how lonely it is!" resumed Wildeve. "What are picturesque ravines and mists to us who see nothing else ? Why should we stay here ? Will you go with me to America ? I have kindred in Wisconsin." (84)

Here we find that Wildeve has relatives who have already emigrated to the United States. Regarding this, we must take into consideration the fact that Hardy noted in his preface to *The Return of the Native* : "The date at which the following events are assumed to have occurred may be set down as between 1840 and 1850 [...]" (Orel 12). Hardy deliberately set up the date of the story for around the 1840s. What is significant then is that many English people were encouraged to emigrate to the United States in the 1840s and after. In fact, as Brantlinger states in *Rule of Darkness*, "towards the end of the Hungry Forties, John Stuart Mill put the stamp of orthodoxy on emigration as an instrument of economic prosperity [...]" (115). Brantlinger also states : "Between 1847 and 1852 over 1.6 million migrants left Britain for the United States and Canada, Australia, and other parts of the Empire" (115). Most probably, Hardy designed Wildeve as one of the would-be migrants of this period. Actually, in *The Return of the Native*, Wildeve, as an explorer of the New World and other colonies, is compared to "Amerigo Vespucci" (39), the Italian explorer.

We must also remember that when Wildeve says to Eustacia about his plan of travel later in the text, he refers to a variety of countries, in which the colonies of the Empire are also included :

"Travel. What a bright idea. Where will you go ?"

"From here to Paris, where I shall pass the winter and spring. Then I shall go to Italy, Greece, Egypt and Palestine before and then, by weather comes on. In the summer I shall go to America, and then, by a plan not yet settled I shall go to Australia and round to India. By that time I shall have begun to have had enough of it. Then I shall probably come back to Paris again ; and there I shall stay as long

as I can afford to.” (290)

Moreover, it is noteworthy that the resources of Wildevé's travel are the fortunes of eleven thousand pounds from his late uncle in Canada ; he even says : “I shall permanently invest nine thousand pounds [...]” (290). We do not know clearly how the money was originally gained and where Wildevé invests his money, but the words “Canada” and “America” infer an imperial atmosphere. Additionally, the setting of the date of the story for the 1840s is also suggestive of some agricultural plantations or even “the Gold Rush” in California. Considered thus, the drowning of Wildevé who gained a bountiful fortune from the colony can be interpreted as Hardy's severe criticism against the imperial myth of emigration.

III

Another significant myth concerning emigration is the function of emigration as an instrument to get out of trouble in England. Brantlinger considers such a function to be one of the reasons for people's emigration. However, in Hardy's texts, the function is also subverted as a myth. To illustrate this point, let us look at an episode concerning Angel Clare in *Tess of the d'Urbervilles*. In the text, Angel refuses to enter Cambridge like his brothers, “and having an acquaintance who was starting on a thriving life as a Colonial farmer it occurred to Angel that this might be a lead in the right direction” (92). Moreover, the narrator continues as follows :

Farming – either in the Colonies, America, or at home – farming at any rate, after becoming well-qualified for the business by a careful apprenticeship ; that was a vocation which would probably afford an independence without the sacrifice of what he valued even more than a competency – intellectual liberty. (92)

Consequently, Angel goes to Brazil for the purposes of both economic success and escape from problems in England. However, Hardy thinks of Angel's emigration to Brazil negatively, and describes a miserable reality in Brazil in contrast with the contemporary imperial myth of emigrants' living happy new lives in the colonies :

The eyes for which Tess's letter was intended were gazing at this time on a limitless expanse of country from the back of a mule which was bearing him from the interior of the South-American Continent towards the coast. His experiences of this strange land had been sad. The severe illness from which he had suffered shortly after his arrival, had never wholly left him, and he had by degrees almost decided to relinquish his hope of farming here, though, as long as the bare possibility existed of his remaining, he kept this change of view a secret from his parents.

The crowds of agricultural labourers who had come out to the country in his wake, dazzled by representations of easy independence, had suffered, died, and wasted away. He would see mothers from English farms, trudging along with their infants in their arms ; when the child would be stricken with fever and would die : the mother would pause to dig a hole in the loose earth with her bare hands, would bury the babe therein with the same natural grave-tools, shed one tear, and again trudge on.

Angel's original intention had not been emigration to Brazil, but a northern or eastern farm in his

own country. He had come to this place in a fit of desperation, the Brazil movement among the English agriculturists having by chance coincided with his desire to escape from his past existence. (*Tess* 267)

What is important here is that in the text Hardy reveals that “a red and blue placard setting forth the great advantages of the Empire of Brazil as a field for the emigrating agriculturist” (204) is a false one. “Land was offered there on exceptionally advantageous terms” (204), but happiness was only an image ; moreover, according to Hardy, “the discouraging reports of some farm-labourers who had emigrated thither and returned home within the twelve months” were right (208). For Hardy, emigration does not serve as the starter of a new happy life. Although Brantlinger states that “emigration is a positive outcome for many characters in Victorian novels” (*Victorian Literature* 27), in Hardy's case, the colonies do not offer the emigrants any advantages at all.

IV

As we have observed, in Hardy's texts, the imperial myth of emigration which offers a new life and economic success is destroyed. For Hardy, emigration was not something that promised a paradise for the emigrants, but instead it was one of the causes of their tragedy. But their failures of success in the colonies should not simply be ascribed to Hardy's personal opposition to emigration ; rather, Hardy's negative descriptions of emigrants in the texts were also concerned with a contemporary domestic agricultural problem which occurred as a result of emigration. Actually, both Wildevé and Angel forsake the land of England, and, because of this, suffer their tragedy in some sense.²

However, what is most important in this respect is that, in contrast to Wildevé and Angel, in Hardy's novels, there are at least two main characters that at first try to but at last decide not to emigrate to the colonies and avoid their own tragedy by remaining in England. I will discuss the functions of the two characters later. I will argue that we can see Hardy's anti-imperialism in relation to the agricultural problems.

Before discussing the topic, in the first place, it is useful for us to examine the condition of agriculture in England during and around the 1870s. A critical book titled *Thomas Hardy* written by Douglas Brown is very informative in this regard. Brown focuses upon the “agricultural labourers” (33) who move from countries to urban cities in Hardy's texts, and he feels there the crisis of agriculture in England. This book itself was written almost sixty years ago, but interestingly enough, Brown's critical viewpoint of domestic agricultural issues takes on a new important meaning when it is reconsidered from a postcolonial perspective.

Let us look at the historical condition between 1870 and 1902, which Brown calls “the agricultural tragedy” (31). As Brown argues, “[i]n 1846 Disraeli prophesied the ruin of agriculture as an inevitable consequence of Free Trade in corn” (32) ; then, “[i]n 1871 Disraeli was Prime Minister, but he had succumbed to the spirit of the times, and was bent upon commercial expansion and imperial power” (Brown 33). As a result, importantly, Brown states : “Soon, home produce could not compete with imported foodstuffs. Prices fell and farmers and landlords were gripped by uncertainty” (33). From this period on, what Brown calls “the exodus of agricultural labourers” started to occur (33). Curiously enough, regarding a solution to this crisis of agriculture, Merryn Williams notes : “Joseph Arch's Union [...] had encouraged many thousands of labourers to move to the towns or to emigrate abroad” (1). Here, in particular, we need to focus more on the latter destination of the emigrants ; for this emigration of agricultural laborers to foreign countries was the very cause of more predicaments for the agriculturists remaining in England. In fact, Williams comments about

this problem, quoting the words of Joseph Arch :

Others went to the Dominions or America, where they helped the foreign market to outsell English produce. 'The very men that the farmers said seven years ago they would starve into submission, are those who are now helping foreign growers to compete with the farmers at home,' Arch said at a meeting in 1878.

Helping the labourers to migrate or emigrate was really the central achievement of the Union, for it turned out to be too difficult to fight the farmers on their own ground. (11)

We can find from here that, surprisingly, one of the causes for the oppression on the domestic farmers lay in the emigration of the laborers and even the Union itself. The laborers continued to emigrate thereafter. Concerning this point, Williams states : "Most observers, including Arch himself, watched the depopulation of the countryside with dismay, but there was nothing they could do about it" (11).

This was the condition of agriculture in England between the 1870s and 80s. As Brown argues, "We had no agricultural leaders ; those who cared, and those who farmed, were impotent : and the feeling of human impotence is not strange to the reader of Hardy's novels" (37).

V

If we consider the theme of emigration in Hardy's texts in relation to the problem facing domestic agriculture, we can find out the reason why Hardy described his characters' emigration in a negative way. However, here we also need to examine two characters – Oak and Farfrae – who avoid tragedy by thinking better of emigrating to the United States. Why did Hardy make them remain in England and survive, unlike other characters who likewise wished to go abroad ? Most probably, it concerns the quality of Oak and Farfrae as being what Brown calls "agricultural leaders." In fact, in *Far From the Madding Crowd*, at first, Oak has a defect in character and makes some fatal mistakes as a farmer. But through many trials in the text, we can see his conquest of the defect in character and the gradual development of his quality as a bailiff. Indeed, during the storm, Oak struggles to protect the ricks from being damaged by the strong rain. If we see this storm as a metaphor of America which destroys domestic agriculture in England, the fighting against the storm might be understood as Oak's awakening as an agricultural leader. Thus far, Oak's development has been recognized mainly from a viewpoint of gender,³ but it is also important for us to reconsider it from the perspective of domestic agricultural issues. In this respect, Williams also notes about the characters in *Far From the Madding Crowd* :

The characters are defined in terms of their work more clearly than in any of the earlier novels : Gabriel and Bathsheba are skilled land-workers or overseers ; Boldwood is a respectable gentleman-farmer ; Troy is a drifting soldier who could have done much better things with his life. All of them are subordinated to the novel's central preoccupation – the care of the land and flocks, and the maintenance of the community in a condition of health. Individuals are characterized as good or bad directly through their contributions to these ends. (130)

Hardy sees Oak as the desirable figure of an agricultural leader ; on the other hand, as Williams comments, in

the storm, "Boldwood allows his own ricks to remain exposed because he is absorbed in his despair over Bathsheba's marriage" (133). Thus, in *Far From the Madding Crowd*, Hardy does not allow Oak to emigrate to the colonies or the United States. In the text, Oak says to Bathsheba that he is going to emigrate to California :

'It is that I may soon have to give up the management of your farm, Mrs Troy. The fact is, I am thinking of leaving England – not yet, you know – next spring.'

'Leaving England!' she said, in surprise and genuine disappointment. 'Why, Gabriel, what are you going to do that for ?'

'Well, I've thought it best,' Oak stammered out. 'California is the spot I've had in my mind to try.'
(453)

However, owing to Bathsheba's strong request, Oak finally decides to remain in England. As a result, Oak can waive his tragedy unlike the other emigrants in Hardy's later texts. From this, we can infer that Hardy tried to solve the domestic agricultural problem by stopping Oak from going abroad and by describing his happy life in England with the marriage plot in the end.

However, as Brown states, "in 1886 (the year of the publication of *The Mayor of Casterbridge*, a novel much concerned with the drama of the Corn Law conflicts) agriculture was ruined a second time" (35). Brown continues : "Imports extended to include frozen meat, cheese, butter and wool in large quantities. Farmers had exhausted their financial reserves, and Parliament could do nothing" (35). In such a predicament, in Hardy's *The Mayor of Casterbridge*, there again appears a man who contributes to the recovery from the bad agricultural condition in England – Donald Farfrae. What is interesting is that Farfrae, at first, thought of going to "America" to "try [his] fortune" (46). However, Henchard recognizes Farfrae's ability and tries to detain him from going out of England, asking Farfrae to be his "manager," while Farfrae refuses to accept his offer : "But no – it cannot be ! It cannot ! I want to see the warrld" (48). However, as a result of Henchard's consistent persuasion, Farfrae says in the end :

"I didn't expect such as this – I did not !" he said. "Surely there's destiny in it ? Should a man turrn against fate ? No ; I'll not go to America ; I'll stay and be your man !" (63)

This change of mind is important for Farfrae's later destiny ; most probably, it is due to Farfrae's suppression of his desire to go to America and his determination to contribute to solving the problems of England's agriculture that Farfrae can avoid tragedy in the text. On the contrary, Henchard gradually gets to regard Farfrae not as his "brother" (47) but as his rival, and his fortune starts to decline ; in the end, Henchard fails to deal with agricultural problems and collapses.

Consequently, Farfrae replaces Henchard, and becomes the mayor of Casterbridge. Thus, Hardy rewards Farfrae with the success within England. One of Hardy's purposes in the text was to describe a successful agricultural leader in England, not to recommend emigration to his characters ; thereby, Hardy attempted to restore the deteriorating domestic agricultural condition. However, here we can also see Hardy's "irony" about this condition ; for Farfrae is not English, but Scottish. That is to say, Farfrae is the outsider. Concerning this matter, Brown has argued as follows :

Farfrae is the invader, the stranger within the gates. The novelist regards him with detachment and some insight, but as an alien. The continuous irony is a local manifestation of a general vigour. It is an obvious irony, a thread easy to follow, one of the traditional arts of the balladist that came to Hardy almost instinctively. (65)

Brown reads *The Mayor of Casterbridge* as “the tale of the struggle between the native countryman and the alien invader” (65). However, in my opinion, unlike Brown’s, instead of thinking of Farfrae as the invader, Hardy probably considered him as the ideal agricultural leader, because it was not Henchard but Farfrae who actually solved the food problem. Yet, due to Farfrae’s nationality, Hardy had no alternative but to illustrate the ironical condition of domestic agriculture which depends on the outsider for its restoration and improvement. Moreover, it is also probable that Hardy attempted to make his readers recognize the urgent need to take some measures both to prevent the English agricultural laborers from going abroad and to train the English agricultural leaders.

VI

As we have thus far observed, by taking into consideration emigration in relation to tragedy falling on characters who go abroad in Hardy’s texts, we can confirm the gap between the optimistic imperial myth of emigration and the miserable conditions of the colonies described in the texts ; as a result, we can see Hardy’s criticism of the imperial myth of emigration. Moreover, we can also surmise that Hardy’s negative attitude toward emigration was deeply concerned with the problem of the agricultural crisis facing England at that time, rather than just based on his personal reasons. Probably, Hardy was conscious of a vicious cycle between the emigration of agricultural laborers and the worse domestic agricultural condition that would inevitably result from it, as we have seen in Brown’s and William’s arguments. Therefore, Hardy deliberately wrote *Far From the Madding Crowd* in the unstable period of 1874, and described a successful story of an agricultural hero who remains in England,⁴ while he described the tragedy of characters who slight domestic agriculture or try to abandon England for economic success and new lives in the colonies. Meanwhile, as we have already observed in Brown’s and William’s analyses, in the 1880s, more cheap grains were imported from overseas ; domestic agriculture was further oppressed, and many laborers engaged in agriculture went abroad. Under such circumstances, Hardy wrote *The Mayor of Casterbridge* to show his readers the predicament of domestic agriculture.

After the 1890s, the colonies or the United States in Hardy’s novels were depicted in a more negative way. For example, we can clearly observe the evidence from the case of Angel’s illness in Brazil. In fact, Angel fails in agriculture and, after all, returns to England ; then, he even causes another character’s tragedy. Here we can noticeably see Hardy’s severe criticism of the contemporary optimistic myth of emigration ; for Hardy, emigration itself was problematic for the Empire.⁵ Unlike the myth, it did not help solve a problem but brought about more critical domestic problems. So, Hardy consistently demystified the optimistic myth of emigration in many of his texts and constructed “the tragic myth of emigration” instead, by intentionally describing the “tragedy” of characters that emigrate or even try to emigrate to the colonies or the United States. By doing so, Hardy attempted to prevent further emigrants from leaving England. Consequently, in Hardy’s negative descriptions of emigration and his characters’ tragedy in the colonies, we can see Hardy’s anti-imperialism.

This paper is a revised version of Chapter 5 of my doctoral thesis which was submitted to Tohoku University in January 2013.

Notes

1. Concerning Magwitch, Rita S. Krandis states : "According to the plot, Magwitch commits a grave error in crossing the ocean again in order to rectify the transgressions of the past, presently manifested at home although not in the 'Elsewhere,' Australia. His presence in England threatens to destabilize the elaborate illusion of economic progress, a fantasy that also is complicitous in establishing the pervasiveness of normative class and gender ideologies" (126). According to Krandis, "the case seems to be that one must not revisit the dire conditions one has left behind" (126).
2. There concerns Hardy's anxiety and warning about the future of the agriculture in England. Actually, in *The Return of the Native*, Wildevre is planning to forsake "Wildevre's Patch," "a plot of land redeemed from the heath, and after long and laborious years brought into cultivation" (39). At that point in time, probably his tragic destiny was almost set by Hardy.
3. Rosemarie Morgan discusses Oak's function as "the puritanical censor" of Bathsheba (45).
4. Andrew Entice states about *Far From the Madding Crowd* : "In this novel, more than in any other, Hardy expresses his sheer (and short-lived) pleasure at the harmonies of man's agricultural partnership with nature" (149).
5. Citing Rider Haggard, Brown and Merryn Williams have mentioned Haggard's prediction of "the progressive deterioration of the race" as a result of laborers' emigration (Brown 38 ; Williams 27).

Works Cited

- Bownas, Jane L. *Thomas Hardy and Empire : The Representation of Imperial Themes in the Work of Thomas Hardy*. Farnham : Ashgate, 2012. Print.
- Brantlinger, Patrick. *Rule of Darkness : British Literature and Imperialism, 1830-1914*. 1988. Ithaca : Cornell University Press, 1990. Print.
- . *Victorian Literature and Postcolonial Studies*. Edinburgh : Edinburgh University Press, 2009. Print.
- Brown, Douglas. *Thomas Hardy*. London : Longmans, Green and Co, 1954. Print.
- Entice, Andrew. "The Farming Community." *Casebook Series. Thomas Hardy : Three Pastoral Novels*. Ed. R.P. Draper. Basingstoke : Macmillan, 1987. 146-56. Print.
- Hardy, Thomas. *Far From the Madding Crowd*. Ed. Ronald Blythe. 1978. Harmondsworth : Penguin Books, 1985. Print.
- . *Tess of the d'Urbervilles*. Ed. Scott Elledge. 1965. New York : W. W. Norton & Company, Inc., 1991. Print.
- . *The Mayor of Casterbridge*. Ed. Keith Wilson. Harmondsworth : Penguin Books, 1997. Print.
- . *The Return of the Native*. Ed. Simon Gatrell. 1990. Oxford : Oxford University Press, 2005. Print.
- Krandis, Rita S. *The Victorian Spinster and Colonial Emigration : Contested Subjects*. Basingstoke : Macmillan, 1999. Print.
- Morgan, Rosemarie. *Women and Sexuality in the Novels of Thomas Hardy*. 1988. London : Routledge, 1991. Print.
- Orel, Harold, ed. *Thomas Hardy's Personal Writings*. London : Macmillan, 1990. Print.
- Page, Norman, ed. *Oxford Reader's Companion to Hardy*. Oxford : Oxford University Press, 2000. Print.
- Pinion, F. B. *A Hardy Companion : A Guide to the Works of Thomas Hardy and Their Background*. 1968. London : Macmillan, 1984. Print.
- Williams, Merryn. *Thomas Hardy and Rural England*. 1972. London : Macmillan, 1974. Print.

書誌的変遷註記

東北工業大学紀要 は、昭和 40（1965）年に創刊されたが、これまでに 2 回、出版形態の変更があった。

その書誌的変遷の経過は次のとおりである。

第Ⅰ期〔昭和 40 年 3 月―昭和 43 年 7 月〕は、合集形態により、年 1 冊、全 4 冊発行した。

第Ⅱ期〔昭和 43 年 12 月―昭和 55 年 3 月〕は、**A**～**F** の主題別 6 部門に分離し、1 冊 1 論文のモノグラフ・シリーズ形態によりそれぞれ逐次番号を付して不定期発行した。全 76 冊。部門により創刊時期・冊数が異なる。

第Ⅲ期〔昭和 56 年 3 月―〕からは、再度、合集形態となり、**I**：理工学編、**II**：人文社会科学編の 2 分冊に再編され、年 1 回定期発行している。

巻次は継承せず、各期とも独自のナンバーをもつ。

Bibliographical Notes
on

Memoirs of the Tohoku Institute of Technology

The format of this journal has been substantially revised two times since its initial publication in 1965 :

- I. March 1965―July 1968 : A total of 4 annual issues were published under the title of *Bulletin of the Tohoku Institute of Technology*.
- II. December 1968―March 1980 : A total of 76 monographs were published unperiodically. These were classified under six fields of research lettered **A** through **F**. The starting date and the number of the monographs differ for each field.
- III. March 1981 to date : The present series is published annually under the title of *Memoirs of the Tohoku Institute of Technology*, and consists of two separate volumes : **Ser. I**, Science and Engineering, and **Ser. II**, Humanities and Social Sciences.

Publications are numbered consecutively within each of the above formats.

編集委員長（Editor in Chief）

高 橋 恒 夫（Tsuneo TAKAHASHI）

編 集 委 員（Editors）

佐 藤 夏 子（Natsuko SATO）
加 納 慎一郎（Shinichiro KANOH）
三 浦 直 樹（Naoki MIURA）
小 関 公 明（Kimiaki KOSEKI）
森 田 哲 夫（Tetsuo MORITA）
加 藤 善 大（Zenta KATO）
堀 江 政 広（Masahiro HORIE）
福 留 邦 洋（Kunihiro FUKUTOME）
本 田 春 彦（Haruhiko HONDA）

2014(平成 26)年 3 月 31 日 発行 **東北工業大学紀要 II：人文社会科学編 第 34 号**

発 行 者 東 北 工 業 大 学 〒 982-8577 仙台市太白区八木山香澄町 35 番 1 号

編集委員代表 高 橋 恒 夫

寄 贈 交 換 東北工業大学附属図書館 ☎（022）305-3177

事 務 担 当

印 刷 所 笹 氣 出 版 印 刷 株 式 会 社 〒 984-0011 仙台市若林区六丁の目西町 8 番 45 号